

塔の岡古墳群

—広島市安佐北区白木町所在—

1999

財団法人広島市文化財団



a 第1号古墳石室内（北から）



b 第1号古墳須恵器床（東から）



a 第1号古墳石積遺構（北から）



b 第6号古墳石積遺構（南東から）

は し が き

広島市安佐北区白木町は、町域の東寄りに、太田川の支流である流れの美しい三篠川が走り、またその両側を白木山に代表される山々が囲むなど、豊富な自然に恵まれた町です。一方で、同町は三田郷の名ですでに古代の記録にも登場していますが、その歴史はさらにさかのぼるようで、広島市内でも有数の古墳の集中地となっています。現在まで、そのほとんどは調査されず保存されてきましたが、今回、新たに計画された農道整備事業によって、塔の岡古墳群のうちの2基が工事区域にかかり、発掘調査を行うことになりました。

調査の結果、2基の古墳が古墳時代後半に造られた横穴式石室を持つ古墳であることが明らかになりました。そのうちの1つの古墳の石室には、部屋の中央に板石を使って仕切りをしたり、割られた土器の破片が床に敷かれたりしていました。このような事例は、広島県でも、県北の江の川流域で確認されており、この古墳の造営にあたって県北地域との関係があることがわかりました。また、土器・玉類・鉄器などの遺物も出土しており、市内において横穴式石室の調査が少ないなかで、当時の広島における生活や社会を考察するうえで貴重な資料を得ることができました。

この報告書が一人でも多くの方に活用され、広島県の歴史の理解を深めるための一助になれば幸いです。

最後になりましたが、本調査にあたって御指導・御助言をいただきました諸先生方、御協力いただきました関係機関・関係者の方々ならびに調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

平成 11 年 3 月

財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課

例 言

1. 本書は、広島市安佐北区白木町大字市川字節山における市川農道改良工事に伴い、平成9年度に実施した塔の岡古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、広島市安佐北区役所農林土木課から委託を受け、財団法人広島市歴史科学教育事業団が実施した。整理作業は、広島市安佐北区役所農林課から委託を受け、財団法人広島市文化財団文化財課（平成10年度4月1日付で、財団法人広島市歴史科学教育事業団と財団法人広島市文化振興事業団の統合により、財団法人広島市文化財団が発足）が実施した。
3. 本書の執筆は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは田村規充が、Ⅳは田村・高下洋一がそれぞれ分担して実施した。編集は高下の補佐のもと、田村が実施した。
4. 遺構の実測及び写真撮影は、高下・田村が実施し、漁野洋海の協力を得た。また遺物の実測及び図面の製図は、高下・田村・岡野孝子が実施し、写真撮影は荒川正己・田村が実施した。
5. 第29図に掲載した土器の実測及び製図は広島市二葉公民館石田彰紀館長から、図版24の写真は広島市教育委員会文化課若島一則文化財係長から提供を受けた。
6. 第5図及び第15図は、株式会社パスコに委託したもので、一部改変して掲載した。
7. 本書に掲載した航空写真撮影は、スタジオ・ユニに委託した。
8. 土器内容物に関する分析調査は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、付編①に報告を掲載した。
9. 本書挿図に使用した方位は、第1・2・28図以外はすべて磁北である。
10. 第1図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1の地形図（可部）を複製した。第2図は、広島市発行の2,500分の1の広島市平面図（D/E 15・16）を複製した。第28図は、建設省国土地理院発行の25,000分の1の地形図（井原市）を複製・縮尺した。
11. 本古墳群発掘調査で得られた資料は、広島市教育委員会から委託を受けて、財団法人広島市文化財団文化財課において保管している。

目 次

I はじめに	1
II 位置と環境	3
III 遺構と遺物	7
IV ま と め	57
付編 ①科学分析	
塔の岡古墳群第1号・第6号古墳出土遺物に関する自然科学分析調査	65
②白木町内出土陶質土器	72

付 表 目 次

第1表 第1号古墳出土遺物観察表	32
集2表 第6号古墳出土遺物観察表	54

図 版 目 次

巻頭図版1 a 第1号古墳石室内	図版10 a 第6号古墳調査前
b 第1号古墳須恵器床	b 第6号古墳全景
巻頭図版2 a 第1号古墳石積遺構	図版11 a 第6号古墳石積遺構
b 第6号古墳石積遺構	b 第6号古墳石積遺構
図版表紙 塔の岡古墳群（航空写真）	図版12 a 第6号古墳石室天井石
図版1 塔の岡第1号古墳・第6号古墳（航空写真）	b 第6号古墳石室奥壁
図版2 a 第1号古墳全景	図版13 a 第6号古墳石室西側壁
b 第1号古墳全景	b 第6号古墳石室東側壁
図版3 a 第1号古墳石積遺構	図版14 a 第6号古墳石室床面
b 第1号古墳石積遺構	b 第6号古墳石室閉塞右
図版4 a 第1号古墳石室天井石	図版15 a 第6号古墳石室内遺物出土状況
b 第1号古墳石室全景	b 第6号古墳周溝遺物出土状況
図版5 a 第1号古墳石室奥壁	図版16 出土遺物（1）
b 第1号古墳石室西側壁	図版17 出土遺物（2）
図版6 a 第1号古墳石室東側壁	図版18 出土遺物（3）
b 第1号古墳石室神石	図版19 出土遺物（4）
図版7 a 第1号古墳石室内仕切石	図版20 出土遺物（5）
b 第1号古墳石室羨道閉塞石	図版21 出土遺物（6）
図版8 a 第2号古墳石室内遺物出土状況	図版22 出土遺物（7）
b 第1号古墳石室仕切石南遺物出土状況	図版23 出土遺物（8）
図版9 a 第1号古墳石室須恵器床	図版24 白木町内出土陶質土器
b 第1号古墳石室羨道遺物出土状況	

挿 図 目 次

第 1 図	塔の岡古墳群周辺主要遺跡分布図	4	第 16 図	第 1 号古墳出土遺物実測図（6）	29
集 2 図	塔の岡古墳群位置図	5	集 17 図	第 1 号古墳出土遺物実測図（7）	31
第 3 図	第 1 号古墳実測図（調査前）	8	第 18 図	第 6 号古墳実測図（調査前）	39
集 4 図	第 1 号古墳実測図	9	集 19 図	第 6 号古墳実測図	40
第 5 図	第 1 号古墳墳丘土層断面図	10	第 20 図	第 6 号古墳墳丘土層断面図	41
第 6 図	第 1 号古墳石積遺構実測図	11	第 21 図	第 6 号古墳石積遺構実測図	43
第 7 図	第 1 号古墳石室実測図	13	第 22 図	第 6 号古墳石室実測図	45
第 8 図	第 1 号古墳石室閉塞石実測図	16	第 23 図	第 6 号古墳石室閉塞石実測図	47
第 9 図	第 1 号古墳石室内遺物出土状況実測図	18	第 24 図	第 6 号古墳石室内遺物出土状況実測図	49
第 10 図	第 1 号古墳須恵器床器種別出土状況実測図	19	第 25 図	第 6 号古墳墳丘裾遺物出土状況実測図	50
集 11 図	第 1 号古墳出土遺物実測図（1）	23	集 26 図	第 6 号古墳出土遺物実測図（1）	52
集 12 図	第 1 号古墳出土遺物実測図（2）	24	集 27 図	第 6 号古墳出土遺物実測図（2）	53
第 13 図	第 1 号古墳出土遺物実測図（3）	25	第 28 図	陶質土器出土位置図	72
第 14 図	第 1 号古墳出土遺物実測図（4）	26	第 29 図	白木町内出土陶質土器実測図	72
第 15 図	第 1 号古墳出土遺物実測図（5）	28			

I はじめに

広島市教育委員会（以下市教委とする）は、平成8年8月19日に、広島市安佐北区役所農林土木課（以下安佐北区役所とする）から「市川地区ふるさと農道整備事業」工事区域内における文化財等の有無及び取り扱いについて照会を受けた。市教委は、当該区域内に周知遺跡として塔の岡古墳群が存在し、計画範囲には4基の古墳がかかることを確認し、同年10月1日に、安佐北区役所に対して、この旨を回答した。遺跡の取扱いについて、市教委と安佐北区役所は協議をしたが、すでに用地の買収は終了しており、計画の変更は一部をずらすことのみで留まった。このため4基のうち第1号古墳と第6号古墳の2基については、現状保存は困難であるとの結論に達し、記録保存の措置を講ずることとなった。安佐北区役所は、平成9年4月6日付で、財団法人広島市歴史科学教育事業団（以下事業団とする）に発掘調査及び報告書作成の実施を依頼した。これを受けて、事業団では現地調査を平成9年5月から同年9月にかけて実施した。報告書作成は、事業団から業務を移行した財団法人広島市文化財団が、平成10年4月から平成11年3月にかけて実施した。

- 調査委託者 広島市安佐北区役所 農林土木課（平成9年度）
広島市安佐北区役所 農林課（平成10年度）
- 調査主体 財団法人広島市歴史科学教育事業団（平成9年度）
財団法人広島市文化財団（平成10年度）
- 調査担当課 財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課（平成9年度）
財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課（平成10年度）
- 調査関係者 平成9年度
中原 照雄 常務理事（現 広島市佐伯区長）
佐川 清 文化財課長
宮田 浩二 文化財課事業係長
- 平成10年度
竹本 輝男 常務理事
堂官 正昭 文化科学部長
佐川 清 文化財課長
宮田 浩二 文化財課主任
- 調査者 高下 洋一 文化財課学芸員
田村 規充 文化財課学芸員
- 調査補助員（順不同）
芥川ツヤコ 石佐古光国 石原正行 石原光江 今岡哲 植木真澄
川手ヨシエ 川手好春 久保田弘子 佐伯智弘 佐久間寿美子
佐々木一二三 高岡浩子 宅見陽子戸井逸子 中野泰昭 見崎時春
山下俊夫 漁野洋海 河合淳子 酒本由理部 菅原彰子 住川香代子
橋本礼子

また、広島市安佐北区役所農林課、広島市教育委員会文化課、白木公民館の職員の方々には、調査を円滑に進めるにあたり多大なご配慮とご協力をいただいた。さらに、調査期間中及び報告書作成にあたり、埋蔵文化財発掘調査指導委員会の広島大学名誉教授潮見浩先生、同文学部教授川越哲志先生、同教授河瀬正利先生、同助教授古瀬清秀先生から貴重な御指導、御助言をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

Ⅱ 位置と環境

1. 自然的・地理的環境

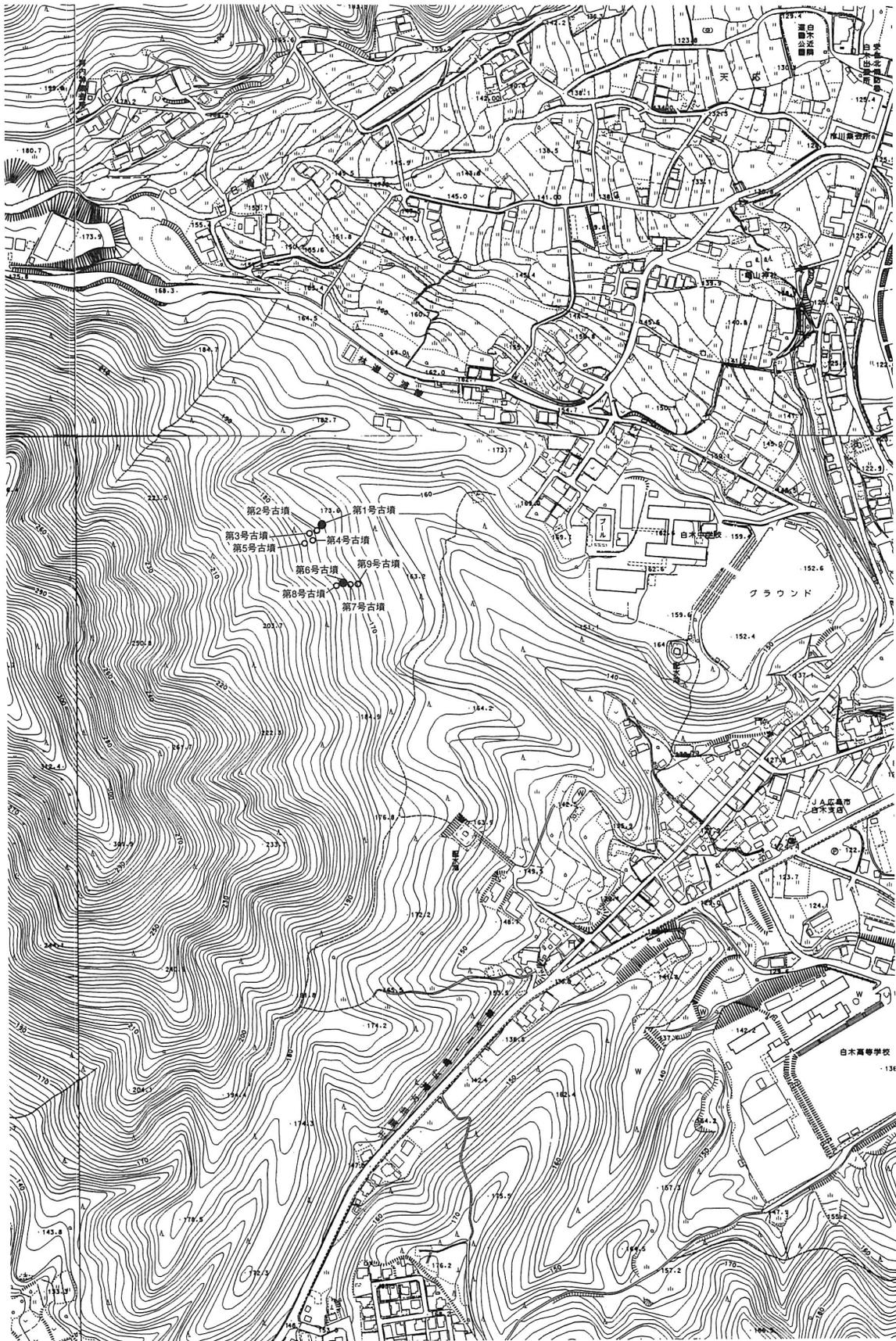
塔の岡古墳群は広島市安佐北区白木町大字市川学節山に所在する。白木町は広島市の北東に位置し、町域の南端に所在する白木山（標高889.8m）を最高峰とし、500級の山々を中心に南南西から北北東にかけて大きく三つの山系が連なっている。主水系は太田川の支流である三篠川で、高田郡向原町に源を発し、井原地区において栄堂川、秋山地区で関川、三田地区で河津川とそれぞれ合流し、北北東から南南西に向けて流れている。人家や水田はそれらの河川沿いの沖積地に集中している。地質的には町域の北部には古生層の分布が見られ、中部は中生層の古期花筒岩類、西部は安山岩、南部は高田流紋岩に覆われている¹⁾。またJ R芸備線志和口駅付近には新生層の志和口礫層が分布している。交通は県道31号線及びJ R芸備線がほぼ三篠川沿いに町域の南北を貫き、北の三次市と南の広島市中心部を結んでいる。

本古墳群は、市川村山（標高629.4m）から南南東へ派生した山系のうち、標高327mの山塊から東へ派生した丘陵緩斜面上に位置している。標高は170～180mで、南東側平地からの比高は約50mである。北では日浦川が、東では関川が三篠川と合流しており、眼下にはそれら河川の造りだした比較的広い沖積地が広がっている。南側は旭山（標高294.0m）との間に谷地を形成している。地質的には古期花崗岩のうち、淡紅色を呈する鎌倉寺山花樹岩が分布する。また、すぐ東側には志和口礫層が分布している。また、古墳群の立地する市川地区の東に隣接する小越地区から南へは関川沿いに東広島市志和町へ抜ける道路が通る。この市川地区は県道31号線との分岐点となっており、古くから交通の要衝であったと考えられる。

2. 歴史的環境（白木町内の遺跡概要）

白木町内で現在確認されている遺跡のうち、確認されているのは弥生時代以降の遺跡である。弥生時代の遺跡としてはまず農道建設工事に伴い調査された佐久良遺跡（現在は消滅）がある。箱式石棺10基、石蓋土壙1基が確認され、人骨9体、弥生土器等が出土した。弥生時代中期後半頃の墳墓群と考えられている²⁾。また、旭山遺跡からは磨石、敵行、土器片が発見されており、弥生時代後期の遺跡と考えられている³⁾。また、今回の調査において、明確な遺構は確認できなかったが、弥生時代後期のものと考えられる土器片が墳丘盛土中などから出土しており、本古墳群周辺にも弥生時代の遺構が存在する可能性が高い。

古墳時代の遺跡では、確認されているだけでも80基近くの古墳が存在する。そのほとんどは古墳時代後半期の横穴式石室を埋葬主体とする古墳である。しかし、発掘調査例は少なく、個々の古墳の詳細については不明な点が多い。ただ、これらの古墳の中には市内でも有数の規模のものがあり、かなりの勢力の存在が背景として考えられる。古墳の大半は井原地区に集中し、主に三篠川沿いに多く分布する。新宮古墳群（4基）、光仙寺古墳群（9基）、戸石古墳群（13基）、日詰古墳群、市古



第2図 塔の岡古墳群位置図 (S = 1 : 5,000)

墳群（21基）、録泉古墳群（3基）、小田古墳群（3基）、下甲田古墳群（2基）、中束古墳群、塚ヶ原古墳群（4基）などが分布する。このうち録泉古墳群と小田古墳群以外は、横穴式石室を埋葬主体とする古墳である⁴⁾。志路地区では4基の古墳から成る宮崎古墳群が所在する。埋葬主体は横穴式石室または箱式石棺である。いずれも半壊をいしは消滅しているが、第1号古墳（箱式石棺を埋葬主体とする）からは人骨や刀が出土したといわれている⁵⁾。

塔の岡古墳群周辺の市川・小越・秋山地区においては、実相寺古墳群、旭山古墳、須沢古墳群などが分布する。実相寺古墳群は8基の古墳から成り、全壊により確認できない1基を除き、埋葬主体は全て横穴式石室である。中でも第2号古墳の横穴式石室は、長さ7.2m、玄室幅2m、玄室高2.6m、羨道部幅1.6m、羨道部高1.75mの両袖式で、市内で現在確認されている横穴式石室では最大規模である。旭山古墳は古墳時代後期の円墳で、水道工事中に長さ0.7m、幅0.4m、深さ0.3mの箱式石棺と男性と考えられる頭骨が発見されている。なお、今回の調査中略の岡古墳群の周囲で踏査をした結果、横穴式石室を埋葬主体とする古墳（円墳）を新たに2基（節山第1号古墳、節山第2号古墳）確認した。町内、特に本古墳群周辺にはまだ多くの古墳が存在している可能性がある。

奈良期の遺跡としては、前述の佐久良遺跡からは埋葬施設と考えられる第2号土壇が確認されている。またこの遺構等からは高台を付した杯身等の須恵器も出土している⁶⁾。

なお、白木町は10世紀前半編纂の『倭名類聚抄』によれば、安芸国における七郡のうち高田郡に属し、七つの郷の一つとして「三田」郷という記載で登場する。市川地区に「高田」「本郷」という地名が残っており、高田郡の中心地であったと考えられている。また、当地は高田郡司として派遣された藤原氏の本拠地でもある⁷⁾。

注

1. 大道昌「白木町の自然」『白木町史』広島市 1980年

なお、以下地質的事項はすべて本文献からの引用である。

2. 広島市教育委員会『佐久良遺跡発掘調査報告』1984年

3. 菊山肇「白木町の遺物と古墳」『白木町史』広島市 1980年

4. 広島市教育委員会『広島市遺跡分布地図』1990年

5. 注3とおなじ。

6. 注2とおなじ。

7. 福尾猛市郎『『倭名類聚抄』の郡郷名』『広島県史』原始古代 広島県 1980年

Ⅲ 遺構と遺物

1. 古墳群の立地

塔の岡古墳群は広島市安佐北区白木町大字市川字節山に所在する。現状で9基の古墳が確認されており、すべてが横穴式石室を埋葬主体とする古墳である。本古墳群は白木町の中央部に位置する市川村山（標高629.4m）から南南東へ派生した山系のうち、標高327mの山塊から派生するゆるやかな丘陵尾根上ないしは緩斜面上に立地する。古墳群の南北両側、特に第1号古墳の北側には、谷地形をはさんでやや小高い尾根が平行してあるため、古墳群からの眺望は良好とはいえない。第1号古墳は古墳群中最北に位置し、南西に向かって第2号古墳（半壊）、第3号古墳、第4号古墳、第5号古墳がほぼ等間隔に分布する。第6～9号古墳は谷地をはさんで南側の丘陵尾根上に立地しており、第1号古墳からは水平距離で約60m離れている。第6号古墳の南西に第8号古墳（半壊）が隣接し、また北東に第7号古墳（半壊）が隣接し、さらに第9号古墳（半壊）が分布している。

2. 調査概要

第1号古墳の調査は、墳頂部南側盗掘孔で観察された石室の中軸を基準線とし、墳丘のほぼ中心部においてこれに直交する線を設け、土層観察用の畦を設定して実施した。調査の結果、墳丘の規模が、南北12.1m、東西10.8mの楕円形の円墳で、南西方向に周溝が設けられていることが明らかになった。墳丘盛土中には石積遺構（石刻）がめぐっていた。墳頂部南側盗掘孔の存在から、本古墳は入口が南側であると想定したが、埋葬施設は北に入口をもち、東側に袖を持つ片袖式の横穴式石室であることが明らかになった。南側の盗掘孔の存在から、石室内はほとんど攪乱されていると考えていたが、入口側はほぼ未盗掘の状態であったこともあり、一部（仕切りの南側）を除いて、石室内における遺存状態は良好であった。石室内のうち玄室中央付近には障石による仕切りがなされ、またその仕切りの北側西半部には須恵器床が確認された。遺物は石室内などから須恵器（杯蓋、杯身、壺蓋、低頸壺、長頸壺、脚付長頸壺、提瓶、平版、横瓶、甕）、鉄製品（鏃、刀、鐔、穂摘具、釘）、装飾品（耳環、勾玉、切子玉、管玉、小玉）が出土した。その他に、弥生土器の破片が墳丘盛土中などから出土している。

第6号古墳は、すでに開口していたため、石室の中軸を基準線とし、墳丘上のほぼ中心部において、これに直交する線を設け、土層観察用の畦を設定して調査を実施した。墳丘の規模が、北西－南東13.1m、南西－北東10.6mの方墳で、南西方向に周溝が設けられている。墳丘盛土中には、石積遺構（行列）が、石室入口東西両側を中心に認められた。埋葬施設は、南に開口する無神式の横穴式石室である。埋葬床面は上下二面確認され、上面においては2枚の大型の板状の石が石室主軸に対して平行に置かれていた。遺物は調査前から開口していたこともあり、石室内からはほとんど認められなかったが、周溝内や墳丘南側の谷地を中心に、須恵器（杯蓋、杯身、高林、壺蓋、低頭蓋、平版、甕）、土師器（椀、長頸壺）、鉄製品（鏃、轡、鋏、金具）が出土している。

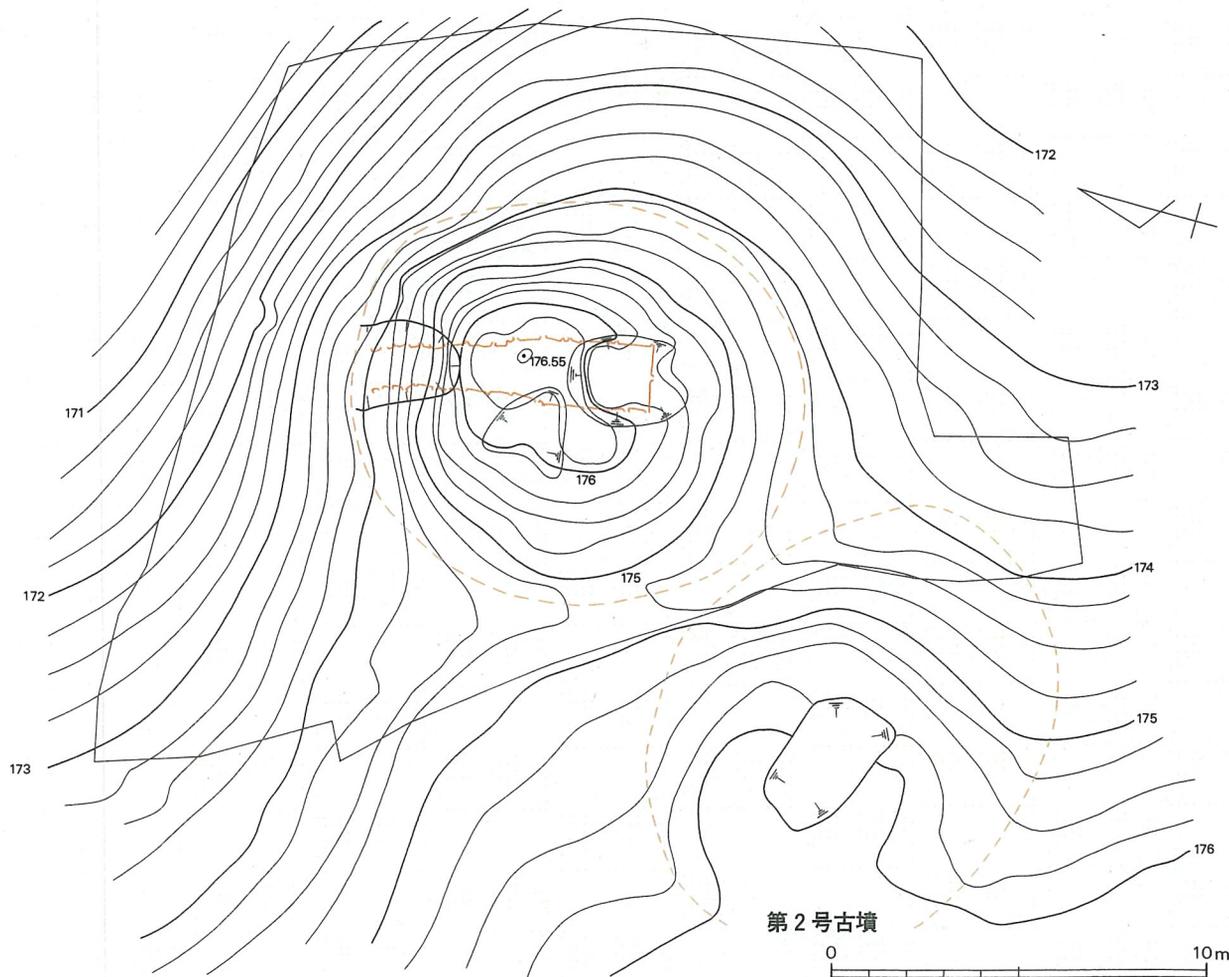
3. 塔の岡第1号古墳

(1) 位置と現状 (第3図・図版2-a)

第1号古墳は、西の山塊から東方向にゆるやかに派生する丘陵尾根上に立地する。墳頂部で、標高約176mである。尾根は全体にゆるやかな傾斜を保つが、墳丘の北東から東側にかけては、比較的傾斜が急になっている。北側眼下の谷地との比高は約5mである。墳丘から、水平距離で北側に約60mには小高い尾根が古墳の立地する尾根とほぼ平行に延びており、北方への景観を遮っている。南西には第2号古墳が隣接し、墳丘中心間で約14m離れている。墳丘は、判別できる遺存状態を保っていたが、墳頂部南面に2m四方の盗掘孔があったため、南に開口する横穴式石室を埋葬主体とする古墳であり、内部はかなり攪乱されていると思われた。

(2) 墳丘・周溝 (第4, 5図・図版2-b)

墳丘規模は南北約12.1m、東西約10.8mで、平面形がやや南北方向に長い楕円形の円墳である。墳丘の高さは、東側墳裾から約2.6m、西側墳裾から約1.8mである。墳丘南西側の裾には、約7mにわたり、深さ0.1m前後、幅0.1~0.7mの周溝がめぐる。周溝は墳丘の東側において、尾根頂部を



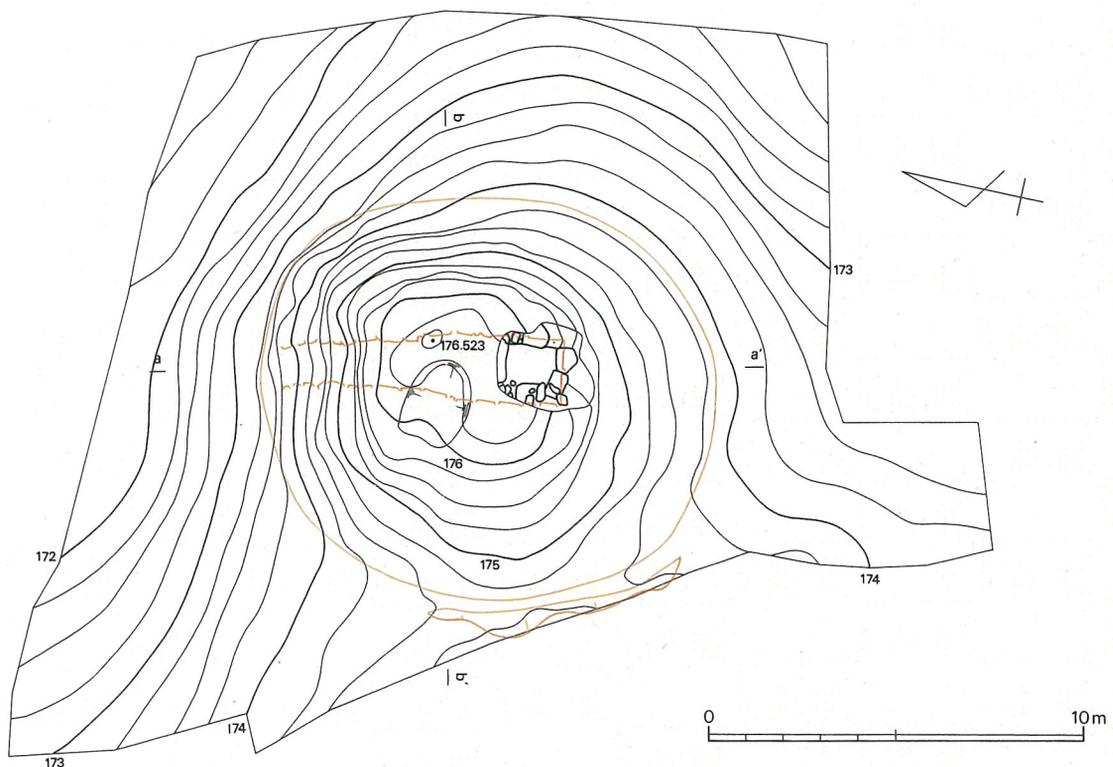
第3図 第1号古墳実測図 (調査前, S = 1 : 200)

中心に弧を描いてめぐり、丘陵の南北傾斜とともに消滅する。この周溝の一部が南西に隣接する第2号古墳の墳丘盛土を切っていることから、時期的には第1号古墳の方が新しい。

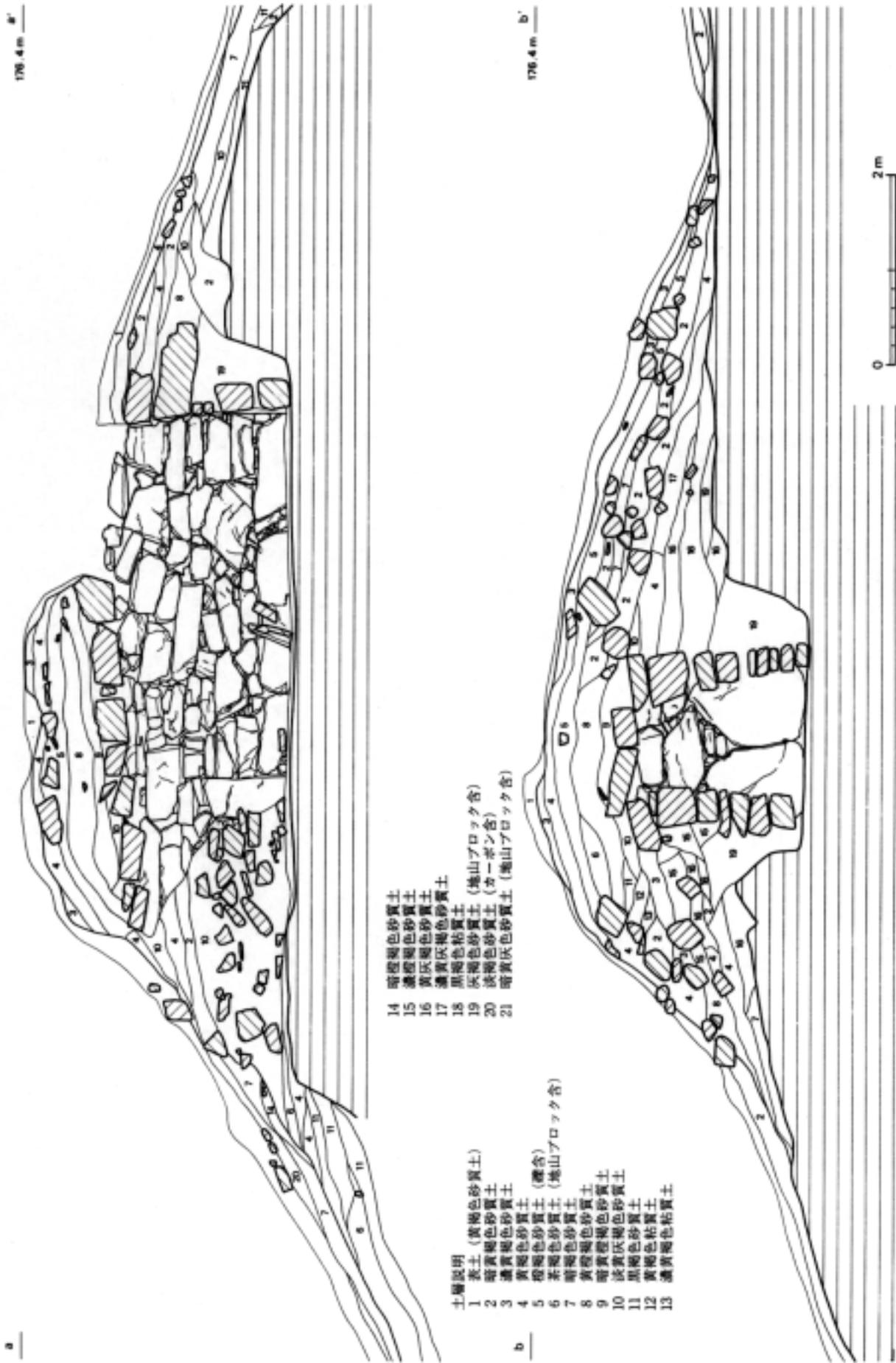
墳丘は丘陵の尾根を利用して造られている。丘陵尾根の高い方、すなわち西側を掘削して、平坦面を整え、墳丘基準面を形成している。そして丘陵尾根の主軸に対し、直交方向に石室を構築するための掘り方が穿たれている。掘り方は基底面のほぼ中央に掘り込まれているが、北側はほぼ開口部付近で消滅する。平面形態は、長さ約7m、幅約4mの「コ」字状を呈し、深さは南側で最も深く約1.2mである。墳丘の盛土は、墳丘基底面に行われ、現状で約1.5m残存し、古墳の築造過程に合わせて、大きく3段階に分かれる。まず第1段階は、石室の構築作業と合わせて行われる石室の裏込め作業であり、第2段階は、天井石架構終了後に行われる天井石の被覆で、次に述べる石積みもこの段階に実施される。第3段階は、最終工程として墳形を整える作業が実施され、天井石上に確認された礫群もこの段階で設置されている。

(3) 石積遺構（石列）（第6図・図版3）

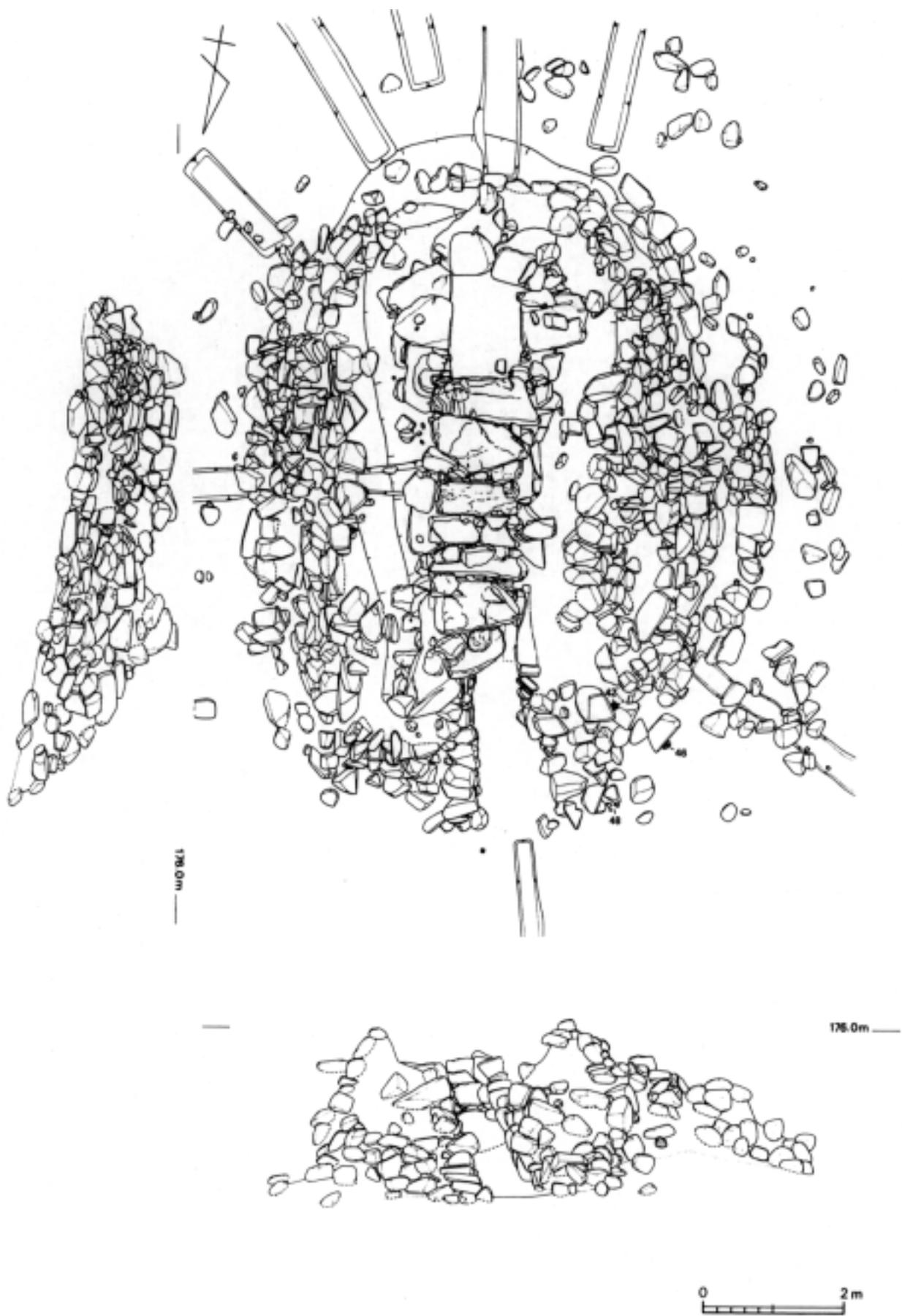
墳丘盛土中には、石積みと呼ぶにふさわしい石列がめぐっていた。ここでは石積遺構と呼称する。10~40cmの石材を多量に使用しており、墳形もその影響を受けている。この石積遺構は、ほぼ全周するが、特に西面と東面に集中している。両石積遺構とも石室前面の壁先端部から、幅約1~2mの範囲で積まれる。東西両面は、様相の違いがみられる。すなわち、西面は石室前面の西側壁端部から墳丘に沿ってめぐっており、弧を描く。約38度の傾斜面に沿って、高さ1.5~2m程度に積み上げられている。その石列の裾から20cm前後離れた外側にも、1~3段の石列があり、約7mにわ



第4図 第1号古墳実測図 (S = 1 : 200)



第5図 第1号古墳墳丘土層断面図 (S = 1 : 60)



第6図 第1号古墳石積遺構実測図 (S = 1 : 80)

※網目は土器 (番号は遺物番号に対応する)

たって弧状にめぐっている。一方、東面は石室前面の東側壁端部から約1.5 m東に延び、この位置でほぼ直角に南方向に曲がり、石室と平行するように約5 m延びる。南西側については約60度の傾斜面に沿って、弧を描いてめぐっている。高さは1.2～2 m程度積み上げられている。なお南面は少なく、1～2段程度で西面と東面とをつないでいる。西面の石刻は、緩やかな丘陵傾斜面にめぐっていることから葺石状を呈するが、東面は急な傾斜面であることから、どちらかといえば石垣状に密集して積まれている。

(4) 埋葬施設 (第7, 8図・図版4～7)

本古墳の埋葬施設は北方向(N 11.5° W)に開口する横穴式石室である。掘り方の若干東寄りに石室は構築されている。本石室は、奥壁から3.94 m南の東壁に設置された神石において、約15 cm程度の段を有する片袖式である。神石は高さ約1 m、幅約0.4 mの直立するやや大型の石材と、その上面の2枚の板状の石で形成されており、この位置で玄室部分と羨道部分を明確に区分している。石室の現存する長さは、東側壁で7.61 m、西側壁で7.64 mである。また幅は奥壁側が1.68 m、玄室北側が1.35 m、羨道神石箇所は1.2 m、石室入口は0.6 mである。高さは奥壁側で1.7 m、玄室入口箇所で1.6 mである。なお、天井石が残存する箇所では最高は1.9 mであり、同じく最低は1.6 mである。

a. 天井石

天井石は7枚が残存していた。残存する最南端の天井石と奥壁上面との間は1.6 mあるが、残存する天井石の幅から推定した場合、さらに3枚は存在したと考えられる。ちなみに玄室内からは天井石と考えられる大型の崩落石一石を検出した。天井石の隙間には人頭人、拳大の石材を詰めている。残存する天井石は、南端から見て1石目は長さ1.5 m×幅0.65 m、厚さ0.44 m、2石目は長さ1.25 m×幅0.75 m、厚さ0.4 m、3石目から5石目は長さ1.15～1.3 m、幅0.38～0.45 m、厚さ0.22～0.35 mの石材で形状の揃ったものを架構している。4石目までは天井石下面をほぼ揃えているが、5石目は約20 cmの段差がつく。この天井石の段差は、ほぼ東側壁の神石箇所にあたり、石室の高さにおいても玄室と羨道を区画している。また6石目は長さ1.23 m×幅0.7 m、厚さ0.22 m、最北にあたる7石目は、天井石中最小で長さ0.8 m×幅0.4 m、厚さ0.17 mである。なお、入口側の天井石2枚は、架構された西側壁最上段の石材が縦方向に割れたため、西側に傾斜していた。

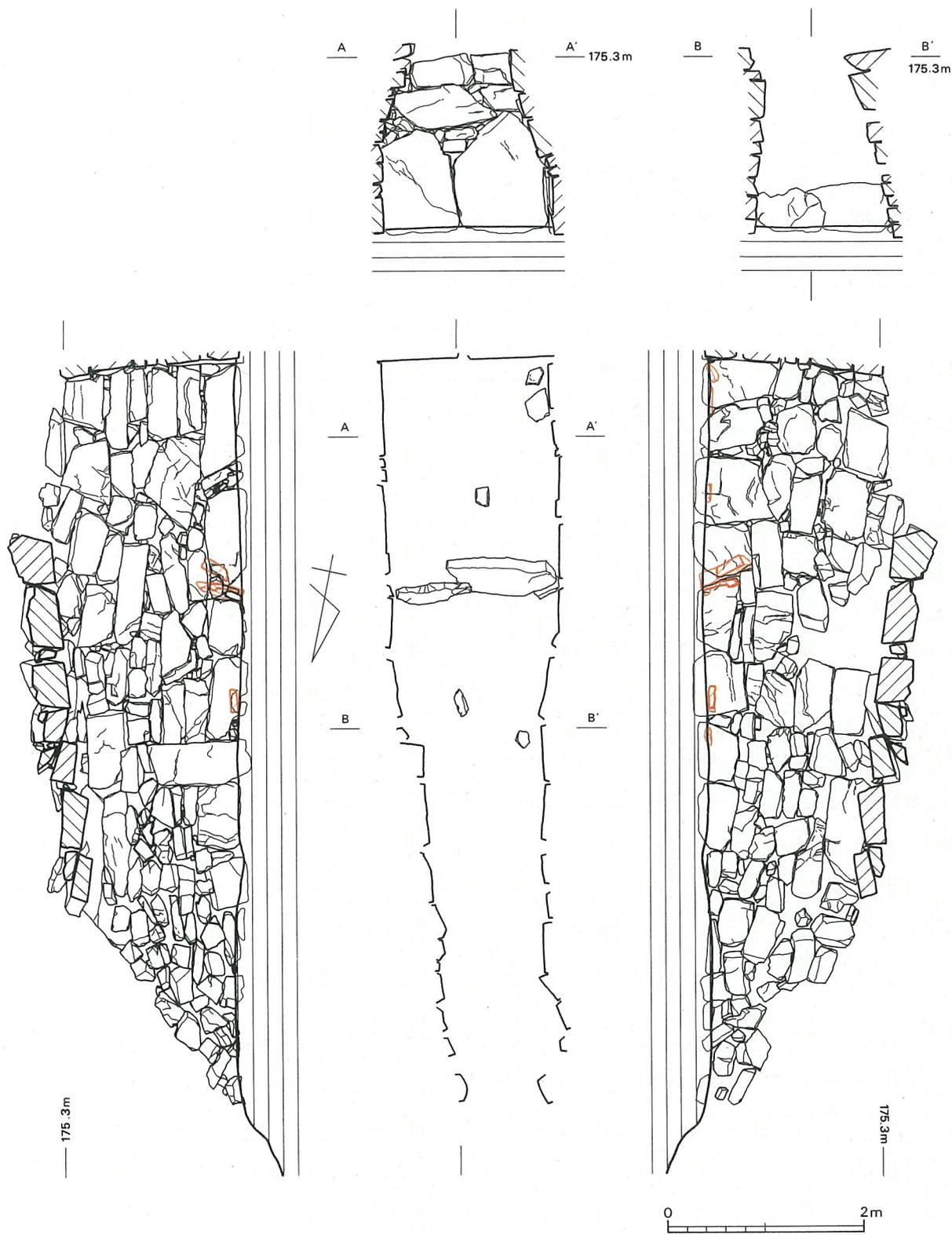
b. 玄室

玄室は、長さが東側壁で3.94 m、西側壁で3.96 mである。幅は奥壁付近で1.69 m、奥壁から1.3 m北で最も広く1.8 m、奥壁から3.8 m北で最も狭く1.34 mであることから、平面形態はほぼ中央が広がる胴張り気味を呈する。主軸方向に長い長方形を呈し、長さとの幅の比はほぼ2:1である。なお、玄室と羨道との長さの比はほぼ1:1である。また西側壁の、奥壁から2～3 m北、床面から高さ1.3～1.9 mの範囲は壁石が崩落している。

奥壁

奥壁は基底石として、高さ1.06 m、幅0.5～0.8 mの面を向けた板状の石を東側に、高さ1.25 m、幅0.7～0.9 mの面を向けた板状の石を西側に並べて設置している。2段目は東側に縦0.5 m×横

0.7m, 西側に縦0.25m×横0.3mの面をむけた石材をそれぞれ横長に積み上げる。この上面はほぼ横目地が通る。基底石との隙間には10~30cm大の石材を詰めている。最上段は、東側に縦0.3m×横0.6m, 西側に縦0.3m×横0.4mの面を向けた石材を上端面を揃えて横積みにする。壁面は、主



第7図 第1号古墳石室実測図 (S = 1 : 60)

要な石材の面が揃えられており、傾斜は85度とほぼ直立する。高さは最高箇所では1.78 mである。

東側壁

東側壁の最も高い位置は奥壁から約1.8 m北の位置で1.9 m、最も低い位置は奥壁から約3.5 m北の位置で1.69 mである。東側壁は4個の大型の石材を横口積みにして基底石を構成し、10 cm程度の石材を隙間に詰め、上面をほぼ水平に整えている。2段目以上は2～3石を除きやや小振りの石材を使用して5～6段横長に積み上げて構築されている。石材の大きさは不揃いで、各段はすべて横目地が通ることはない。ただ、床面から約0.9 mの高さ、また約1.4 mの高さで概ね横目地が通り、特に前者においては先述した神石の上端面ともほぼ揃っており、石室構築にあたり、積み上げの段階を画していたと考えられる。東側壁は、床面から約0.9 m（3段ないし4段目まで）の高さまではほぼ直立気味であるが、それ以上はほぼ70度の角度で内傾し、持ち送り状となる。最上段は最下段よりも23 cm程度せりだす。

西側壁

西側壁の天井石がある箇所では最も高い位置は、奥壁から約1.8 m北で1.91 m、最も低い位置は奥壁から約3.5 m北で1.69 mである。西側壁は、東側壁と異なり6個の基底石を設置している。また、設置方法も異なり、奥壁から4石目までは縦積みに、5、6石目は横積みになっている。基底石の上面についても、3石目までと4石目以降は高さがそろわず、不揃いである。ただ構築にあたっては、目地を通そうという意識がなされたのか、その4番目以降は基底石上面に1～2段程度積み上げて、それまでの基底石との高さを揃えている。それから上は、やや小振りな石材を使用して4段程度積み上げて構築しているが、東側壁と異なり、横長の石材はあまり使用されていない。石材の大きさも不揃いで、各段はすべて横目地が通ることはない。しかし、床面から約1.3 mの高さで、概ね横目地が通る。これは、東側壁における後者のライン（約1.4 mの高さ）に対応すると考えられ、石室構築にあたって、積み上げの段階を画していたと考えられる。西側壁は床面から約0.6 m（基底石ないし2段目）の高さまで、ほぼ直立気味ではあるが、それ以上はほぼ67度の角度で内傾し、持ち送り状となる。最上段は最下段よりも44 cm程度せりだす。全体に、東側壁よりも西側壁の方が持ち送りの角度が急になっている。恐らく西側壁の構築にあたっては、東側壁が基準となったと考えられる。なお、基底石6石目の北側は垂直方向に目地が通っており、玄室と羨道の境目を表現していると考えられる。

床面

石室床面は、地山の上面に黄褐色砂質土を3～8 cm程度盛土して整地している。

玄室の床面には、奥壁から羨道に向かい2.23～2.52 mの範囲で、二枚の板状の石が横長に立てて据えられていた。その仕切石から羨道までは1.45 m前後の長さとなる。西側の石材はほぼ長方形を呈し、縦0.5 m×横1.03 m、厚さ0.1 mで、東側の石材は扁平な六角形を呈し、縦0.5 m×横0.72 m、厚さ0.05～0.08 mである。西側は約60度の角度で、東側は70度前後の角度でそれぞれ奥壁側に傾いていた。二枚の石は、羨道側から見た場合、20 cm程度重なり合うが、東側仕切石が手前側になる。なお西側仕切石の西側下部には縦0.05 m×横0.25 mの石材が隙間を埋めるために設置されている。

その仕切石の南側においては、盗掘のためか攪乱が認められたが、奥壁西隅において床面直上に

扁平な石材が2枚のほか、中央部においても1枚確認された。この南側においては埋土除去中にも同様な石材が幾枚か確認でき、床面に敷石が行われていた可能性がある。一方、仕切石の北側には玄室と羨道の境付近に方形の二つの石材が約55cmの間隔をおいて確認された。棺台石の一部の可能性はあるが、出土状況は西側石材は須恵器床の下面、東側石材は須恵器床の東端にあたり、須恵器片を敷くに当たってなんらかの基準に設置された可能性もある。

ところで、仕切石の北側から羨道に若干かかる床面の西側壁寄りには、南北1.8m、東西0.6～1.1mの範囲で、破碎された須恵器片が敷きつめられ、埋葬床面を形成している。この須恵器による土器床は主に甕2個体と横瓶1個体の破片で構成されている。これらの破片は石室外や羨道からも検出されており、破碎されたのち、持ち込まれたと考えられる。

なお仕切石南側には鉄釘が残存しており、この位置においては遺体は木棺を使用して葬られたと考えられる。一方、仕切石の北側や羨道にも鉄釘は出土しているが、断片的であり、これらは追葬の際に片づけられたと考えられる。

c. 羨道

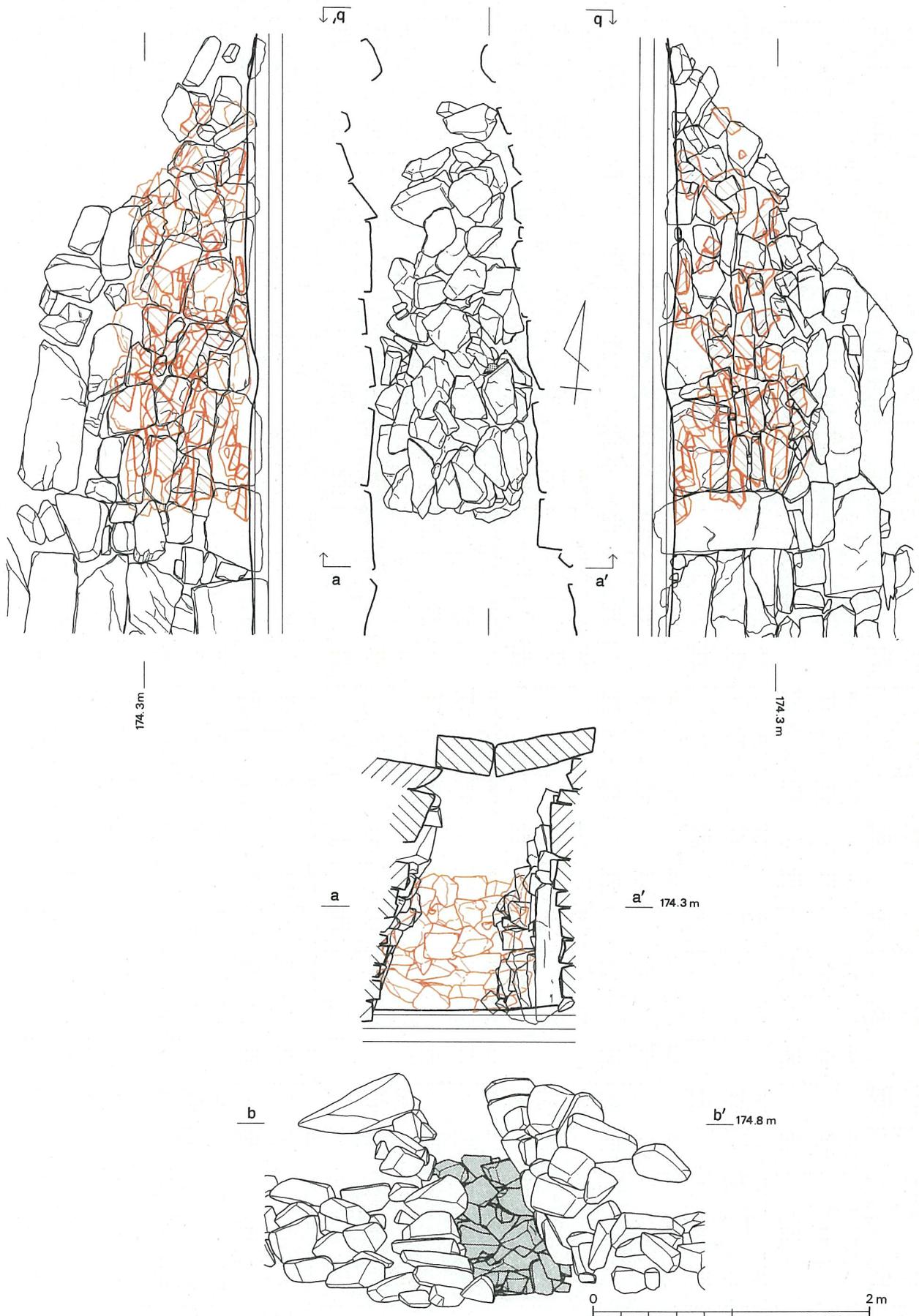
羨道は、神石のある位置から羨道基底石先端までとする。長さが東側壁3.67m、西側壁3.68m、幅が玄門部1.2m、入口側0.8mである。入口に近づくにつれて、若干狭くなるが、概ね主軸方向に長い長方形を呈する。長さとの幅の比はほぼ3:1である。

石材の積み方や使用石材の大きさなど東側壁と西側壁では若干異なるが、共通点は多い。すなわち、上部の壁面はいずれも10～50cm大の小振りな石材で構築し、また天井石を支える最上部には大型の石材を使用している。そして、石室の側壁上面は天井石先端部に向かって約40度の傾斜をとるよう構築されているなどで共通する。

次に両側壁を見ると、東側壁は、神石の隣に縦0.45m×横0.65m、その隣に縦0.36m×横0.5mのやや大きめな石材を横目積みにして基底石とする。それ以北は10～50cm大の小振りな石材を基底石とするが、前者とは高さが異なるため、上面には2段程度石材を積み上げて揃えている。また床面から約0.7mの高さでほぼ目地が揃い、そして、大きくは1.2mの高さで目地が揃っている。特に後者のラインは玄室における横目地の揃っているライン(1.4m)に対応する。ここまでは神石を含めて一連の作業で構築されたと推定される。その上には、縦0.3m×横1mの面を向けた石材と縦0.25m×横1.3mの面を向けた石材を横積みする。後者は最上段となり、天井石が架構する。一方、西側壁は玄室との境目に基底石として、縦0.4m×横0.55mの面を向けた石材、隣に縦0.4m×横0.6mの面を向けた石材を横長に設置する。それ以北は20～50cm大の石材を基底石とするが、前者とは高さが異なるため、上面に2段程度石材を積み上げて揃えている。東側壁と比べて横目地は通っておらず、乱積みを呈する。ただ、床面から高さ1.3～1.4mで、比較的横目地が通っており、玄室における状況にほぼ対応する。その上には縦0.4m×横1mの面を向けた石材が横口積みされている。天井石は最上段にあたるこの石材に架構する。

d. 閉塞石

閉塞石は、羨道において、玄室より0.15m入口側の位置から石室入口より0.45m玄室側の位置まで、南北3.1m、東西0.4～1.1mにわたって密集する形で積み上げられていた。底面からの高さは



第8図 第1号古墳石室閉塞石実測図 (S = 1 : 40)

※網目は上図：須恵器片，下図：閉塞石

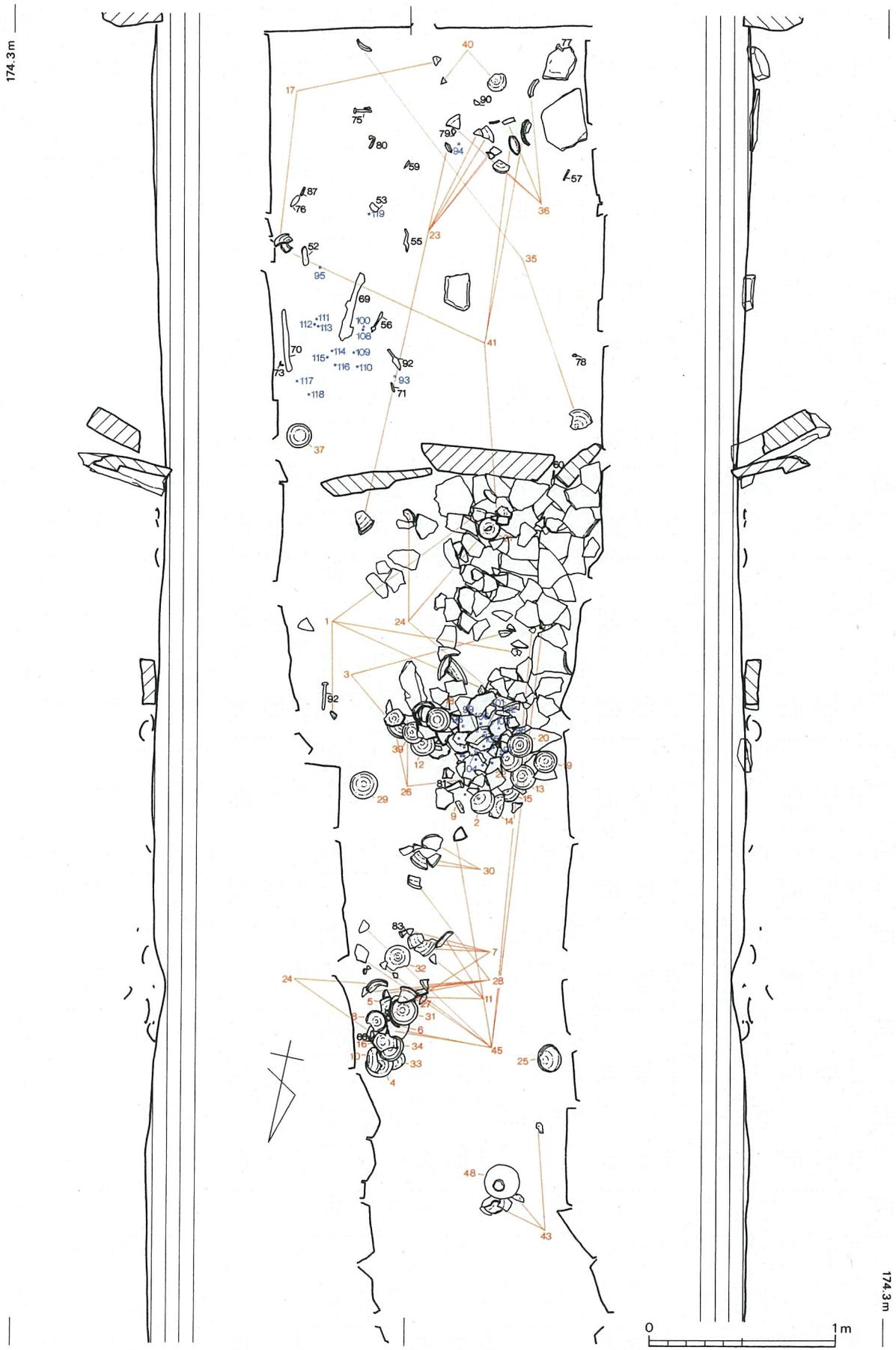
最も高い箇所では1.2mである。20～30cm大の石が多いが、30～50cm大の石もかなり見られる。特に玄室側は、30～50cm大の石が多く、密集の度合いも高い。この閉塞石は原位置をほぼ保っていると考えられる。なお天井石とは隙間が存在するが、調査段階の所見では入口は土でさらに封鎖されている。

(5) 遺物の出土状況 (第9, 10図・図版8, 9)

遺物は須恵器51個体(杯蓋21点, 杯身18点, 壺蓋1点, 低額壺1点, 長頭重2点, 脚付長頭壺1点, 提瓶2点, 平瓶2点, 横瓶1点, 甕2点), 鉄製品43点以上(鏃15点, 釘14点, 鏝1点, 銅5点, 刀5点, 穂摘具1点など), 装飾品136点(耳環7点, 勾玉4点, 切子玉2点, 管玉2点, 土製小玉37点, ガラス製小玉84点)が出土している。これらは、玄室仕切石の南北及び羨道, そして墳丘内外から出土している。

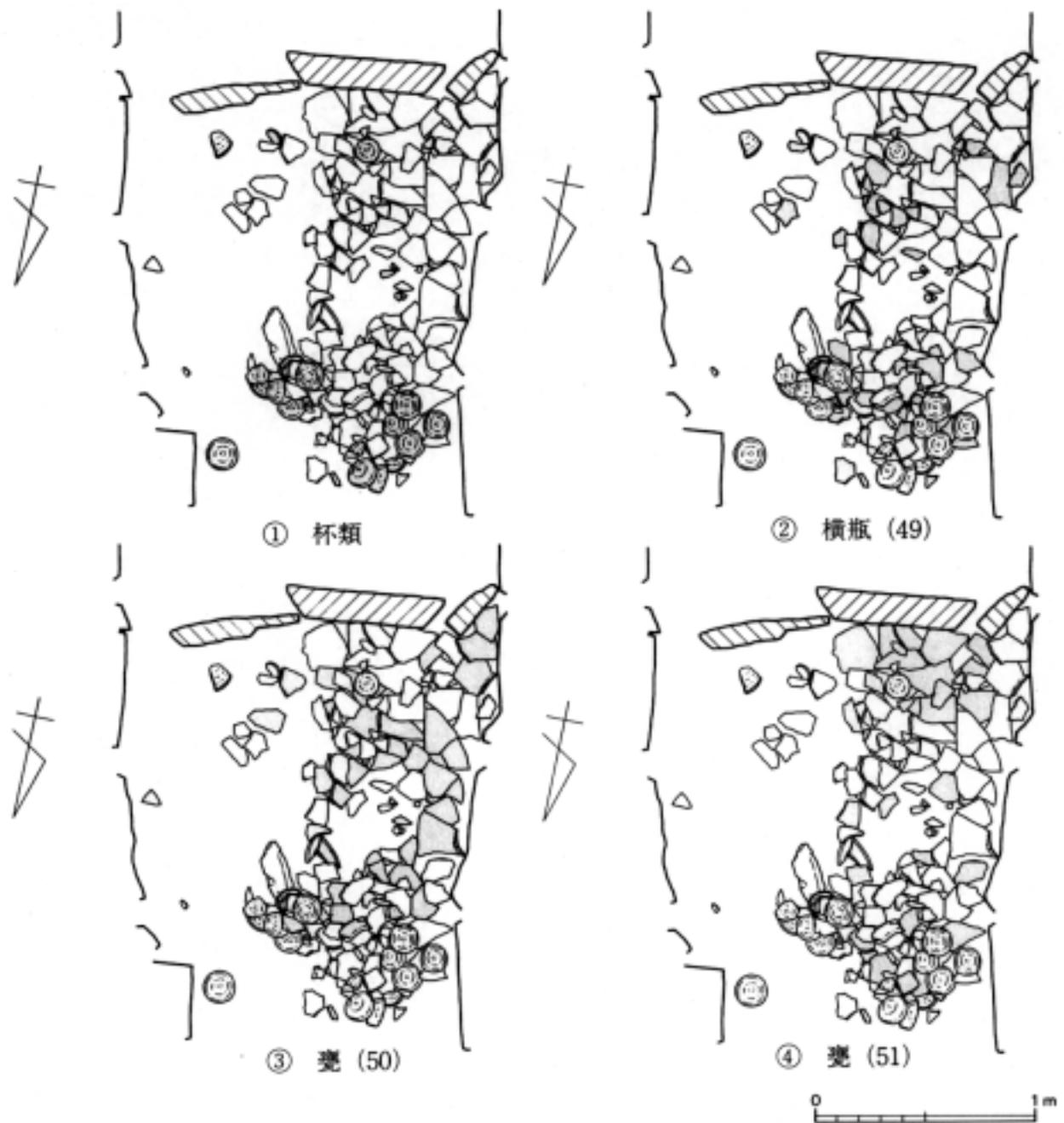
玄室仕切石南側からは須恵器(杯蓋1点, 杯身5点, 壺蓋1点, 低頭蓋1点), 鉄製品(鉄9点, 釘7点, 鏝1点, 2点, 刀2点, 穂摘具1点など), 装飾品(耳環3点, 勾玉1点, 土製小玉37点)が出土している。なお, 杯身, 低頭重については仕切石をはさんで南北両側から出土しているが, 南側からの出土でカウントする。この仕切石南側は, その出土状況から, 原位置を保っておらず攪乱が想定された。当初, 後世の盗掘段階における攪乱と考えた。しかし, ほぼ原位置を保っていると考えられる須恵器床の直上にも同一個体の低額壺の破片が出土しているが, 須恵器床の出土状況はその上面に土砂が被さり, さらにその上には西側壁の石材の一部も転落していた。この状況からみれば, 盗掘は, 側壁転落以前になされていなければならない。須恵器床がほぼ原位置である可能性は高いことから, 須恵器床に埋葬行為が行われたのち, その後の追葬段階で仕切石の南側においても何らかの理由でかたづけが行われた可能性がある。ところで, 土製小玉を中心とした装飾品は耳環(95)を除き, 北東側に比較的まとまって出土しているが, これについても埋葬位置を確定できるものではない。なお, 耳環については, 3点出土しており, 少なくとも2体(回?)の埋葬が行われている。また, 釘が出土しており, 遺骸は木棺に収められて埋葬されたと考えられる。

玄室仕切石北側からは, 須恵器(杯蓋13点, 杯身5点, 横瓶1点, 甕2点など), 鉄製品(鉄2点, 釘2点), 装飾品(耳環4点, 勾玉3点, 切子玉2点, 管玉2点, ガラス製小玉84点)が出土している。この位置からも, 羨道とまたがって出土しているものがあるが, 次の羨道からの出土でカウントしている。ここでは, 西側壁に沿って, 仕切石から羨道にも一部がかかる, 長さ1.8m, 幅0.6～1.1mの範囲で, 須恵器を故意に割って直接床面に敷きつめたいわゆる土器床が確認された。使用された器種は横瓶1個体, 甕2個体である。この破碎された須恵器片を敷きつめる順序や場所については3個体とも南側, 中央, 北側と分散して置かれており, 器種による規則性などはあまり見られなかった。なお, その位置からは杯類や提瓶(45)の破片が認められ, 同一個体の破片は羨道からも出土している。しかし, 須恵器床面の下面に位置するため, これについては羨道で破碎し, 須恵器床に使用されたというよりも, 追葬時にかたづけられ, 一部は仕切石北側のこの位置に, 残りは羨道に残存したと考える方がよいだろう。ところで, この須恵器床の上面などからは, 杯蓋, 杯



第9図 第1号古墳石室内遺物出土状況実測図 (S = 1 : 30)

身が出土しているが、南側に杯蓋がある以外は、そのほとんどは北側端部分の東西両側からまとまって出土している。蓋と身は合わさって出土はしていない。また、蓋についてはそのほとんどが正直され、身については天地逆に置かれている。それにならっていない杯類は、すべて破片である。また、中には比較的古い様相を呈しているものもあり、追葬段階でかたづけられたものを再利用したものもあると考えられる。なお、この北側からは釘や鍛などの鉄製品が出土しているが、いずれも須恵器床からは、はずれた状態で出土しており、遺骸を埋葬するにあたっては、木棺は使用されず、直接ないしは布などにくるまれていた可能性が高く、また鏝などの副葬も行われていないと考えられる。装飾品は須恵器床の北側から見つかっている。耳環は4点出土しており、この須恵器床の上にも2体の埋葬が行われたと見なすことができる。調査状況からいえば、杯蓋(20)及び蓋(51)



第10図 第1号古墳須恵器床器種別出土状況実測図 (S = 1 : 30)

口頸部の下から出土した耳環(99・100)と残りの耳環(97・98)がそれぞれセットになるということが出来るほか、耳環(100)の西隣から見つかった切子玉(106)、勾玉(102・103)が前者の耳環(99・100)を付けていた人物が装着していたと想定できる以外は不明と言わざるを得ない。特に紐が朽ちてバラバラになったガラス製小玉についてはわからない。

羨道からは須恵器(杯蓋7点、杯身8点、長類壺1点、提瓶1点、平版1点など)、鉄製品(鉄7点、釘4点)が出土している。これらは追葬段階においてかたづけられたものの残存と考えられる。なお、出土位置は、東側壁寄りと西側壁寄りに分けられ、それぞれ出土状況の違いが見られる。すなわち、後者のうち、長頭壺、平版については閉塞石内から出土し、東側壁寄りの土器群はほぼ閉塞石の下から出土している。

墳丘盛土内からは、開口部側の西側において、墳丘の上位から長類壺(42)が、中位から提瓶(46)が、裾部から平版(48)が出土している。これらについては、墳丘盛土の最終段階(第3段階)において、地鎮など何らかの葬送儀礼に基づいて埋納ないしは設置されたものと考えられる。また、墳丘外においては北側下方から脚付長類壺のほか、釘が3点出土し、また南東側下方からは鍍がそれぞれ出土している。前者はいずれも追葬時にかきだされた可能性が高いが、脚付長類壺(44)は、前述した長頭蓋、提瓶、平版と同様墳丘盛土内に埋められていたものが盛土の崩落とともに転落した可能性もある。

(6) 出土遺物

a. 須恵器(第11～14図・図版16～19)

杯蓋(1～21)

成形技法・形態などの特徴から次の4種類に分けられる。

I類(1～7)

口径12.9～14.4cm、器高4.0～4.5cmである。天井部は丸みを持ってゆるやかなカーブを描く。口縁部は外方へのび、口縁端部は丸く収めるもの(1・2)と、やや尖り気味になるもの(3～7)がある。口縁部は比較的長めで天井部との境に、明確に稜線が入る。いずれもヘラケズリを施すことで丁寧仕上げている。6は天井部にヘラ記号が刻まれている。なお、1と4は胎土・焼成などから同一窯製品と考えられる。

II類(8～14)

口径12.8～14.2cm、器高4.2～5.3cmである。天井部は、平坦気味でゆるやかなカーブを描いて口縁部に至る。口縁部はほぼ垂下し、口縁端部は、概ね尖り気味に収める。器高に比べ、口縁部は短めである。天井部の一部にヘラケズリを施すものもあるが、ほとんどのものは未調整で残る。14は外面に自然釉がかかる。

III類(15～20)

口径12.4～13.2cm、器高3.3～4.1cmである。形態的には、やや浅めで、天井部が若干丸みを持つ15・16とやや深く天井部が平坦である18～20に分けられる。天井部は、ほぼ平坦を呈し、緩やかなカーブを描いて口縁部に至る。口縁部は、屈曲させて垂下する。口縁端部は、やや尖り気味に収め

る。口縁部は短めである。天井部はヘラ切り未調整のまま残り、最も省略化が進んでいる。16・18・19・20は外面に自然釉がかかる。なお、18・19・20は胎土、焼成などから同一窯製品と考えられる。

Ⅳ類 (21)

口径10.7 c m, 器高3.3 cmである。天井部は平坦である。体部は外下方に延び、口縁部は若干屈曲させて外開き気味に垂下させる。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部は短く、体部との境は明瞭ではない。天井部はヘラ切り離し後未調整である。杯身39とセットであろう。

杯身 (22～39)

成形技法・形態などの特徴から次の4類に分けられる。

I類 (22～28)

口径11.2～12.5 c m, 受部径12.4～14.2 cm, 器高3.6～4.7 c mである。立ち上がりは内傾し、直線的に延びるものと中途から屈曲して上方に直立するものがある。端部は尖り気味に収める。立ち上がりは長めである。受部は直線的もしくは外反気味に外上方に延びる。端部はやや尖り気味に収める。底部は若干丸みを持つ。底部にヘラケズリを施すことで丁寧仕上げている。28の底部にはヘラ記号が刻まれている。杯蓋のI類に対応すると考えられる。

Ⅱ類 (29～32)

口径11.3～12.2 cm, 受部径13.2～13.4 cm, 器高3.6～4.6 cmである。立ち上がりは内傾し、直線的に延びるものと中途から反り気味に上方に直立するものがある。端部は、やや尖り気味に収める。立ち上がりは長めである。受部は、ほぼ直線的に外上方に延び、端部は丸く収める。底部は平坦を呈する。底部の一部にヘラ削りを施すものもある。杯蓋のn類に対応すると考えられる。

Ⅲ類 (33～38)

口径11.3～12.55 cm, 受部径12.6～13.8 cm, 器高3.0～3.9 cmである。形態的に体部が丸みを持つ35～37と直線的となる33.34に分けられる。立ち上がりは短く、ほぼ上方へ直立する。端部は尖り気味に収める。受部は、ほぼ直線的に短く外上方に延び、端部は丸く収める。受部から底部までは短く、底部は平坦を呈する。底部はヘラ切り未調整であり、杯蓋の皿類に対応すると考えられる。なお、33と34、35と36は胎土、焼成などから、それぞれ同一窯製品と考えられる。

Ⅵ類 (39)

口径10.1 c m, 受部径11.4 cm, 器高3.4 c mである。立ち上がりは短く内傾し、端部は尖り気味に収める。受部は外反気味に外上方に延び、端部は丸く収める。受部から体部にかけては直線的で、底部は平坦を呈する。底部はヘラ削りを施している。

壺蓋 (40)

天井部は、ゆるやかな丸みを持ち、屈曲させて口縁部は垂下する。端部は丸く収める。天井部はヘラ削りを施した後、ロクロ回転によるナデで丁寧に仕上げる。41の低頸壺とセットであろう。

低頸壺 (41)

口縁部は内傾気味に立ち上がり、端部は丸く収める。肩部と体部との境には、やや明瞭な稜線を持つ。底部は緩やかな丸みを持つ。肩部の上方には部分的に自然釉がかかるが、口縁部にはかかっていないため、蓋付きで焼成された可能性がある。

長頸壺 (42・43)

42 口頸部は外反してほぼ直線的に延び、口縁部は丸味をもって収める。口頸部には一条の凹線が間隔をおいて2本めぐる。頸部外面は断面三角形の凸帯がめぐる。体部は、ほぼ球体をなし、頸部から胴部最大径にかけ4本の凹線を持つ。底部は丸味を持つ。口頸部の凹線の間と頸部の凸帯から3本目の凹線までの間には、櫛歯状工具による利点文を施す。

43 口頸部は外反しながら上方へ延び、端部はやや内傾しながら尖り気味に収める。口頸部の中央部に2本の凹線がめぐる。肩部と体部との境界には2本の凹線がめぐるが、下の凹線は全局していない。底部は丸味を持つ。

脚付長頭壺 (44)

頸部から肩部までは緩やかに下り、肩部と体部との境界には浅い凹線がめぐる。胴部最大径をやや上方にとり体部はやや扁平な球形を呈する。脚部は「ハ」の字状を呈する。肩部までの全面と内面底部の一部に緑色の自然釉がかかる。

提瓶 (45・46)

45 いわゆる口縁部は、「ハ」の字状に外反し、端部を上方につまみあげた口縁部をもつ体部がほぼ球形の小型壺状を呈する。体部の両肩には、ボタン状の把手がつく。

46 口縁部が「く」の字状に外反して外上方に延び、端部はさらに外方へ屈曲させる。頸部は断面三角形の凸帯がめぐり、工具によって「ノ」の字状に刺突文が施されている。体部の両肩には、アーチ状の把手がつく。前面、後面ともに緑色がかった自然釉が若干かかる。

平版 (47・48)

47 口頸部が内湾気味に立ち上がり、端部は尖り気味に収める。体部は楕円形を呈し、底部はやや平坦気味を呈する。胴部最大径から少し下った位置に1本の凹線がめぐる。

48 口頸部が内湾気味に立ち上がり、端部は丸く収める。中央に1本の凹線がめぐる。体部は扁平な球形をなし、下半部は丸味を持つ。

横瓶 (49)

口頸部は外反し、端部は肥厚し、丸く収める。肥厚部には浅い2本の凹線がめぐる。体部は俵状を呈する。口縁部の内面にヘラ記号「メ」が刻まれている。

甕 (50・51)

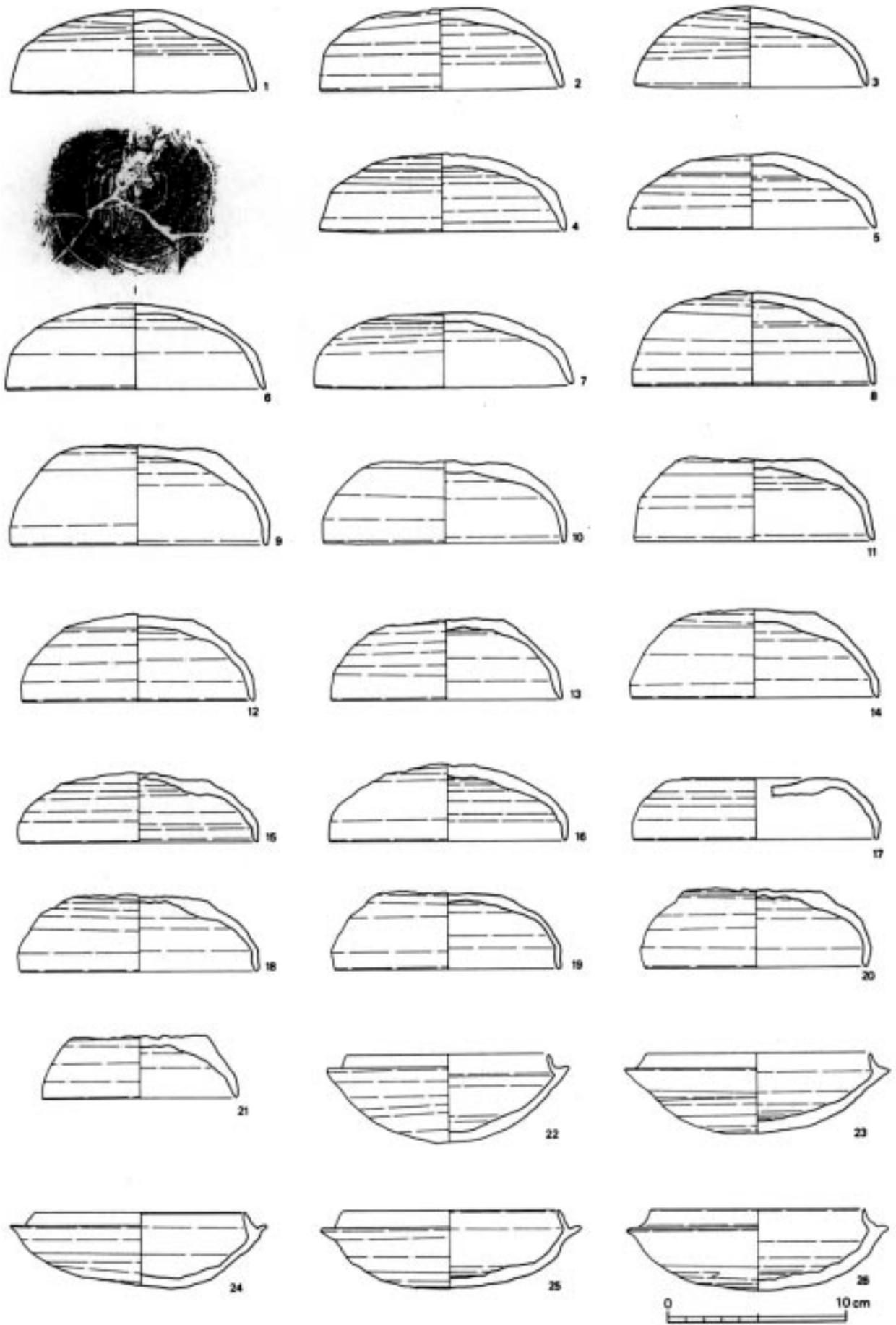
50 口頸部が外反し、口縁端部は下方に折り曲げている。体部は、やや胴部の張った倒卵形を呈する。底部は、やや平坦気味を呈する。口頸基部から肩のあたりまで、破片の窯着が見られる。

51 口頸部が外反し、口縁端部は肥厚する。体部は倒卵形を呈する。底部は、やや尖り気味を呈する。底部には、焼成時に台にしたと考えられる口径12cm程度の杯身ないし杯蓋の口縁部の破片が蒸着している。

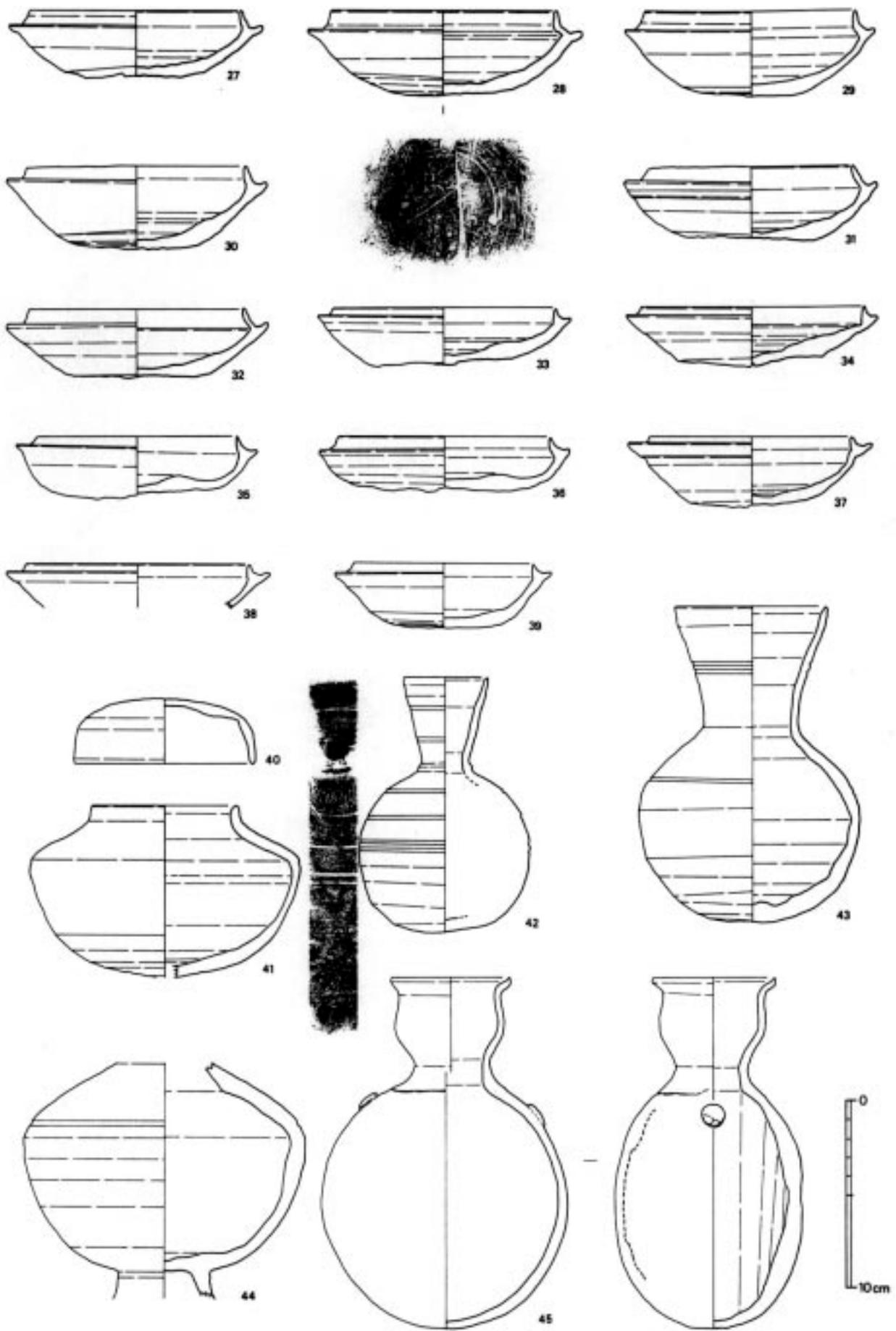
b. 鉄製品 (第15, 16図・図版19, 20)

鋏 (52~68)

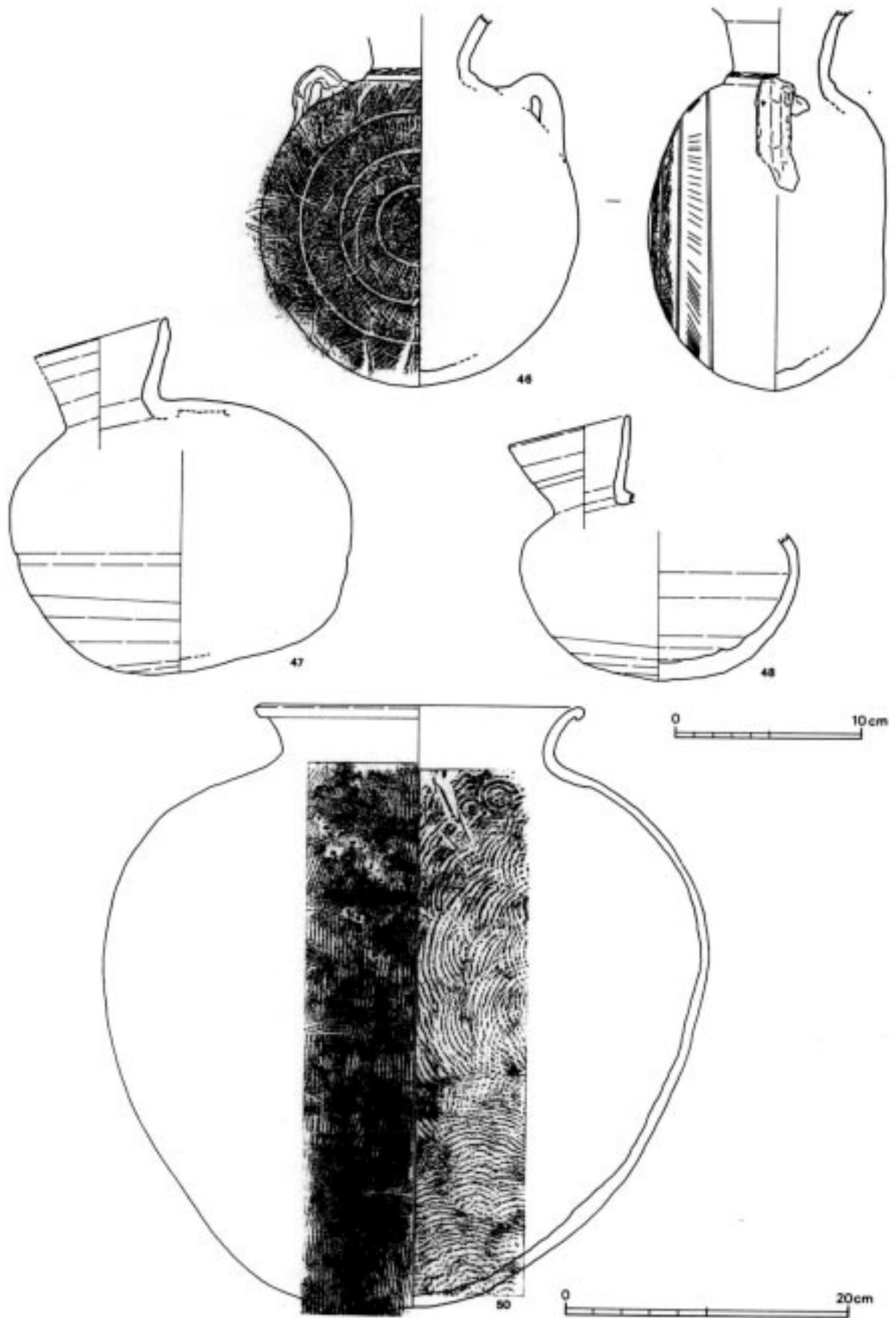
茎部の有無が判明しない53, 63以外は全て有茎式である。いわゆる平板鋏が4点、尖根鋏が11点



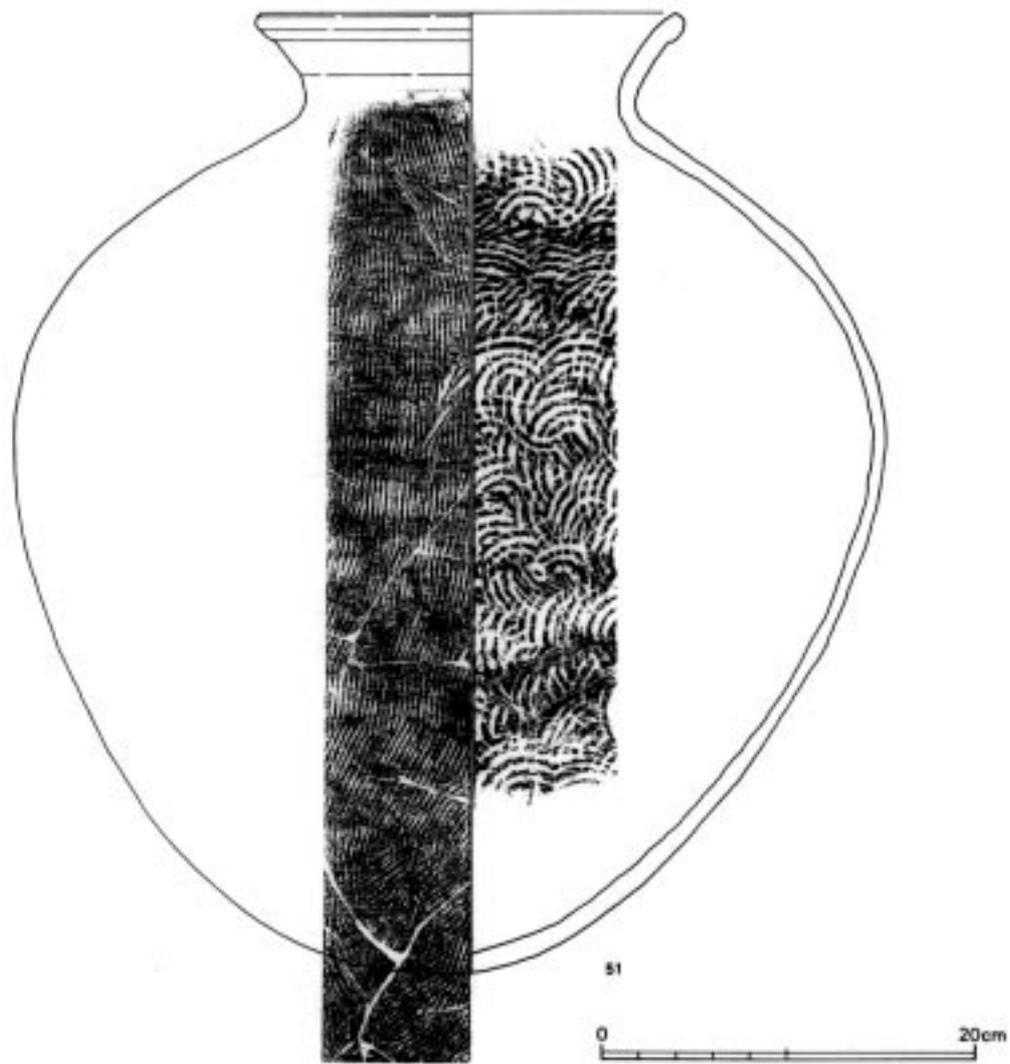
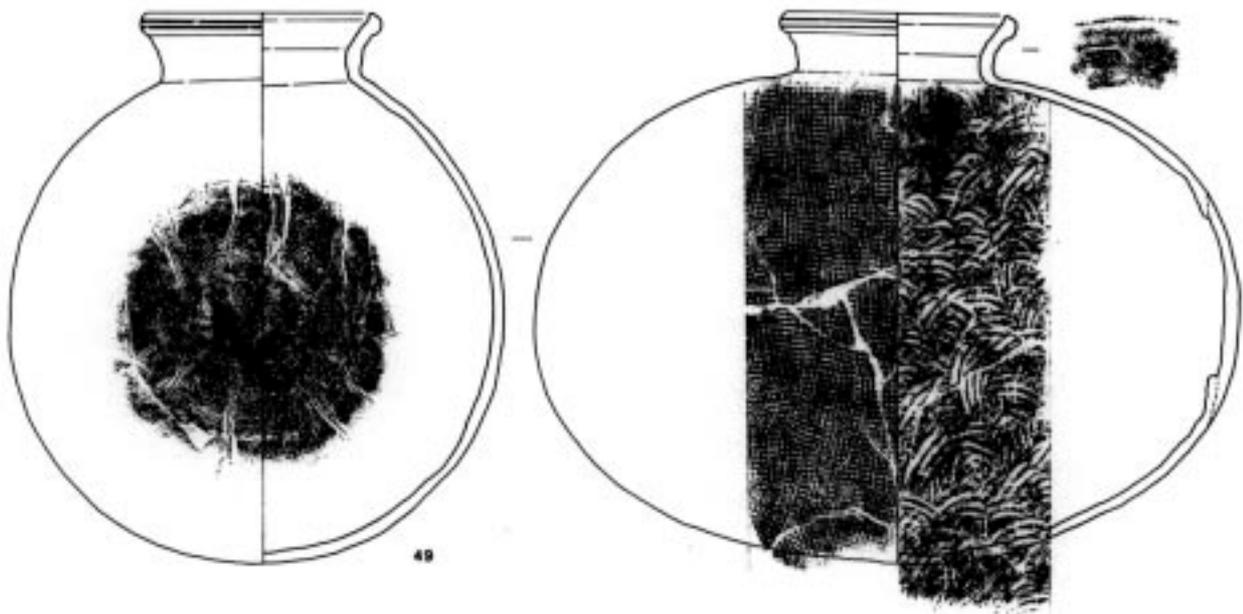
第 11 图 第 1 号古墳出土遺物実測図(1)(S = 1 : 3)



第 12 图 第 1 号古墳出土遺物実測図(2)(S = 1 : 3)



第13図 第1号古墳出土遺物実測図(3)
 (46～48はS=1:3, 50はS=1:4)



第 14 图 第 1 号古墳出土遺物実測図(4)(S = 1 : 4)

となっている。

平根鏃には方頭斧箭式(60・68)、腸挟柳葉式(52)がある。また、53は残存状況から三角形ないしは柳葉形鏃と考えられる。52の鏃身は両丸造りで、逆刺が外に開く。53も両丸造りである。60・68は、いずれも明瞭な関を持ち、鏃身は60が7.9cm、68は6.4cmである。断面は鏃身、茎ともに方形を呈し、68の茎には木質が残存する。

尖根鏃は、いわゆる長頸鏃と短頸鏃に分けられ、判明するものでは、前者は54～59・66・67であり、後者は61・62で、63～65についてはその残存部からこれに含まれる可能性がある。両者とも鏃身は55～57・66・67が柳葉式である以外は、すべて長三角形を呈する。54・57・61・62・67は頸部と茎部に分かれ、関がつくられている。

刀(69・70)

いずれも錆化が著しく、遺存状況は悪い。いずれも刃部の一部と茎部が欠損している。69は残存長36.3cm、刃部幅は切先付近で2.0～2.9cm、背厚は0.2～0.6cmである。70は残存長32.2cm、刃部幅約2.5cm、背厚は0.3～0.7cmである。刃部の断面形はどちらも逆三角形である。

鏹(71)

半欠しているが、外縁と内縁が描く弧の割合から、長径は6cm程度、茎孔の長径は3cm程度の長楕円形を呈すると考えられる。外縁部はわずかに肥厚する。透かし等の装飾は見られない。

鋤(72・73)

いずれも半分以上欠損するが、柄木の木質が残存している。73は一方の端部を直角に折り曲げている。

穂摘具(74)

いわゆる手鎌と考えられる。半分以上欠損している。側縁を折り曲げる形で着柄部を造る。着柄部を中心に木質が残存しており、木目は横方向に走る。

釘(75～91)

完形品は4本で、他は破損品である。このうち釘頭の残るものは8本、釘身のみのもは6本である。釘頭はすべて逆L字形に折り曲げられている。完形のもは全長12.6～14.2cm、釘頭の残るもので全長が推定できる78は5.9cmである。75の釘身には木質が残存し、木目は横方向に走る。釘身のみのもで87は2本が錆化して付着している。釘身は中央の幅1cm前後の幅広のものが10本、幅0.6cm前後のものが4本である。

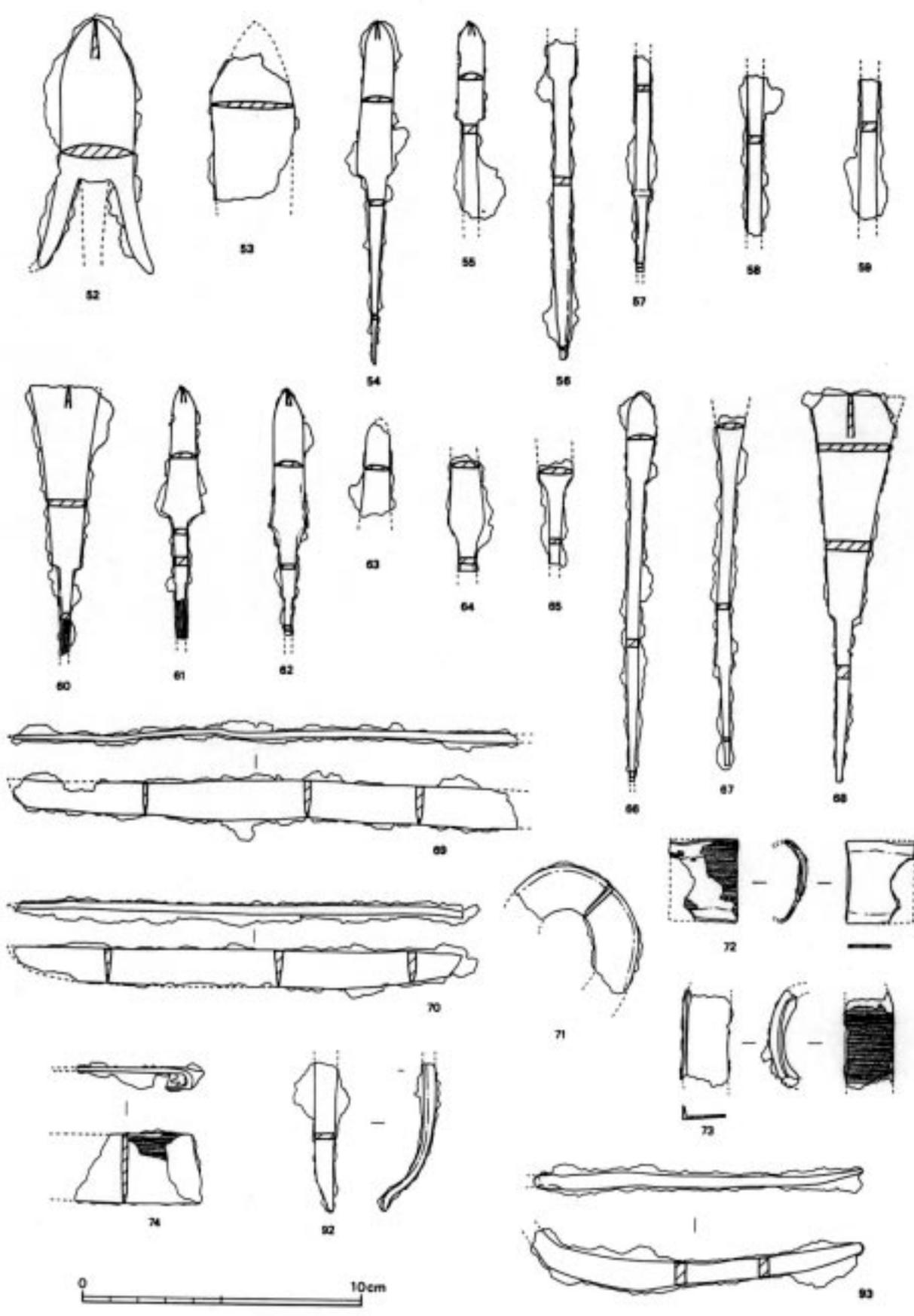
用途不明品(92・93)

いずれも一部残存するのみで用途については不明である。92は形状及び幅から釘の可能性はある。93は断面形が方形のまま上方へ湾曲し、さらに延長する。

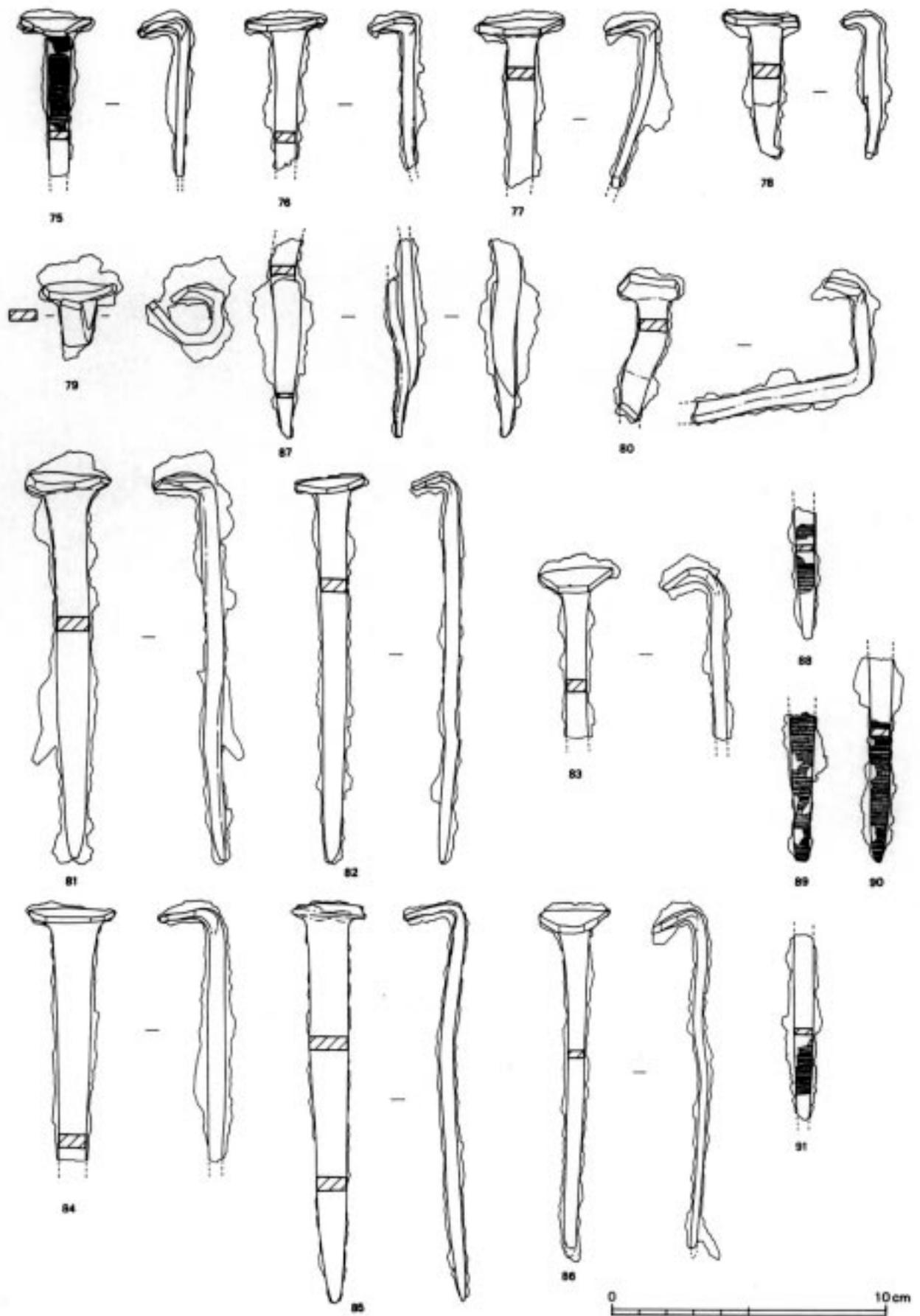
c. 装飾品(第17図・図版21)

耳環(94～100)

いずれも青銅芯に銀めっきを施している。外径は94が2.6cm×2.93cm、95が2.6cm×2.93cm、96が2.58cm×2.92cmであり、形状は楕円形で断面は円形を成す。96の断面は5.3mmで他の耳環に比べ細



第15図 第1号古墳出土遺物実測図(5)
 (S = 1 : 2, 69・70はS = 1 : 4) ※トーンは木質痕跡



第16図 第1号古墳出土遺物実測図(6)(S = 1 : 2)

※トーンは木質痕跡

身である。97の外径は2.6 cm×2.75 cm, 98は2.7 cm×2.88 cm, 99は2.6 cm×2.85 cm, 100は2.7 cm×2.82 cmであり, 形状はほぼ正円に近く, 断面は98・100は円形, 97・99は楕円形をなす。

勾玉 (101～104)

101～103は瑪瑙製で, 101・103は半透明で赤みがかった茶色, 102はそれをさらに薄くした茶色を呈する。104は碧玉製であり, 濃緑色を呈する。いずれも長さ2.7～3.55 cmで, よく研磨されており, ゆるやかな曲面を形成する。いずれも片側穿孔である。102・103は穿孔裏面を窪ませている。

切子玉 (105・106)

いずれも石英製で, 平面形が六角形で片側穿孔である。105は長さ2.55 cm, 最大径0.37 cm, 106は長さ2.5 cm, 最大径0.32 cmである。

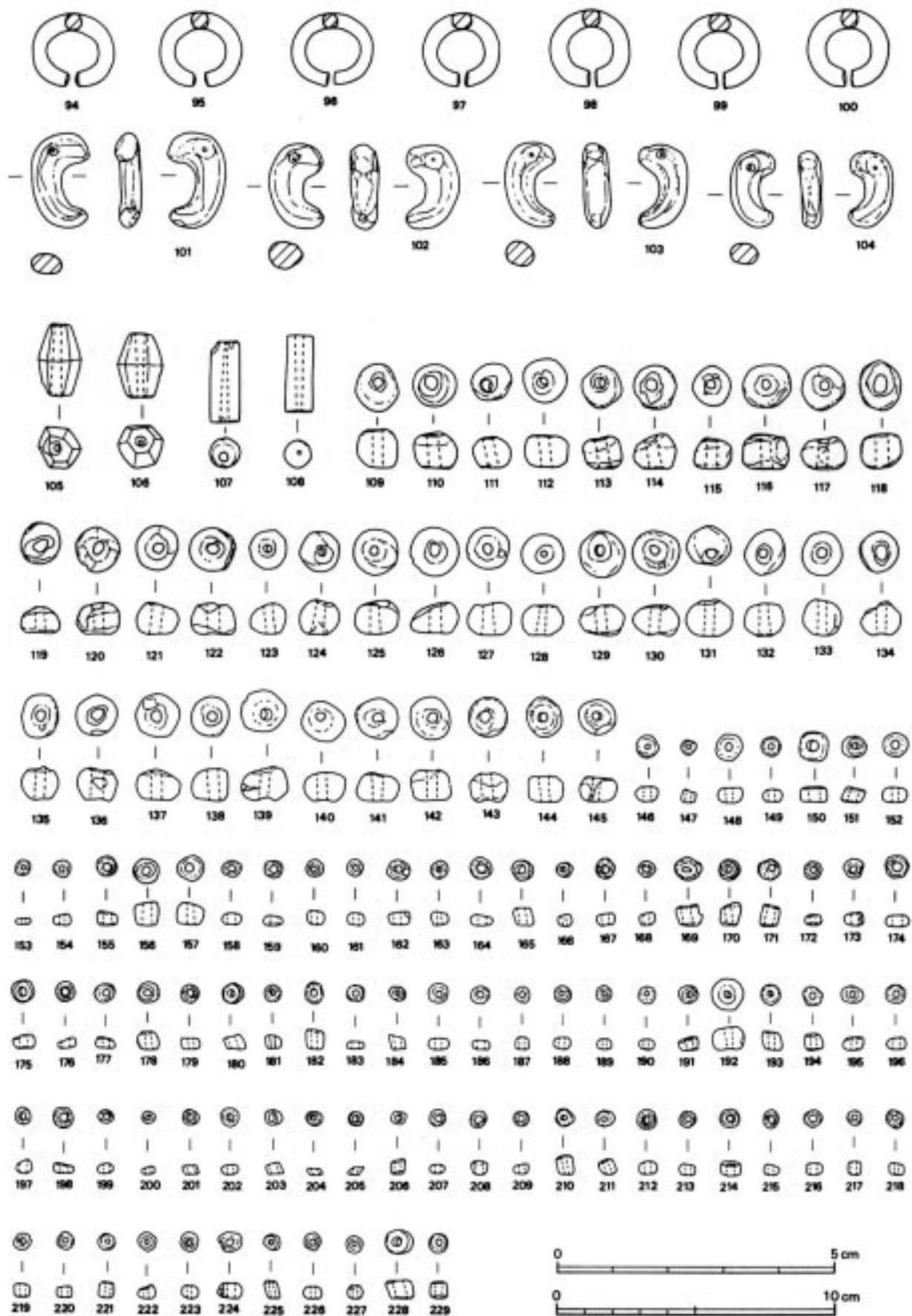
管玉 (107・108)

いずれも碧玉製でよく研磨されており, 片側穿孔である。濃緑色であるが, 108の方が淡い色を呈する。107は長さ2.85 cm, 幅1.1 cmで, 108は長さ2.72 cm, 幅0.96 cmである。

小玉 (109～229)

土製 (109～145) とガラス製 (146～229) がある。

土製は, 長さ0.43～0.64 cm, 径0.63～1.6 cm, 重さ0.2～0.5 gである。色調は概ね黒色を呈する。ガラス製は, 長さ0.1～0.41 cm, 径0.21～0.55 cmである。色調によって9種類に分けられる。すなわち, 紺 (146～159, 183～190), 濃紺 (160・161), 濃青 (180～182, 191・192), 青 (162～179, 193～200), 青緑 (201～206, 209～211), 緑青 (212～218), 緑 (207・208, 219～226), 黄 (227・228), 黒 (229) である。製作手法の判明するものでは, 中空の管を切断して製作されたものと, 細い紐状のものを巻き付けて製作されたものがあり, そのほか鋳型で鋳造されたものもあると考えられる。



第17図 第1号古墳出土遺物実測図(7)
 (94～108はS = 1 : 2, 109～229はS = 1 : 1)

第1表 塔の岡第1号古墳出土遺物観察表

須恵器 ([]:復元値)

遺物番号	器種	出土場所	計測数値 (cm)	成形・調整	色調	胎土	焼成	備考
1	杯蓋	仕切石北側	口径 13.5 器高 4.4	(天井部)ヘラケズリ(内面・口縁部)ロクロ回転によるナデ(内面天井部)ヨコナデ	濃青灰色	精緻	良好	ロクロ右回り
2	杯蓋	仕切石北側	口径 13.4 器高 4.3	(天井部)ヘラケズリ(内面・口縁部)ロクロ回転によるナデ(内面天井部)ヨコナデ	(内面)灰色 (外面)淡灰色	精緻	良好	ロクロ右回り
3	杯蓋	仕切石北、羨道	口径 12.9 器高 4.3	(天井部)ロクロ回転によるヘラケズリ(内面・口縁部)ロクロ回転によるナデ(内面天井部)磨滅著しく不明	灰褐色	精緻、砂粒若干含む	不良	ロクロ右回り
4	杯蓋	羨道	口径 13.7 器高 4.2	(天井部)ロクロ回転によるヘラケズリ(内面・口縁部)ロクロ回転によるナデ(内面天井部)ヨコナデ	濃青灰色	精緻、1mm大の砂粒若干含む	良好	ロクロ右回り
5	杯蓋	羨道	口径 13.7 器高 4.0	(天井部)ロクロ回転によるヘラケズリ(内面・口縁部)ロクロ回転によるナデ(内面天井部)ユビナデ	濃青灰色	精緻	良好	ロクロ右回り
6	杯蓋	羨道	口径 14.4 器高 4.5	(天井部)ロクロ回転によるヘラケズリ(内面・口縁部)ロクロ回転によるナデ(内面天井部)ヨコナデ	灰褐色 (外面)一部灰色	精緻	不良	天井部にヘラ記号あり、ロクロ左回り
7	杯蓋	羨道	口径 14.4 器高 4.0	(天井部)ヘラケズリ一部未調整(内面・口縁部)ロクロ回転によるナデ(内面天井部)ロクロ回転によるナデの後ヨコナデ	暗灰色	精緻	良好	ロクロ右回り
8	杯蓋	羨道	口径 13.4 器高 5.0	(天井部)ロクロ回転によるヘラケズリ(内面・口縁部)ロクロ回転によるナデ(内面天井部)ヨコナデ	青灰色	精緻 1mm大の砂粒多く含む	良好	ロクロ右回り
9	杯蓋	仕切石北側 羨道	口径 14.2 器高 5.3	(天井部)ロクロ回転によるヘラケズリ後ヨコナデ(天井部3分の1)ロクロ回転によるヘラケズリ(口縁部・内面)ロクロ回転によるナデ(内面天井部)ロクロ回転によるナデの後ヨコナデ	淡灰色	精緻、砂粒若干含む	良好	ロクロ右回り
10	杯蓋	羨道	口径 13.3 器高 4.4	(天井部)ロクロ回転によるヘラケズリ(内面・体部)ロクロ回転によるナデ	灰色	やや粗、1mm大の砂粒多く含む	良好	ロクロ右回り
11	杯蓋	仕切石北側、羨道	口径 13.2 器高 4.4	(天井部)ヘラ切り未調整(天井部上方3分の1)ロクロ回転によるヘラケズリ(内面・口縁部)ロクロ回転によるナデ(内面天井部)一部ヨコナデ	淡青灰色	精緻、1mm大の砂粒多く含む	良好	ロクロ右回り
12	杯蓋	仕切石北側、羨道	口径 12.8 器高 4.6	(天井部)ヘラ切り未調整(内面・口縁部)ロクロ回転によるナデ(内面天井部)ヨコナデ、水引き痕	淡青灰色	精緻、若干砂粒を含む	良好	ロクロ右回り
13	杯蓋	仕切石北側	口径 12.8 器高 4.2	(天井部)ヘラ切り未調整(内面・口縁部)ロクロ回転によるナデ	(内面)灰色 (外面)淡青灰色	精緻	良好	ロクロ右回り
14	杯蓋	仕切石北側 羨道	口径 13.7 器高 4.7	(天井部)ロクロ回転によるヘラケズリ(内面・口縁部)ロクロ回転によるナデ(内面天井部)ロクロ回転によるナデの後ヨコナデ	(内面)淡青灰色 (外面)淡灰色	粗	良好	外面5分の1に自然釉、ロクロ右回り
15	杯蓋	仕切石北側	口径 13.2 器高 3.7	(天井部)ヘラ切り未調整(内面・口縁部)ロクロ回転によるナデ	(内面)濃青灰色 (外面)灰色	精緻、1mm大の砂粒多く含む	良好	ロクロ右回り
16	杯蓋	仕切石北側、羨道	口径 13.1 器高 4.1	(天井部)ヘラ切り未調整(内面・口縁部)ロクロ回転によるナデ	(内面)青灰色 (外面)淡灰色	やや粗く、1~2mm大の砂粒多く含む	良好	口縁部に自然釉、ロクロ左回り

遺物 番号	器種	出土場所	計測数値 (cm)	成 形・調 整	色 調	胎土	焼成	備考
17	杯蓋	仕切石南北	口径 [12.5] 器高 3.3	(天井部) ヘラ切り未調整 (内面・口縁部) ロクロ回転によるナデ(内面天井部) ロクロ回転によるナデの後ヨコナデ	青灰色	精緻	良好	
18	杯蓋	仕切石北側	口径 13.2 器高 4.1	(天井部) ヘラ切り未調整 (内面・口縁部) ロクロ回転によるナデ(内面天井部) ヨコナデ	(内面) 灰色 (外面) 青灰色	精緻、砂粒 多く含む	良好	外面に自然釉、 黒色斑点あり、 ロクロ右回り
19	杯蓋	仕切石北側	口径 12.4 器高 4.1	(天井部) ヘラ切り未調整 (内面・口縁部) ロクロ回転によるナデ	(内面) 青灰色 (外面) 灰色	精緻、1mm 大の砂粒若 干含む	良好	外面に自然釉、 黒色斑点あり、 ロクロ右回り
20	杯蓋	仕切石北側	口径 12.4 器高 4.1	(天井部) ヘラ切り未調整 (内面・口縁部) ロクロ回転によるナデ	灰色	精緻	良好	外面3分の2 に自然釉、黒 色斑点あり、 ロクロ右回り
21	杯蓋	仕切石北側	口径 10.7 器高 3.3	(天井部) ヘラ切り未調整 (内面・口縁部) ロクロ回転によるナデ(内面天井部) ヨコナデ	(内面) 青灰色 (外面) 灰色	精緻	良好	ロクロ右回り
22	杯身	仕切石北側	口径 11.2 受部径 12.4 器高 4.7	(内面・体部) ロクロ回転によるナ デ (底部) ヘラ切り未調整	(内面) 濃青灰色 (外面) 淡青灰色	精緻	良好	ロクロ右回り
23	杯身	仕切石南北	口径 12.5 受部径 14.2 器高 4.3	(内面底部) ロクロナデの後ヨコナ デ (内面・体部) ロクロ回転によ るナデ、工具痕あり (底部) ロク ロ回転によるヘラケズリ	(内面) 濃青灰色 (外面) 淡青灰色	精緻、2mm 大の砂粒若 干含む	良好	ロクロ左回り
24	杯身	仕切石北側、 羨道	口径 11.7 受部径 13.0 器高 4.0	(内面底部) ヨコナデ (内面・体部 2分の1) ロクロ回転によるナデ (体部2分の1・底部) ロクロ回 転によるヘラケズリ	濃青灰色	精緻	良好	ロクロ右回り
25	杯身	羨道	口径 11.7 受部径 13.2 器高 4.1	(内面底部) ロクロ回転によるナデ の後ヨコナデ (内面・体部) ロク ロ回転によるナデ (底部) ヘラケ ズリ	暗青灰色	精緻	良好	体部及び底部 に自然釉及び 窯壁の付着あ り、ロクロ右 回り
26	杯身	仕切石北側	口径 11.9 受部径 13.4 器高 4.3	(内面底部) ロクロ回転によるナデ の後ヨコナデ (内面・体部) ロク ロ回転によるナデ (底部) ヘラケ ズリ	暗青灰色	精緻	良好	ロクロ右回り
27	杯身	羨道	口径 11.8 受部径 13.2 器高 3.6	(内面底部) タタキの後ナデ消し (内面・体部) ロクロ回転による ナデ (底部) ロクロ回転によるヘ ラケズリ	濃青灰色	精緻、1mm 大の砂粒若 干含む	良好	ロクロ右回り
28	杯身	羨道	口径 12.5 受部径 14.2 器高 4.5	(内面・体部) ロクロ回転によるナ デ (底部) ロクロ回転によるヘラ ケズリ	(内面) 淡灰色 (外面) 薄い灰褐色、 一部黒灰色	精緻	不良	底部にヘラ記 号あり、ロク ロ右回り
29	杯身	仕切石北側	口径 11.8 受部径 13.3 器高 4.6	(内面・体部) ロクロ回転によるナ デ (底部) ロクロ回転によるヘラ ケズリ	(内面) 淡青灰色 (外面) 灰色	精緻	良好	ロクロ左回り
30	杯身	羨道	口径 12.2 受部径 13.4 器高 4.4	(内面・体部) ロクロ回転によるナ デ (体部3分の1) ヘラケズリ (底 部) ヘラ切り未調整	淡青灰色	精緻、1mm 大の砂粒多 く含む	良好	ロクロ右回り
31	杯身	羨道	口径 11.3 受部径 13.2	(内面底部) ヨコナデ (内面・体部) ロクロ回転によるナデ (底部) ヘ ラ切り未調整、一部ヘラケズリ	(内面) 灰色 (外面) 淡灰色	精緻、1mm 大の砂粒多 く含む	良好	ロクロ右回り

遺物番号	器種	出土場所	計測数値 (cm)	成形・調整	色調	胎土	焼成	備考
32	杯身	羨道	口径 12.0 受部径 13.4 器高 3.6	(内面底部) ヨコナデ (内面・体部) ロクロ回転によるナデ (底部) ヘラ切り未調整	淡灰色	やや粗	不良	ロクロ右回り
33	杯身	羨道	口径 12.4 受部径 13.4 器高 3.0	(内面・体部) ロクロ回転によるナデ (底部) ヘラ切り未調整	青灰色	精緻	良好	
34	杯身	羨道	口径 12.4 受部径 13.3 器高 3.15	(内面・体部) ロクロ回転によるナデ (底部) ヘラ切り未調整	青灰色	ほとんど精緻	良好	
35	杯身	仕切石南側	口径 11.3 受部径 12.9 器高 3.3	(内面・体部) ロクロ回転によるナデ (底部) ヘラ切り後一部ヨコナデ	濃灰色	精緻	良好	
36	杯身	仕切石南北	口径 11.8 受部径 13.4 器高 3.9	(内面・体部) ロクロ回転によるナデ (底部) ヘラ切り未調整	暗青灰色	精緻	良好	
37	杯身	仕切石南側	口径 11.3 受部径 12.6 器高 3.8	(内面・体部) ロクロ回転によるナデ (底部) ヘラ切り未調整	淡青灰色	精緻, 2mm 大の砂粒若干含む	良好	ロクロ右回り
38	杯身	仕切石南側	口径 [12.55] 受部径 [13.8]	(内面・体部) ロクロ回転によるナデ (底部) ヘラ切り未調整	青灰褐色 (一部褐色)	ほぼ精緻	良好	
39	杯身	仕切石北側	口径 10.1 受部径 11.4 器高 3.4	(内面底部) ヨコナデ (内面・体部) ロクロ回転によるナデ (底部) ロクロ回転によるヘラケズリ	(内面) 淡黒色 (外面) 灰褐色	精緻、2mm 大の砂粒多く含む	良好	ロクロ左回り
40	壺蓋	仕切石南側	口径 10.15 器高 3.45	(天井部) ヘラケズリ後ロクロ回転によるナデ (内面・口縁部) ロクロ回転によるナデ (内面天井部) ヨコナデ	暗青灰色	精緻、2~3mm 大の砂粒若干含む	良好	ロクロ右回り
41	低頸壺	仕切石南北	口径 [8.2] 銅径 [15.2] 器高 9.1	(内面・口縁部・体部) ロクロ回転によるナデ (底部) ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好	自然釉あり
42	長頸壺	墳丘内北面	口径 [4.6] 銅径 9.5 器高 13.5	(口頸部・体部 2分の1) ロクロ回転によるナデ (体部 2分の1) ロクロ回転によるヘラケズリの後ナデ (底部) ナデ	濃青灰色	精緻	良好	
43	長頸壺	羨道	口径 8.3 銅径 12.3 器高 16.6	(内面・口頸部・体部) ロクロ回転によるナデ (底部) ロクロ回転によるヘラケズリ	青灰色	精緻、2mm 大の砂粒若干含む	良好	
44	脚付長頸壺	墳丘下北斜面	銅径 19.8	(体部 3分の1・内面) ロクロ回転によるナデ (体部 3分の2) ロクロ回転によるヘラケズリ (底部) 脚台部接合後回転ナデ	淡青灰色	精緻、2mm 大の砂粒若干含む	良好	自然釉あり
45	埴瓶	仕切石北側、羨道	口径 6.8 銅径 [13.8] 器高 18.6	(内面・口縁部) ロクロ回転によるナデ、内面一部ユビナデ、口縁部接合後ヨコナデ (体部前面) ロクロ回転によるナデ、一部ユビナデ (体部後面) 中央はヘラケズリ、周辺はヘラケズリの後ナデ (肩部) 粘土円板貼付後ナデ	青灰色 (口縁部一部黒灰化)	精緻、0.1~0.2mm 大の砂粒多く含む	良好	
46	埴瓶	墳丘内北面	銅径 17.0	(口縁部・体部前面) ロクロ回転によるナデ (体部後面) 叩き成形の後中心をヨコナデ、その他はカキ目 (肩部) 把手貼付後ナデ	青灰色	精緻	良好	自然釉あり
47	平瓶	閉塞石内	口径 [6.8] 銅径 18.2 器高 19.0	(口頸部・体部) ロクロ回転によるナデ、口頸部接合後ナデ、上部に粘土円板貼付後指ナデ (底部) ロクロ回転によるヘラケズリ	淡青灰色	精緻	良好	
48	平瓶	墳丘北裾	口径 [6.5] 銅径 14.8 器高 [14.0]	(内面・口頸部・体部) ロクロ回転によるナデ、口頸部接合後ナデ (底部) ロクロ回転によるヘラケズリ	淡青灰色	精緻	良好	

遺物番号	器種	出土場所	計測数値 (cm)	成形・調整	色調	胎土	焼成	備考
49	横瓶	仕切石北側、羨道	口径 11.7 胴径 37.7 器高 28.9	(口頸部) ロクロ回転によるナデ、口頸部接合後ナデ (体部外面) 叩き成形の後部分的にカキメ、粘土板貼付後ユビナデ (体部内面) 叩き成形による青海波文、粘土板部ユビナデ	青灰色	精緻	良好	口頸部にヘラ記号あり
50	甕	仕切石北側、羨道、墳丘北	口径 [22.4] 胴径 42.8 器高 43.3	(口頸部) ロクロ回転によるナデ、口頸部接合後ナデ (体部) 叩き成の後部分的にカキメ (体部内面) 叩き成形による青海波文	青灰色 (一部暗灰色)	精緻	良好	胴部に須恵器片の窯着あり
51	甕	仕切石北側、閉塞石内、墳丘北西	口径 21.9 胴径 46.5 器高 50.5	(口頸部) ロクロ回転によるナデ、口頸部接合後ナデ (体部) 叩き成の後部分的にカキメ (体部内面) 叩き成形による青海波文	淡青灰色	精緻	良好	

須恵器 ([]: 復元値)

遺物番号	種別	出土場所	計測数値 (cm, g)			
			長さ	最大幅	断面厚	重量
52	鏃	仕切石南側		4.1	0.48	19.3
53	鏃	仕切石南側			0.27	11.5
54	鏃	仕切石南側	鏃身 5.4 茎 6.7	鏃身 1.3 茎 0.8	鏃身 10.18 茎 0.2	8.8
55	鏃	仕切石南側	鏃身 3.45	鏃身 1.0 茎 0.55	鏃身 0.24 茎 0.3	8.3
56	鏃	仕切石南側	茎 9.8	鏃身 0.95 茎 0.65	茎 0.3	13.0
57	鏃	仕切石南側		0.6	0.24	5.2
58	鏃	仕切石南側		0.6	0.28	5.4
59	鏃	仕切石南側		0.68	0.31	5.7
60	鏃	仕切石北側	鏃身 6.4	茎 0.45	鏃身 0.22 茎 0.24	15.9
61	鏃	羨道	鏃身 4.7	鏃身 [1.6] 茎 0.5	鏃身 0.2 茎 0.32	5.9
62	鏃	羨道	鏃身 5.5	鏃身 1.35 茎 0.6	鏃身 0.21 茎 0.18	5.5
63	鏃	羨道			0.17	2.5
64	鏃	羨道		鏃身 1.2 茎 0.6	鏃身 0.23 茎 0.22	4.9
65	鏃	羨道		鏃身 1.2 茎 0.6	鏃身 0.33 茎 0.2	2.3
66	鏃	羨道	鏃身 3.0	鏃身 1.1 茎 0.55	鏃身 0.18 茎 0.3	9.9
67	鏃	羨道	茎 10.6	茎 0.65	鏃身 0.25 茎 0.24	7.4
68	鏃	墳丘外南東部	鏃身 7.9 茎 5.7	茎 0.6	鏃身 0.34 茎 0.45	26.5
69	刀	仕切石南側		2.9	0.48	196.4
70	刀	仕切石南側		2.76	0.5	219.4
71	鏢	仕切石南側		1.6	0.1~0.25	10.3
72		仕切石南側			0.1	3.2
73		仕切石南側			0.1 端部 0.45	4.0
74	穂摘具	仕切石南側	2.5	袋部 1.05	0.2 袋部 0.1	9.9
75	釘	仕切石南側		2.7	0.4	13.0
76	釘	仕切石南側		2.9	0.43	13.8
77	釘	仕切石南側		3.2	0.42	19.3
78	釘	仕切石南側	[5.4]	2.8	0.69	16.1
79	釘	仕切石南側		3.1	0.4	18.1
80	釘	仕切石南側		2.3	0.5	27.5
81	釘	仕切石北側	13.7	3.1	0.5	46.5
82	釘	仕切石北側	13.7	2.6	0.5	27.7
83	釘	羨道		2.8	0.5	20.3
84	釘	墳丘下北東部		3.2	0.52	44.1
85	釘	墳丘下北東部	14.2	2.6	0.49	46.1
86	釘	墳丘下北東部	[12.6]	2.56	0.38	19.3
87	釘 2 個体	仕切石南側		1.0, 0.9	0.18 0.37	14.5
88	釘身	羨道		0.72	0.21	3.5
89	釘身	仕切石北側		0.9	0.1	3.4
90	釘身	羨道		0.8	0.3	9.0
91	釘身	仕切石南穂摘具同位置		0.75	0.24	7.8
92	不明	仕切石北側		0.82	0.21	4.6
93	不明	仕切石南側		1.1	0.4	26.1

装飾品

遺物 番号	種別	出土場所	計測数値 (cm, g)				材質	色調	備考
			外径	内径	断面径	重量			
94	耳環	仕切石南側	2.6 ~ 2.93	1.4 ~ 1.89	0.6	12.3	青銅に銀めっき		
95	耳環	仕切石南側	2.6 ~ 2.93	1.5 ~ 1.82	0.56 ~ 0.62	12.8	青銅に銀めっき		
96	耳環	仕切石南側	2.58 ~ 2.92	1.5 ~ 1.96	0.53	9.7	青銅に銀めっき		
97	耳環	仕切石北側	2.6 ~ 2.75	1.5 ~ 1.7	0.61 ~ 0.73	16.7	青銅に銀めっき		
98	耳環	仕切石北側	2.7 ~ 2.88	1.5 ~ 1.62	0.61 ~ 0.65	17.1	青銅に銀めっき		
99	耳環	仕切石北側	2.6 ~ 2.85	1.42 ~ 1.67	0.62 ~ 0.78	16.4	青銅に銀めっき		
100	耳環	仕切石北側	2.7 ~ 2.82	1.45 ~ 1.63	0.6 ~ 0.65	17.1	青銅に銀めっき		

遺物 番号	種別	出土場所	計測数値 (cm, g)				材質	色調	備考
			長	幅	孔径	重量			
101	匂玉	仕切石南側	3.55	1.1	0.16 ~ 0.19	6.7	瑪瑙	赤茶色	片側穿孔
102	匂玉	仕切石北側	3.0	1.2	0.14 ~ 0.26	7.8	瑪瑙	薄い赤茶色	片側穿孔
103	匂玉	仕切石北側	3.0	1.1	0.16 ~ 0.29	6.4	瑪瑙	赤茶色	片側穿孔
104	匂玉	仕切石北側	2.7	1.1	0.14 ~ 0.28	4.6	碧玉	濃緑	片側穿孔
105	切子玉	仕切石北側	2.55	1.55	0.25 ~ 0.37	7.2	石英	透明	片側穿孔
106	切子玉	仕切石北側	2.5	1.6	0.18 ~ 0.32	7.2	石英	透明	片側穿孔
107	管玉	仕切石北側	2.85	1.1	0.12 ~ 0.33	5.6	碧玉	濃緑	片側穿孔
108	管玉	仕切石北側	2.72	0.96	0.16 ~ 0.32	5.2	碧玉	濃緑	片側穿孔
109	小玉	仕切石南側	0.69	0.74	0.18	0.5	土製	黒	
110	小玉	仕切石南側	0.66	0.7	0.18 ~ 0.21	0.4	土製	黒	
111	小玉	仕切石南側	0.56	0.7	0.18	0.3	土製	黒	
112	小玉	仕切石南側	0.57	0.8	0.18 ~ 0.22	0.4	土製	黒	
113	小玉	仕切石南側	0.56	0.7	0.22	0.3	土製	黒	
114	小玉	仕切石南側	0.6	0.78	0.19 ~ 0.22	0.3	土製	黒	
115	小玉	仕切石南側	0.55	0.68	0.16 ~ 0.21	0.3	土製	黒	
116	小玉	仕切石南側	0.6	0.81	0.18	0.5	土製	黒	指紋残存
117	小玉	仕切石南側	0.6	0.79	0.15 ~ 0.2	0.4	土製	黒	
118	小玉	仕切石南側	0.6	0.73	0.23	0.4	土製	黒	
119	小玉	仕切石南側	0.5	0.75	0.16	0.3	土製	黒	
120	小玉	仕切石南側	0.58	0.8	0.18	0.4	土製	黒	
121	小玉	仕切石南側	0.57	0.79	0.19 ~ 0.21	0.3	土製	黒	
122	小玉	仕切石南側	0.54	0.8	0.19 ~ 0.24	0.4	土製	黒	
123	小玉	仕切石南側	0.54	0.65	0.17 ~ 0.2	0.3	土製	黒	
124	小玉	仕切石南側	0.61	0.71	0.16 ~ 0.23	0.3	土製	黒	
125	小玉	仕切石南側	0.6	0.79	0.13 ~ 0.21	0.4	土製	黒	
126	小玉	仕切石南側	0.55	0.87	0.22	0.4	土製	黒	
127	小玉	仕切石南側	0.58	0.8	0.16 ~ 0.25	0.4	土製	黒	
128	小玉	仕切石南側	0.53	0.76	0.09 ~ 0.16	0.4	土製	褐色	
129	小玉	仕切石南側	0.54	0.8	0.17 ~ 0.21	0.4	土製	黒	
130	小玉	仕切石南側	0.52	0.84	0.17	0.4	土製	黒	
131	小玉	仕切石南側	0.62	0.8	0.16	0.4	土製	黒	
132	小玉	仕切石南側	0.58	0.7	0.15 ~ 0.2	0.3	土製	褐色	
133	小玉	仕切石南側	0.64	0.72	0.15 ~ 0.17	0.4	土製	黒	
134	小玉	仕切石南側	0.59	0.7	0.17 ~ 0.2	0.3	土製	黒	
135	小玉	仕切石南側	0.59	0.67	0.15	0.4	土製	黒	
136	小玉	仕切石南側	0.58	0.75	0.23 ~ 0.25	0.4	土製	黒	
137	小玉	仕切石南側	0.57	0.8	0.18	0.4	土製	黒	
138	小玉	仕切石南側	0.58	0.69	0.18 ~ 0.2	0.4	土製	黒	
139	小玉	仕切石南側	0.59	0.84	0.15 ~ 0.2	0.4	土製	褐色	
140	小玉	仕切石南側	0.51	0.77	0.15 ~ 0.18	0.3	土製	黒	
141	小玉	仕切石南側	0.52	0.79	0.15 ~ 0.2	0.3	土製	黒	
142	小玉	仕切石南側	0.56	0.71	0.16 ~ 0.18	0.3	土製	黒	
143	小玉	仕切石南側	0.5	0.68	0.18 ~ 0.2	0.3	土製	黒	
144	小玉	仕切石南側	0.43	0.63	0.18	0.2	土製	黒	
145	小玉	仕切石南側	0.43	0.66	0.14	0.2	土製	黒	
146	小玉	仕切石北側	0.26	0.4	0.13 ~ 0.16	0.1	ガラス製	紺	巻き
147	小玉	仕切石北側			0.08 ~ 0.11	—	ガラス製	紺	カット

遺物 番号	種別	出土場所	計測数値 (cm, g)				材質	色調	備考
			長	幅	孔径	重量			
148	小玉	仕切石北側	0.27	0.46	0.12	0.1	ガラス製	紺	
149	小玉	仕切石北側	0.21	0.32	0.12	—	ガラス製	紺	
150	小玉	仕切石北側	0.27	0.48	0.2	0.1	ガラス製	紺	カット
151	小玉	仕切石北側	0.28	0.42	0.15~0.18	0.1	ガラス製	紺	カット
152	小玉	仕切石北側	0.28	0.43	0.11	0.1	ガラス製	紺	
153	小玉	仕切石北側	0.1	0.25	0.08	—	ガラス製	紺	
154	小玉	仕切石北側	0.2	0.29	0.08	—	ガラス製	紺	
155	小玉	仕切石北側	0.23	0.34	0.13	—	ガラス製	紺	
156	小玉	仕切石北側	0.21	0.44	0.15	0.1	ガラス製	紺	
157	小玉	仕切石北側	0.4	0.48	0.12	0.2	ガラス製	紺	
158	小玉	仕切石北側	0.2	0.33	0.14	—	ガラス製	紺	
159	小玉	仕切石北側	0.17	0.33	0.16	—	ガラス製	紺	巻き?
160	小玉	仕切石北側	0.27	0.32	0.09	—	ガラス製	濃紺	
161	小玉	仕切石北側	0.23	0.31	0.1	—	ガラス製	濃紺	
162	小玉	仕切石北側	0.24	0.38	0.12	0.1	ガラス製	青	巻き?
163	小玉	仕切石北側	0.25	0.3	0.07	—	ガラス製	青	
164	小玉	仕切石北側	0.2	0.38	0.13~0.15	—	ガラス製	青	巻き?
165	小玉	仕切石北側	0.32	0.36	0.1	0.1	ガラス製	青	巻き?
166	小玉	仕切石北側	0.2	0.25	0.07	—	ガラス製	青	
167	小玉	仕切石北側	0.2	0.33	0.13	—	ガラス製	青	巻き?
168	小玉	仕切石北側	0.22	0.3	0.09	—	ガラス製	青	
169	小玉	仕切石北側	0.38	0.47	0.16	0.1	ガラス製	青	
170	小玉	仕切石北側	0.41	0.34	0.14~0.11	0.1	ガラス製	青	
171	小玉	仕切石北側	0.39	0.38	0.15	0.1	ガラス製	青	
172	小玉	仕切石北側	0.2	0.28	0.1	—	ガラス製	青	
173	小玉	仕切石北側	0.23	0.33	0.13	—	ガラス製	青	巻き
174	小玉	仕切石北側	0.2	0.4	0.16	—	ガラス製	青	
175	小玉	仕切石北側	0.25	0.39	0.15	—	ガラス製	青	
176	小玉	仕切石北側	0.2	0.33	0.15	—	ガラス製	青	
177	小玉	仕切石北側	0.21	0.33	0.11	—	ガラス製	青	
178	小玉	仕切石北側	0.32	0.4	0.1	—	ガラス製	青	
179	小玉	仕切石北側	0.22	0.31	0.1	—	ガラス製	青	
180	小玉	仕切石北側	0.28	0.35	0.12	—	ガラス製	濃青	カット
181	小玉	仕切石北側	0.25	0.29	0.08	—	ガラス製	濃青	巻き
182	小玉	仕切石北側	0.36	0.32	0.09	—	ガラス製	濃青	
183	小玉	仕切石北側	0.12	0.29	0.11	—	ガラス製	紺	カット
184	小玉	仕切石北側	0.26	0.25	0.1	—	ガラス製	紺	カット
185	小玉	仕切石北側	0.2	0.35	0.11	—	ガラス製	紺	
186	小玉	仕切石北側	0.18	0.31	0.12	—	ガラス製	紺	
187	小玉	仕切石北側	0.22	0.26	0.09	—	ガラス製	紺	巻き
188	小玉	仕切石北側	0.23	0.29	0.1	—	ガラス製	紺	巻き
189	小玉	仕切石北側	0.19	0.28	0.09	—	ガラス製	紺	
190	小玉	仕切石北側	0.2	0.27	0.08	—	ガラス製	紺	
191	小玉	仕切石北側	0.26	0.36	0.13	—	ガラス製	濃青	
192	小玉	仕切石北側	0.41	0.55	0.09~0.15	0.3	ガラス製	濃青	
193	小玉	仕切石北側	0.33	0.34	0.1	—	ガラス製	青	
194	小玉	仕切石北側	0.3	0.32	0.12	—	ガラス製	青	
195	小玉	仕切石北側	0.23	0.38	0.11	—	ガラス製	青	
196	小玉	仕切石北側	0.23	0.33	0.1	—	ガラス製	青	
197	小玉	仕切石北側	0.27	0.26	0.11~0.13	—	ガラス製	青	
198	小玉	仕切石北側	0.19	0.35	0.14	—	ガラス製	青	
199	小玉	仕切石北側	0.18	0.27	0.1	—	ガラス製	青	
200	小玉	仕切石北側	0.13	0.23	0.08	—	ガラス製	青	
201	小玉	仕切石北側	0.17	0.25	0.14	—	ガラス製	青緑	カット
202	小玉	仕切石北側	0.18	0.32	0.1	—	ガラス製	青緑	巻き?
203	小玉	仕切石北側	0.19	0.3	0.13	—	ガラス製	青緑	カット
204	小玉	仕切石北側	0.11	0.26	0.11	—	ガラス製	青緑	巻き?
205	小玉	仕切石北側	0.15	0.21	0.07	—	ガラス製	青緑	巻き?
206	小玉	仕切石北側	0.28	0.26	0.08~0.11	—	ガラス製	青緑	カット
207	小玉	仕切石北側	0.18	0.26	0.1	—	ガラス製	緑	巻き

遺物 番号	種別	出土場所	計測数値 (cm, g)				材質	色調	備考
			長	幅	孔径	重量			
208	小玉	仕切石北側	0.24	0.28	0.13	—	ガラス製	緑	巻き
209	小玉	仕切石北側	0.19	0.25	0.09	—	ガラス製	青緑	
210	小玉	仕切石北側	0.33	0.32	0.08	—	ガラス製	青緑	巻き？
211	小玉	仕切石北側	0.28	0.31	0.08	—	ガラス製	青緑	巻き？
212	小玉	仕切石北側	0.24	0.33	0.13	—	ガラス製	緑青	
213	小玉	仕切石北側	0.2	0.3	0.1	—	ガラス製	緑青	巻き？
214	小玉	仕切石北側	0.25	0.36	0.13	—	ガラス製	緑青	
215	小玉	仕切石北側	0.2	0.25	0.08	—	ガラス製	緑青	
216	小玉	仕切石北側	0.21	0.29	0.12	—	ガラス製	緑青	巻き？
217	小玉	仕切石北側	0.22	0.23	0.09	—	ガラス製	緑青	
218	小玉	仕切石北側	0.22	0.28	0.05~0.07	—	ガラス製	緑青	
219	小玉	仕切石北側	0.23	0.29	0.1	—	ガラス製	緑	巻き
220	小玉	仕切石北側	0.2	0.28	0.12	—	ガラス製	緑	
221	小玉	仕切石北側	0.28	0.28	0.09~0.11	—	ガラス製	緑	カット
222	小玉	仕切石北側	0.25	0.29	0.07~0.09	—	ガラス製	緑	
223	小玉	仕切石北側	0.22	0.31	0.09	—	ガラス製	緑	
224	小玉	仕切石北側	0.28	0.43	0.14	—	ガラス製	緑	カット？
225	小玉	仕切石北側	0.3	0.26	0.07	—	ガラス製	緑	
226	小玉	仕切石北側	0.22	0.32	0.1	—	ガラス製	緑	
227	小玉	仕切石北側	0.24	0.27	0.09	—	ガラス製	黄	
228	小玉	仕切石北側	0.32	0.48	0.16~0.2	0.1	ガラス製	黄	カット？
229	小玉	仕切石北側	0.3	0.29	0.09	—	ガラス製	黒	

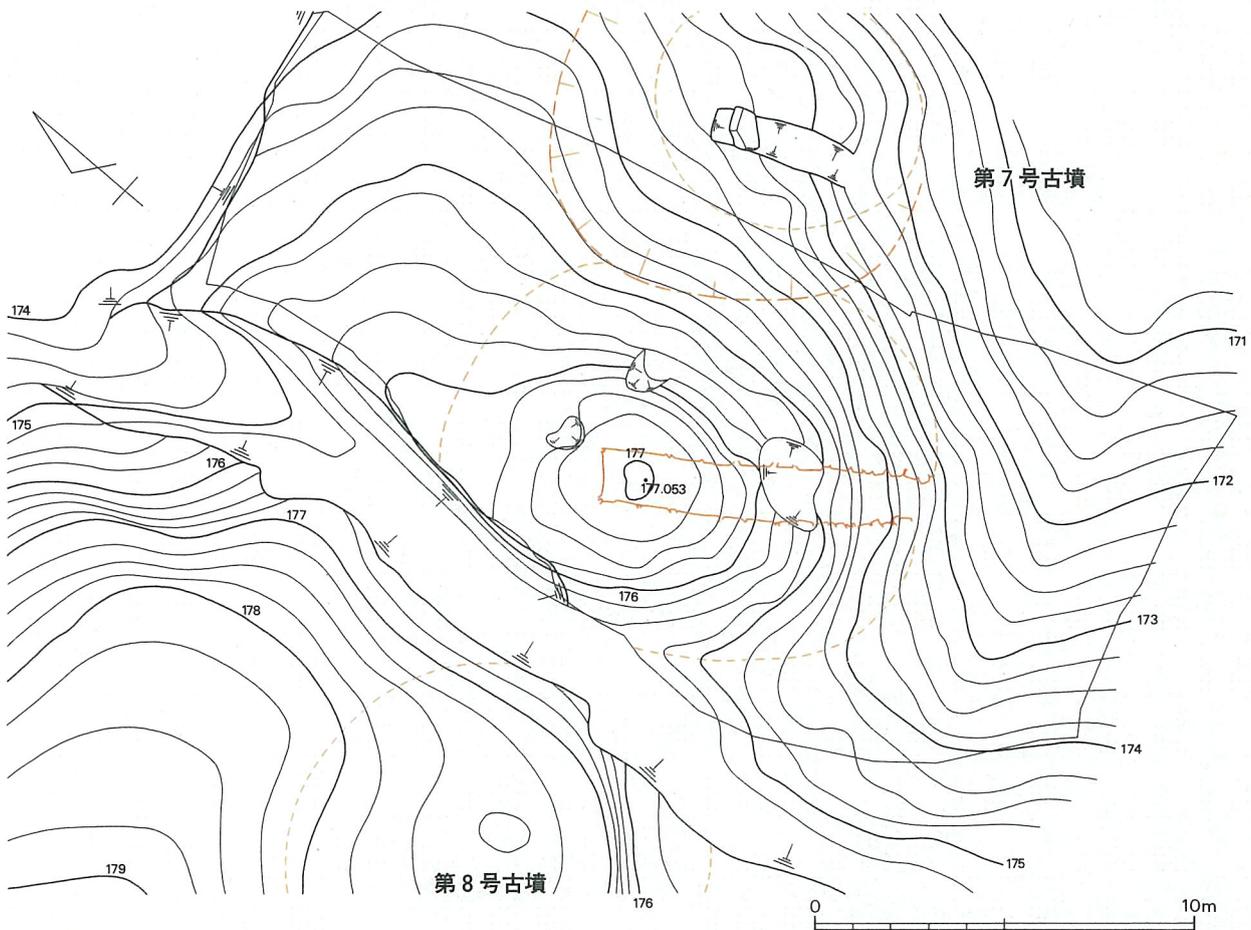
4. 第6号古墳

(1) 位置と現状 (第18図・図版10-a)

第6号古墳は、西の山塊から派生する丘陵尾根上に立地する。墳頂部付近で、標高約176mである。墳丘の北側10mの地点は谷地が形成されている。また墳丘の南西面は、狭隘な谷地になっており、この谷地を挟んで南にはやや広めの平坦面が緩やかな傾斜で東へ延びている。このことから、古墳からの景観は必ずしも良好とはいえない。谷地からの比高は約5mである。南西には第8号古墳、北東には第7号古墳が隣接して立地しており、墳丘中心で、それぞれ約10m離れている。本古墳の石室はすでに開口しており、南東方向に入口を持つ横穴式石室であることが確認された。また、里道により墳丘西側裾部は削平されている。

(2) 墳丘・周溝 (第19, 20図・図版10-b)

墳丘規模が、北西-南東13.1m、南西-北東10.6mの方墳である。墳丘の高さは、北東側墳裾から2.52m、南西側墳裾から1.58mである。墳丘南西側から南にかけての裾には、幅0.1~1mの周溝が廻る。周溝は墳丘の東側傾斜面に、南側に向けてめぐり、消滅する。北にも延びているが、調査範囲外になり規模は不明である。



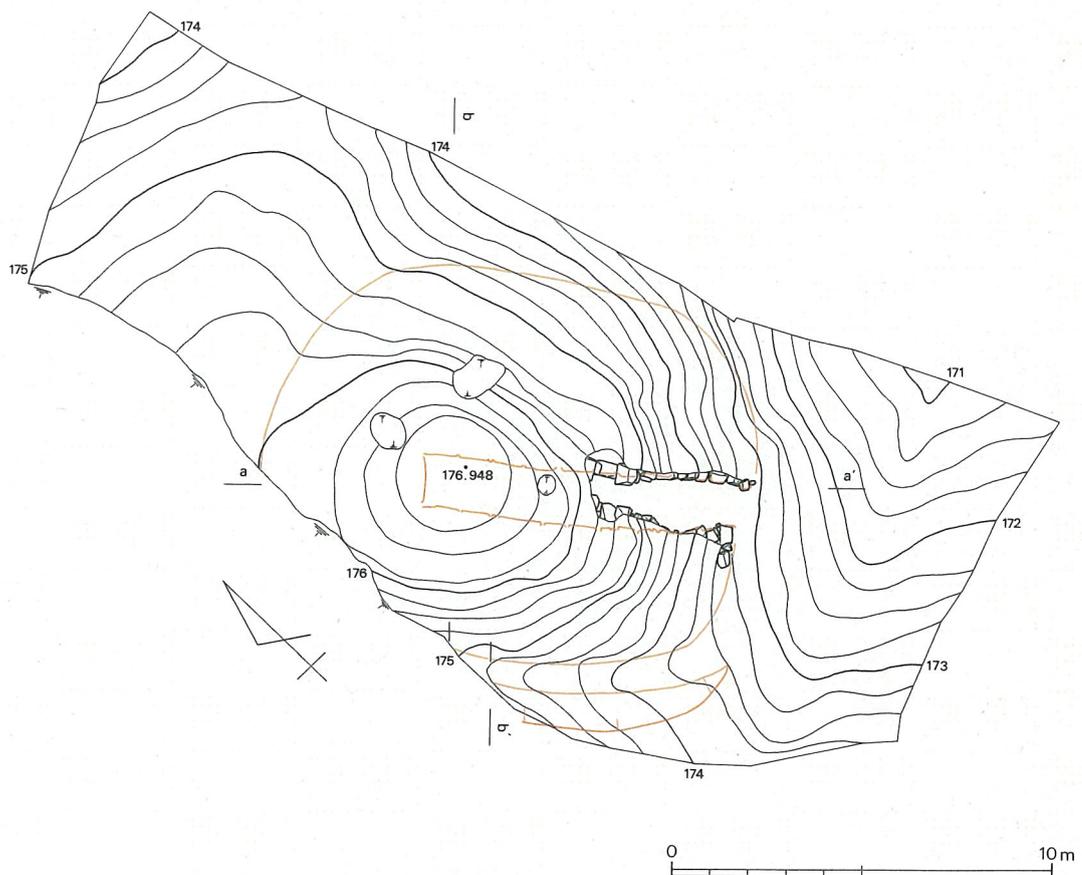
第18図 第6号古墳実測図 (調査前, S = 1 : 200)

墳丘は丘陵を利用して造られている。第8号古墳の墳裾に隣接した丘陵尾根上において、丘陵斜面の高い方（北側）を掘削し、平坦面を整え、墳丘基底面を形成している。そして丘陵尾根の主軸に対し、直交する方向に石室を構築するための掘り方が穿たれている。掘り方は基底面のほぼ中央に掘り込まれるが、南側は石室の途中で消滅する。平面形態は西側5m、東側3m、北側4mの「コ」の字状を呈し、深さは北側が最も深く1.5mである。墳丘の盛土は、墳丘基底面に行われ、現状で約1m前後残存し、古墳の築造過程に合わせて、大きく4段階に分かれる。まず第1段階は、石室の構築作業と合わせて行われる石室の裏込め作業である。東側壁の裏込めは2段階にわたり実施されていたと考えられる。第2段階は、天井石架構終了後に行われる天井石の被覆である。次に述べる石積みはこの段階に実施される。第3段階は、墳形を整える作業が実施される。墳頂部からは焼土層が確認され、何らかの祭祀行為が行われた可能性がある。第4段階はさらに、墳形を整える作業が実施されている。

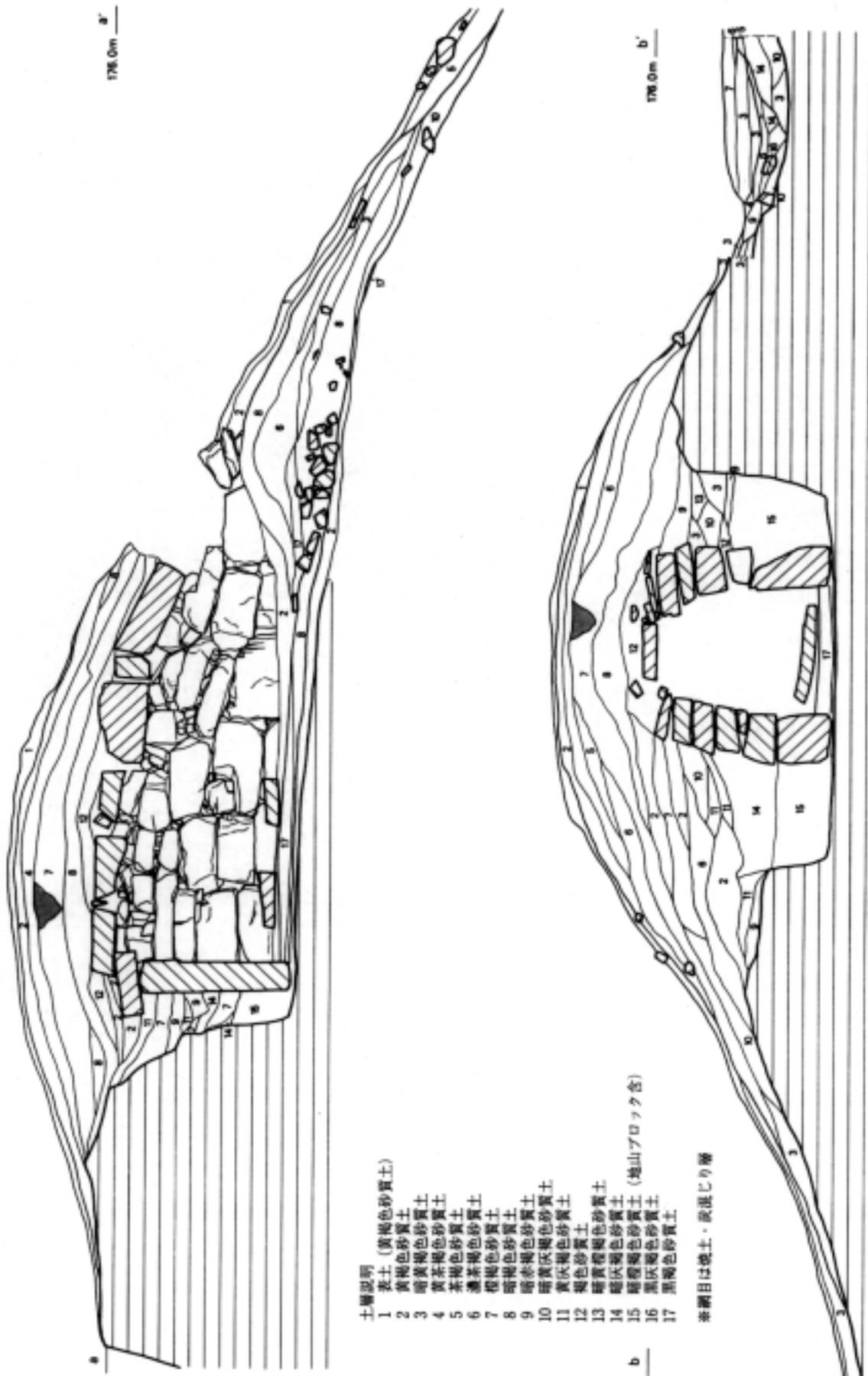
(3) 石積遺構（石列）（第21図・図版11）

墳丘盛土内において、石室前面部から墳裾南半部をめぐる石積遺構が、また墳丘北東側及び墳頂部天井石西側においても石積遺構及び列石が検出された。

まず石室前面部の石積遺構は、このうち石室主軸よりも西側については、石室先端部からとりつ



第19図 第6号古墳実測図（S = 1 : 200）



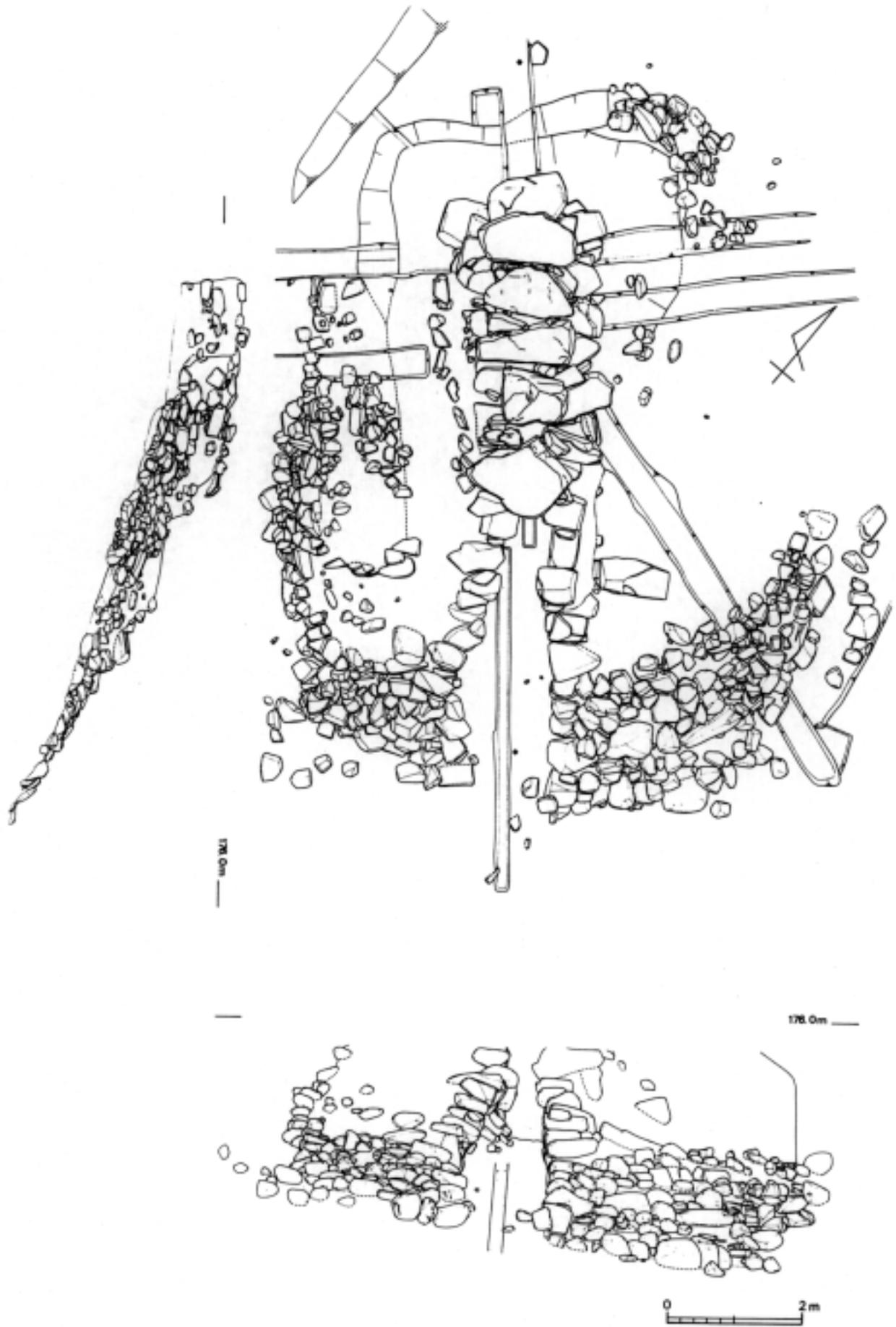
第 20 図 第 6 号古墳墳丘断面図 (S = 1 : 60)

き、西方向に約2m伸びたあと、そこからほぼ北方向に直角に曲がる。北方向へは石室と平行して約6m伸びている。石材は20～40cm大の角礫が使用されており、乱積みにされている。石室前面から見た場合、側壁が基底石のみとなる箇所、つまり水平距離で幅約1.5mの範囲にわたって、約20度の傾斜を持つ丘陵に対して約13度の傾斜で7～8段程度、石積みが行われている。面を変えて西面を見ると約20度の傾斜面上に南半部約3mは1～2段程度、残り北半部は約70度の角度で5～6段程度、高さ0.1～1.7m積み上げられている。一方東側は、石室先端部からとりつき、東方向に約3.5m伸びたあと、そこからほぼ直角にまがる。北方向へは石室と平行して約4m伸びる。石積みの上端は西側と異なりやや曲線を描く。なお、さらに外側で約2.7mの五列が確認されたが、これは第7号古墳にともなう可能性がある。また北東隅で確認された石積遺構とは本来つながっていた可能性があるが、その場合は第7号古墳築造にともなう背面カットによって石材が抜き取られたものであろう。さて石材については丘陵自体東西方向で約9度の傾斜がついているためか、西側に比べて大きなものを使用している。特に墳裾付近では70～80cm大の石材も見られる。この東側の石積遺構は、石室前面から見た場合、側壁が基底石のみとなる箇所、水平距離で幅約2mの範囲にわたって、同じく丘陵の傾斜に対して約13度の傾斜で8段程度石積みを行っている。面を変えて東面を見ると1～2段程度となっている。このことから表面的には、石室前面部は階段状を呈し、西面はどちらかといえば石垣状を呈している。ところで基盤層の傾斜が東西方向で約10度程度あるにも関わらず、西側の方が丁寧に積み上げられているといった、石積みの様相の違いについては、まずは先行して築造された第8号古墳と墳丘を画することが理由としてあったと思われる。ただ、機能的面からみれば、この石積遺構が斜面側となる南半部のみ構築されていることからいえば、石室の保護も兼ね備えたものであったといえよう。なお側壁が基底のみとなる前面については、後述するように羨道のうち墓道的な性格が強くその保護が目的であった可能性が高い。

さて、この石積遺構について、特に西側を中心に見ると、前面から約3m北側の位置に、石室西側壁から西面に伸びる1～2段の石刻が存在している。この位置は、石積遺構西面における石積みの様相が異なる境界に位置する。また、この位置の石室西側壁を見ると基底石が奥壁から6石目に設置された立石箇所となっている。この立石は石室構築にあたって何らかの基準となり、石積遺構の構築も一連の作業工程として行われた可能性が高い。西側壁ではさらに奥壁から9石目に設置された基底石も立石となり、この位置は石室前面の石積遺構の上辺でもある。このことから、石室の構築と合わせて石積みが2ないし3段階に分けて行われたと想定できる。すなわち、まず6番目の基底石までと石積みが、次に9石目の基底石までと石積み、最後に側壁が基底石のみとなる箇所と石積みという順で構築されていると考えられる。ところで、石室東側壁については、西側壁とは異なり、立石は確認されていないことから、その構築にあたっては西側壁が基準となったといえよう。なお、墳丘上面西側において、天井石設置直前に、石室最上部と平行に施された石刻が確認されたが、その用途については不明である。

(4) 埋葬施設 (第22, 23図・図版12～14)

本古墳の埋葬施設は、南東方向(N39.5°W)に開口する無神式の横穴式石室である。石室は地



第 21 図 第 6 号古墳石積遺構実測図 (S = 1 : 80)

山を掘削した平面形が長さ約8m、幅約4.5mの長方形を呈する掘り方の中央部に構築されている。石室の現存する長さは、東側壁で8.86 m、西側壁で8.2 mである。幅は奥壁側で1.43 m、最も広くなる奥壁から4.6 mの付近で1.53 m、石室入口の最も狭くなる箇所では1.01 mである。高さは奥壁側で1.73 m、最も高くなる奥壁から0.85 mの付近で1.75 m、同じく最も低くなる奥壁から4 m付近で1.27 mである。また、石室の入口側約1.6 mにわたって、西側壁、東側壁とも上端が約30度の傾斜をとる。

天井石

天井石は5枚で、隙間に人頭人、拳大の石材を詰めている。最北端の天井石は横1.45 m×幅0.73 m、厚さ0.24 m、2石目は横1.25 m×幅0.71 m、厚さ0.29 m、3石目は天井石中、幅が最も狭く、横1.5 m×幅0.64 m、厚さ0.21 mである。1番目から3番目の天井石までは天井面をある程度揃えている。4石目は横0.99 m×幅0.85 m、厚さ0.48 mで、下面は3石目よりも約20 cm下がっている。4石目から20 cm程度隙間を開けて、5石目が架構されている。5石目は最も大きく、横1.55 m×幅1.02 m、厚さ0.35 mである。この5番目の天井石は、西側壁の一部崩落に伴って、幾らか入口側に向けて傾斜している。

奥壁

奥壁は、基底に幅1.1～1.3 m、高さ1.48 mの扁平な五角形の板石を立て設置し、その上に縦0.2 m×横0.8 mの面を向け、奥行き0.6 m程度の石を横積みになっている。壁面は基底石の面が大半を占め、ほぼ垂直に立ち上がる。2段目の石は基底石の側面よりも10 cm程度内側に出て、天井石を架構する。床面からの高さは約1.73 mである。

西側壁

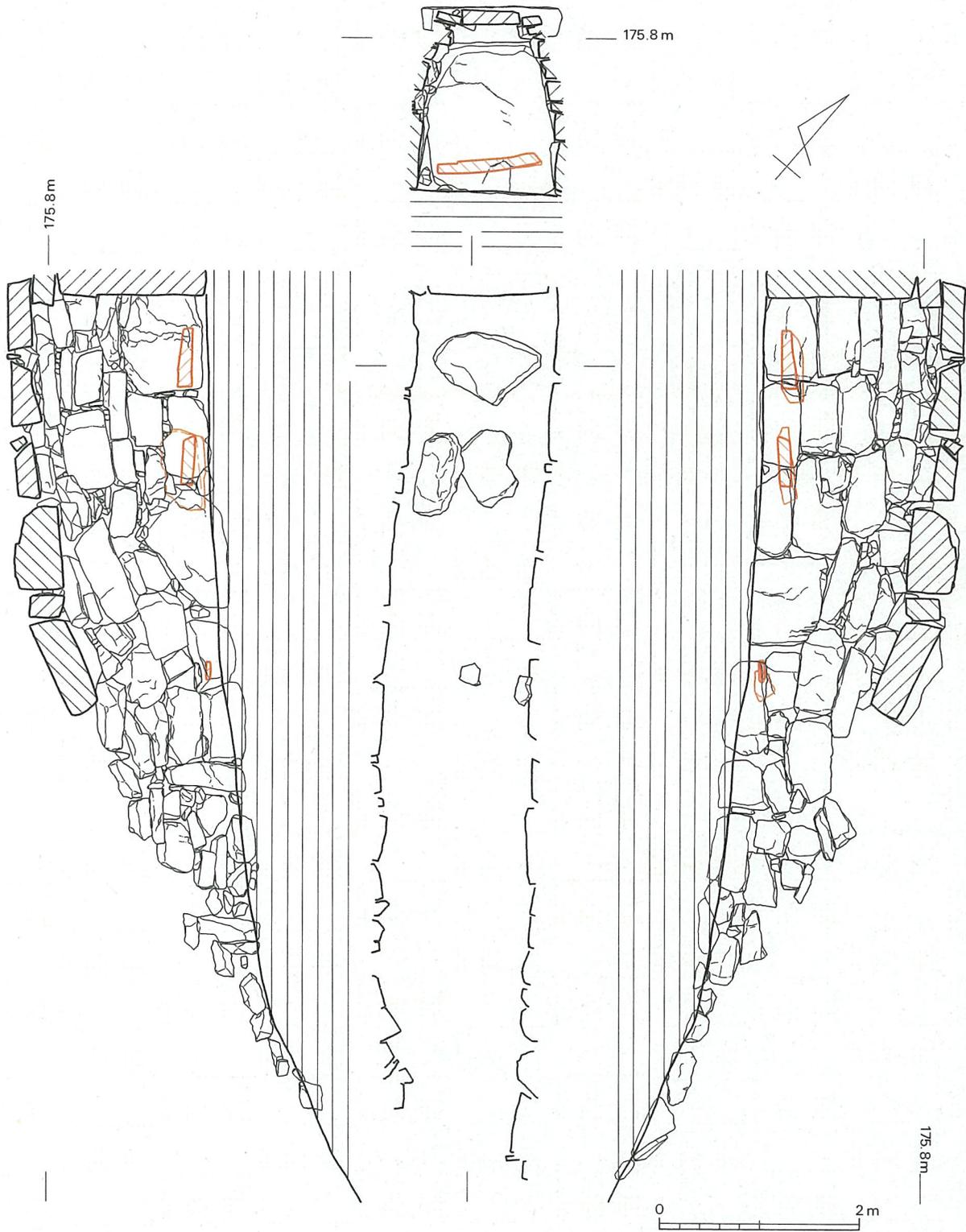
西側壁の最も高い位置は奥壁から1.5 m南で1.75 m、最も低い位置は奥壁から3.8 m南で1.28 mである。基底石は全部で14個であり、東側壁と異なり、全体的に大きさ、形状の異なる石材を設置している。奥壁から4.8 m南と、6.05 m南の位置には、それぞれ、0.7 m×0.2 mと0.6 m×0.2 mの長方形の石材を立てている。なお、11石目以降は壁面が基底石のみとなっている。

壁面は奥壁から約4.6 mに位置する立石箇所までは、基底石は除き、比較的横長の石材が使用されており、特に奥壁から2.4 m南までは床面から約1 mと1.5 mの高さで目地が通っている。奥壁から約3 m南の壁面は壁石が二石程度崩落して乱れている。そこから南はまた床面から約1 mの高さでは横方向に目地が通っており、本来はこの高さで積み上げの段階を画していると考えられる。立石以南は使用される石材の大きさ、形状とも異なっており、あまり規則性は認められない。奥壁から約6.2 mの位置に設置された立石以南は、入口に向かって約30度の傾斜で下がっている。なお、先述した2箇所の立石の位置において、石材の大きさ、積み方が異なることから、大きくはこの立石を画して、側壁の構築が行われたと考えられる。西側壁は床面から1 mあたりまで、ほぼ85度の角度で立ち上がり、そこからほぼ70度の角度で内傾し持ち送り状となる。最上段は鼓下段よりも34 cm程度せり出す。

東側壁

東側壁の最も高い位置は奥壁から0.85 m南で1.75 m、最も低い位置は奥壁から4 m南で1.27 mで

ある。基底石は比較的大型の石材を奥壁から5石設置している。このうち4石目はほぼ正方形を呈し、高さが異なっている。6石目以降は9つの小型の石材を並べている。4石目の基底石までは、隣接する石材との下面ラインはある程度揃えているが、5石目以降の基底石はその下面ラインは約



第22図 第6号古墳石室実測図 (S = 1 : 60)

20 cm下げている。6石目以降の基底石はそれまでよりも小振りで、入口に向かってさらに小振りになる傾向にある。なお、10石目以降は壁面が基底石のみとなる。

壁面は5石目の基底石までは大型で形状も横長に揃った石材で構成し、特に奥壁から約2.6mまでは床面から高さ1.2mで比較的横目地が通っている。それ以降もやや傾斜がつくが、横目地が意識されている。6石目の基底石以降は石材の大きさ、形状とも不規則になる。隣接する石のラインは意識されているが、上端は入口に向かって約30度の傾斜で下がっている。なお、東側壁には構築にあたっての画するような立石は見られなかったものの、基底石においては西側壁の立石それぞれに対応する位置を境に石材の大きさ、積み方が同じように変化している。このことから、西側壁を基準に東側壁は構築された可能性がある。東側壁は床面から85 cmあたりまではほぼ垂直に立ち上がり、そこから、ほぼ75度の角度で内傾し持ち送り状となる。最上段は最下段よりも35 cm程度せりだす。

以上の状況から考えた場合、東西側壁の積み方については大きな共通点が見られないものの、両側壁とも基底石下面が一段低くなるあたりは、床面（下部床面）が約8度の傾斜で下降する。また東側壁においてはこの位置で北側の基底石と石材の大きさが異っている。このことから、この位置が玄室と羨道を区別していると考えられる。このように想定するならば、玄室は長さ約3.6m、羨道の長さは東側壁で5.26m、西側壁で4.6mである。玄室の幅はほぼ1.43mである。玄室の長さ幅の比は、ほぼ2.6:1である。羨道の幅は玄室との境で1.45m、入口側で1.1mである。また、玄室と羨道との長さの比は東側壁でほぼ1:1.5で、西側壁で1:1.2である。

ところで、先述した壁面が基底石だけとなる入口側の東側壁で2m、西側壁で1.6mの範囲は、その機能的な意味からいえば、側壁とは言えるものではない。この範囲のそれぞれの外側には石積遺構が構築されており、それよりも北側の側壁とは様相が異なる。このことから、この範囲は羨道とするよりもむしろ墓道的な認識がなされたと想定される。またこの範囲の床面は約30度の傾斜で下降することからもこの想定は首肯されよう。なお、石積遺構はこの保護が目的であったのであろう。この場合、羨道は、東側壁で3.26m、西側壁で3mの長さとなる。また、玄室と羨道の長さの比は東側壁で1:0.8、西側壁で1:0.7である。

床面

石室において上下2面の床面を確認した。下部床面は地山に厚さ3～10cmの盛土を施した面であり、上部床面はさらに3～13cm程度、盛土して形成されている。なお、上部床面からは後述する2枚の板状の石材が確認された。

下部床面においては、その上面からは棺台石などの石材は見つかっていない。ただ奥壁から3.9m離れた東側壁寄りには、0.25m×0.2m程度の石が側壁に寄り掛かった状態で傾いて設置されていた。上部床面上にも露出していたが、下部床面における棺台石であった可能性がある。

上部床面においては、奥壁から3.9m離れた箇所には0.18m×0.15mの広口面を上に向けた平石が設置されていた。この石は上部床面に上面を合わせて設置されている。その性格については不明である。また、長軸方向に並んで、広口面を上にした2枚の板状の石が確認された。なお、入口側の石には西側壁寄りに1枚の板状の石が斜めに寄り掛かっていた。奥壁側の石は、1.06m×0.7mの

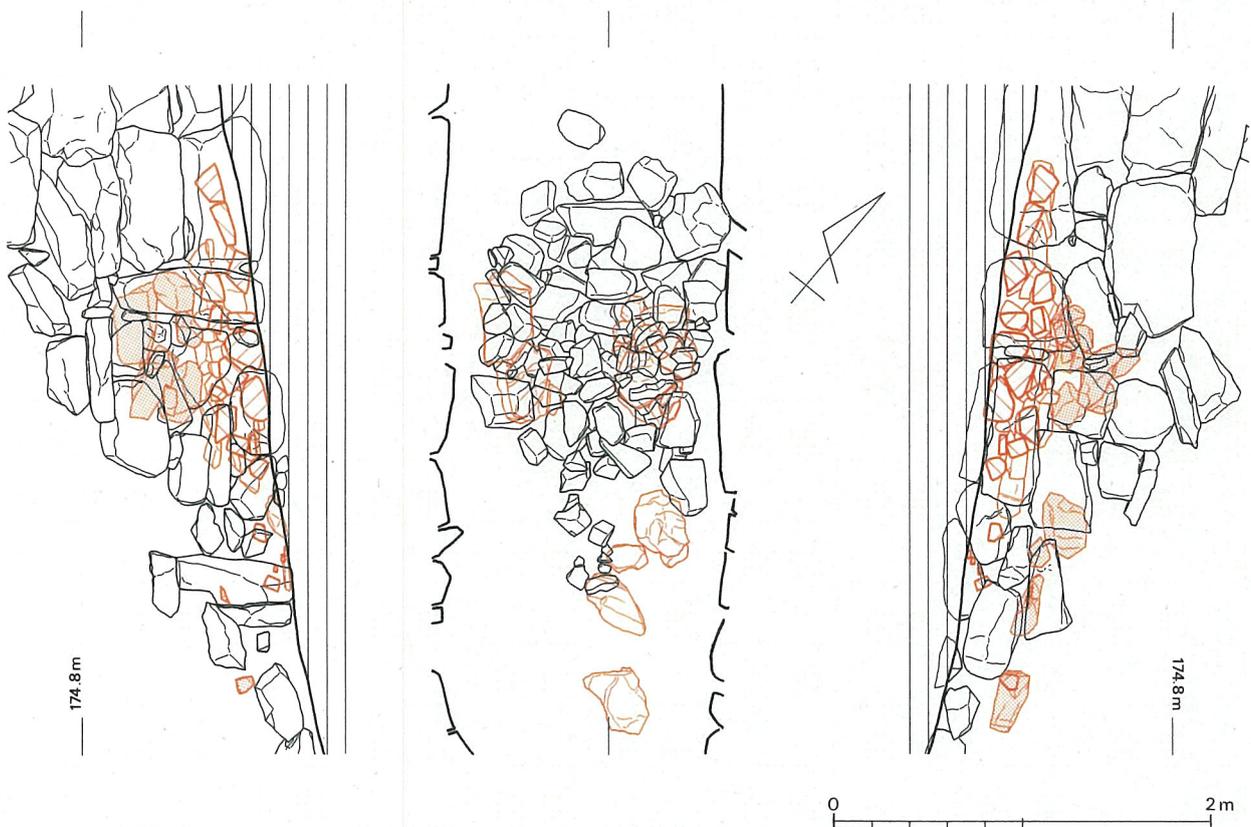
広口面を上に向けた、厚さ0.1~0.15mの板状の石である。上部床面から3~8cmの高さに位置する。平面形は奥壁から35cm, 109cm, 東側壁から11cm, 西側壁から17cm, それぞれ離れた箇所を頂点にする扁平な菱形である。約25cm離れて設置された入口側の石は、0.5m×0.77mの広口面を上に向けた厚さ0.12~0.13mの板状の石で、上部床面から0.5~8cmの高さに位置する。平面形は菱形に近いが東側壁寄りの一角を内に凹ませた形になっている。それぞれ、上部床面から前者が3~8cm, 後者が0.5~8cm上で確認されたことから、後世の開口時に動かされた可能性がある。入口側の石に約45度の傾斜で寄り掛かった石材は、0.8m×0.6m程度の広口面を持つ。その床面接地箇所は西側壁から約10cm離れている。これらの石材、特に長軸方向に並んだ石材については棺台石の可能性もあるが、斜めに傾いた石の存在もあり、先述したように原位置を保っていない可能性もあり、その性格については不明である。

閉塞石

閉塞石は玄室奥壁から3.83~6.54m南の範囲で、東西0.7~1.2mにわたり、やや東側壁寄りに密集する形で積み上げられていた。10~30cm大の石が多い。底面からの高さは最も高い箇所でも50cmである。後世の盗掘などにより幾らか削平されている。

(5) 遺物の出土状況 (第24, 25図・図版15)

遺物は、須恵器24点以上 (杯蓋8点以上, 杯身8点以上, 高杯1点, 壺蓋2点, 低頸壺1点, 平瓶1点, 甕3点以上), 土師器 (椀1点, 長頸壺1点), 鉄製品 (鏃1点, 轡1点, 鋏1点, 留金具



第23図 第6号古墳石室閉塞石実測図 (S=1:40)

※網目は上面の閉塞石

2点など)が出土している。先述したように出土位置を石室内においては奥壁から約3.8mの位置で玄室と羨道を分けて記述する。

玄室内の遺物はほとんど残っていなかったが、須恵器(壺蓋1点)、鉄製品(鋏1点)が出土した。いずれも上部床面からの出土である。壺蓋は奥壁から3.1m、東側壁から0.6m付近から出土した。鉄鋏は、奥壁から2.25m、西側壁から0.1mの付近から出土した。壺蓋については谷部から出土した破片と接合するため、この面においても何度かの埋葬が考えられる。

羨道から出土した遺物は、須恵器(杯蓋3点、杯身4点、平瓶1点)、土師器(椀1点、長頸壺1点)、鉄製品(鏃1点、轡1点、留金具2点など)がある。出土位置としては、大きく下部床面直上、下部床面から20～40cm高い位置、40cm以上の高い位置に分けられる。これらは追葬時に片づけられたと考えられる。

下部床面直上では、玄室との境付近から、須恵器の杯蓋、杯身、鏃などが出土した。杯蓋(234)は中央付近からも破片が出土している。中央付近からは須恵器の杯蓋、杯身、平瓶、土師器の長頸壺、鉄製品の轡が出土した。奥壁から5.95m南に平瓶が、6.25m南に長頸蓋が、いずれも東側壁面に沿うように出土した。轡は、奥壁から6.2m南の、石室のほぼ中央から西寄りに出土した。

下部床面から20～40cm高い位置では、須恵器の杯蓋、杯身、留金具が出土した。留金具以外は中央付近からの出土である。

下部床面から40cm以上の高い位置では、須恵器の杯蓋、杯身、土師器の椀が出土した。須恵器は、奥壁から5.2～5.7mの範囲の中央部に集中する。

墳丘前庭部とそれに続く谷部からは、須恵器(杯蓋、杯身、高杯、蓋形土器、低頸壺、甕)が出土している。すべて破片の状態出土しており、そのほとんどは、追葬時に掻きだされたと考えられる。また、周溝内には、須恵器の甕2個体が出土しているが、破碎されたと考えられ、出土状況から何らかの祭祀行為が行われたと考えられる。甕(253)は、谷部の高い位置から出土している。同様に破碎されたと考えられ、何らかの祭祀行為を意味すると思われるが、これについては本古墳に伴うものか、あるいは第8号古墳に伴うものかについては不明である。

(6) 出土遺物

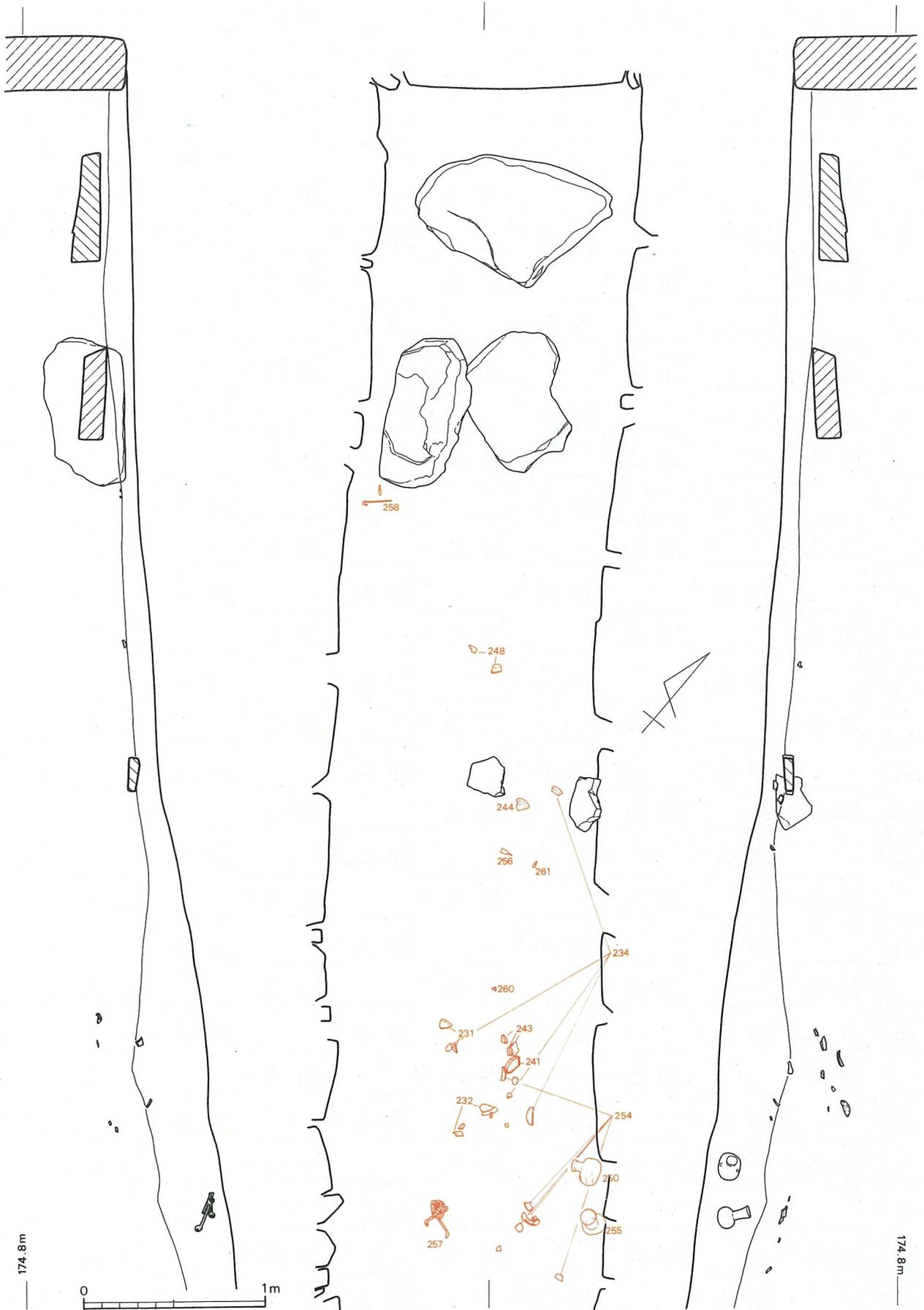
a. 須恵器(第26図・図版22)

杯蓋(230～237)

230～232は一部にヘラケズリを残し、天井部はいずれも丸みを持ち、口縁部はほぼ垂下する。端部は丸く収める。いずれも部分的にしか残存しておらず、復元値も含め、口径11.8～13.4cm、器高3.9～4.4cmである。

233～235はヘラケズリを施さず、天井部は未調整のままである。天井部は平坦面を呈し、体部はゆるやかな丸みを持つ。口縁部は垂下し、端部は丸く収める。部分的にしか残存しておらず、復元値も含め、口径11.9～12.9cm、器高3.4～3.8cmである。

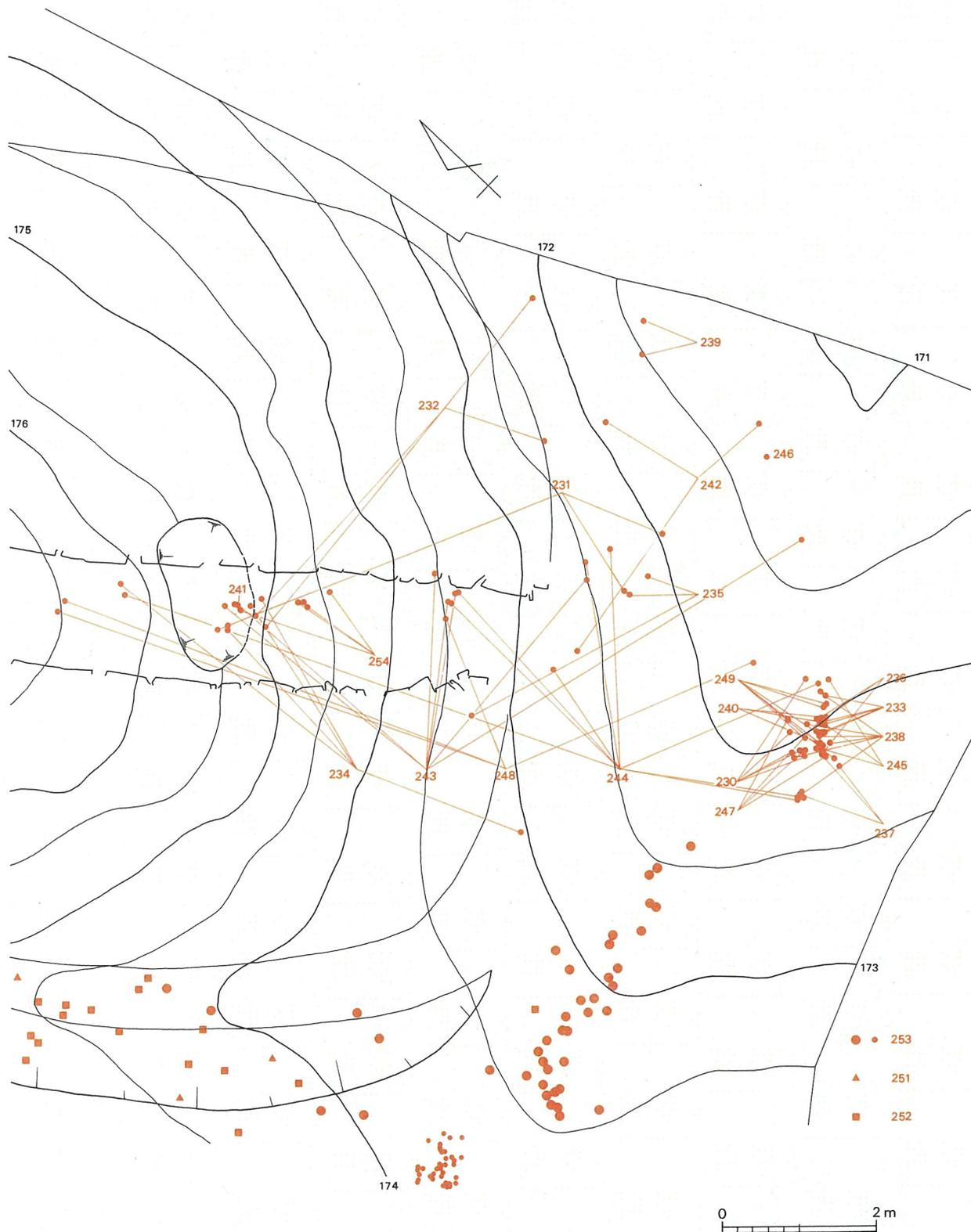
236・237は口縁部のみで、上記のもの同様に垂下する。237は成形時に潰されたためか、歪になっている。復元口径は、236が15.0cm、237は14.8cmである。



第24图 第6号古墳石室内遺物出土状況実測図 (S = 1 : 30)

出土位置は、一部閉塞石上からも出土しているが、ほとんどが前庭部と考えられる墳丘南西側の谷部から出土している。

杯身 (238~245)



第25図 第6号古墳墳丘裾遺物出土状況実測図 (S = 1 : 75)

立ち上がりは短く、底部の調整も一部ヘラケズリを行うものもあるが、概ねヘラ切り離し後未調整である。復元値も含めて、口径10.0～13.4 cm、受部径12.6～15.4 cm、器高3.15～4.1 cmである。大きな形状の差異は無いが、受部からの立ち上がりの長さが、0.8 cm程度と0.5 cm程度のものに分けられ、前者は238・239であり、後者は240～245が該当する。

238・239は立ち上がりが内傾して延び、端部は丸く収める。受部は直線的に外上方に延び、端部は丸く収める。受部から底部にかけて緩やかな丸みを持ち、底部は平坦気味を呈する。

240～245は、短い立ち上がりが242は直上に、その他は内傾して延び、端部は丸く収める。受部は外反気味に、外上方に延び、端部は丸く収める。受部から底部にかけて緩やかな丸みを持ち、底部は平坦気味を呈する。245の立ち上がりは短く、受部上端よりも低い。240～242の外表面の一部には自然釉がかかる。

石室床面、羨道閉塞石上からも出土しているが、多くは前庭部と考えられる墳丘南西側の谷から出土している。

高杯 (246)

杯の底部から脚の一部が残存する。杯底部は丸みを持つ。脚部は「ハ」の字状に強く開く。おそらく短脚の高杯であろう。杯底部の一部にはススが付着している。

壺蓋 (247・248)

247天井部が平坦で、口縁部は、ほぼ真下に垂下する。口縁端部は外側に引きのぼし段をつくる。248天井部が広い平坦面を呈し、口縁部は外反気味に開く。口縁端部はやや尖り気味に収める。

低頸壺 (249)

口縁部は、ほぼ直立気味に短く立ち上がり、端部はやや尖り気味に収める。体部はやや扁平な球体を呈し、肩部と胴部の境界に一条の凹線がめぐる。体部下半は丸みを持つが、底部はやや平坦面を呈する。肩部より上には焼成時における自然釉がかかっている。

平瓶 (250)

口頸部は上方にやや外反気味に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。口頸部上方に一条の凹線がめぐる。体部は扁平な球体を呈し、頸部の下に一条の凹線がめぐるが、一部消滅する。底部は平坦面を呈する。体部に口頸部をはさみ2個のボタン状の把手を付している。

甕 (251～253)

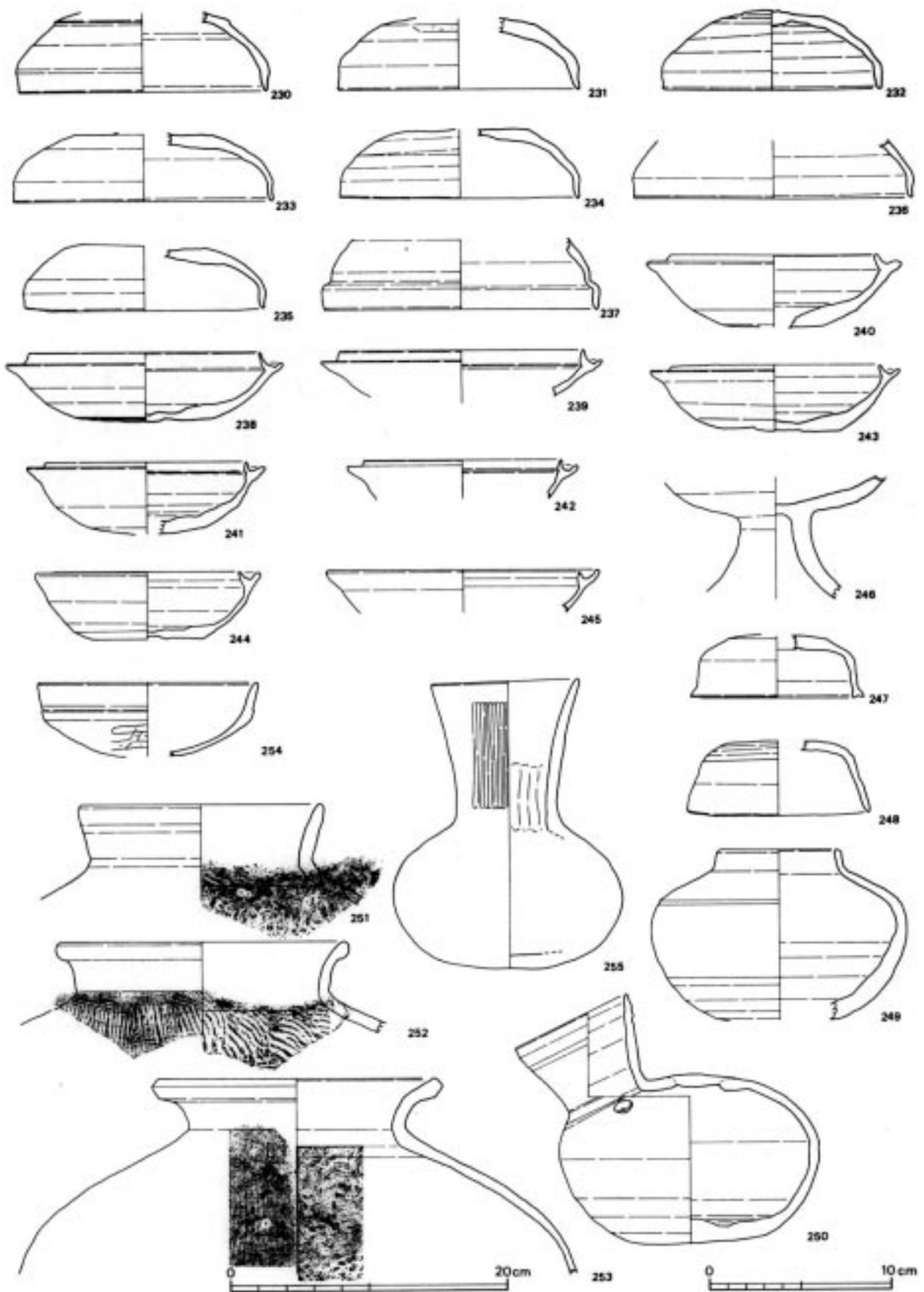
251 口頸部は、ほぼ直線的に外反し、口縁端部はやや丸みを持っておわる。口頸部の中央付近に一条の凹線がめぐる。口頸部の内外面には部分的に自然釉がかかり、口頸基部から肩部にかけ、破片の窯着が見られる。

252 口頸部は外反し、口縁端部は玉縁状に肥厚する。

253 口頸部は外反し、口縁端部は肥厚し、面をつくる。頸部から肩部にかけてはゆるやかに下る。口頸基部から肩部にかけ、破片の窯着が見られる。

b. 土師器 (第26図・図版22)

椀 (254)



第26図 第6号古墳出土遺物実測図(1)
 (S = 1 : 3, 251 ~ 253はS = 1 : 4)

皿状の浅い椀で、口縁部はやや開きながら尖り気味に収める。口縁部下方に明確な稜を形づくる。天井部と体部下半から内面にかけてはナデ、体部にはヘラケズリを施す。

長頸壺 (255)

口頸部は上方にやや外側へ開きながら延びる。口縁端部は丸く収める。体部はやや扁平な球形をなし、底面は平坦を呈する。口頸外面には縦方向のヘラミガキ、口頸内面下半と底部にはユビナデが施されている。

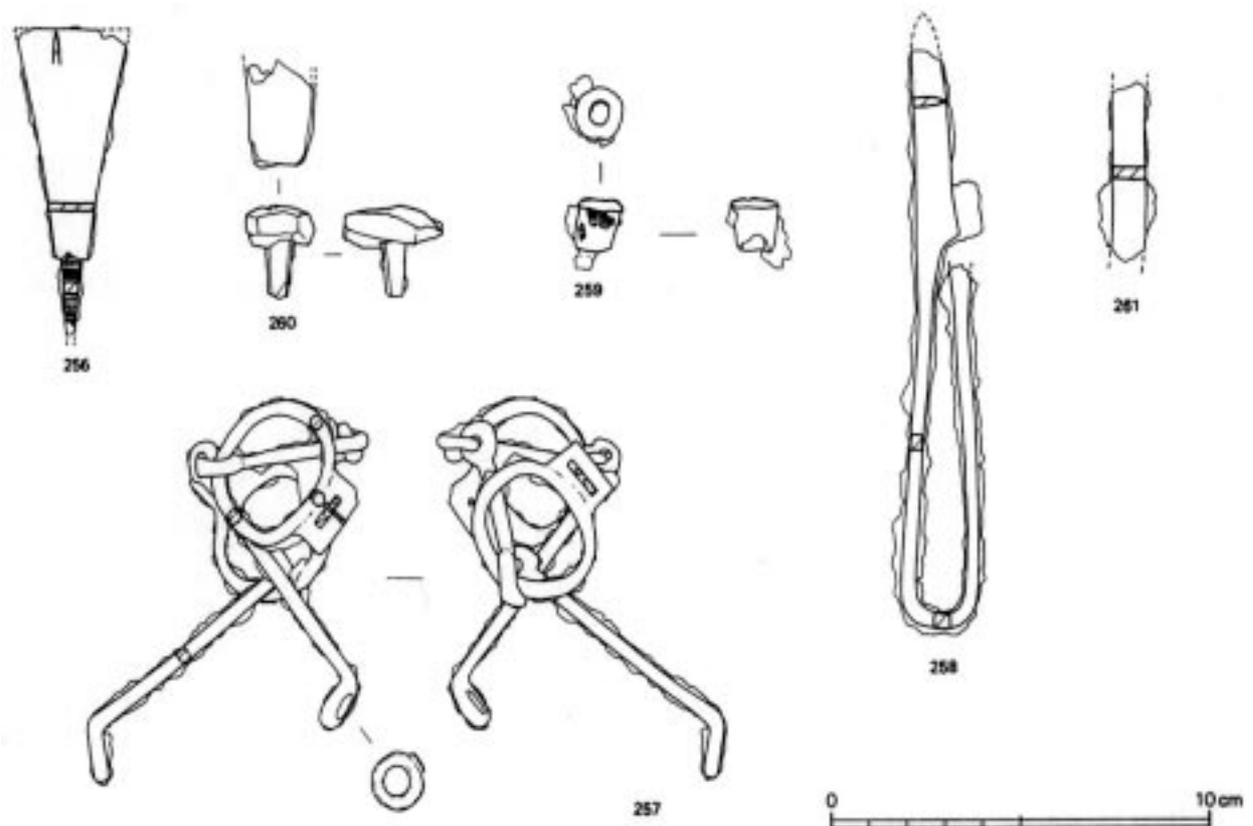
c. 鉄製品 (第27図・図版23)

鉄鏃 (256)

方頭斧箭式で、明瞭な関を持つ。鏃身は4.44 cmである。断面は鏃身、茎ともに方形を呈し、茎の一部には木質が残存する。

轡 (257)

板状立聞素環鏡板付轡である。引手と銜とが連結し、鏡板に取りつく。鏡板は楕円形を呈し、大きさはそれぞれ横7.1 cm、縦5.8 cmと、横6.9 cm、縦6.0 cmである。それぞれの鏡板の上部には、前者が高さ1.6 cm、幅3.6 cmの、後者が高さ1.6 cm、幅3.1 cmの板状の立聞がつけられており、いずれも約0.4 cm×2 cmの長方形の透かし孔がある。鏡板の断面は、楕円に近い円形を呈する。銜は長さ9.1 cmと9.2 cmのものとの二運になる。端部の鏡板に繋がる環は、直径2.5 cmと直径2.8 cmである。お互いの銜に直交し中央で繋がる環は径2.2 cmである。引手は長さ15.8 cmと15.2 cmのもので、引手壺に当



第27図 第6号古墳出土遺物実測図(2)
(257はS = 1 : 4, その他はS = 1 : 2) ※トーンは木質痕跡

たる環は軸に対して、鈍角に曲げられている。銜に繋がる環の直径はそれぞれ1.8cmと1.7cm, 手綱に繋がる環の直径はそれぞれ2.8cmと2.9cmである。引手の軸の断面はほぼ楕円に近い円形を呈する。

鋏 (258)

握り部分の長さは9.0cmで、U字形に折れ曲がり、刃部へと続く。屈曲部は厚さがほとんど変わらない。握り部分から刃部にかけて、内湾する形で関を形成する。刃部復元長は5.6cmである。

留金具 (259・260)

259 いわゆるハトメ鋏金具状を呈し、中心は中空で上部は花卉状に開く。外面には木質が残存する。

260 頭部が長方形を呈し、横方向から見て丁字状に見える茎が付く。用途は不明である。

不明品 (261)

断面長方形を呈する。その形態から何らかの茎部であろう。

第2表 塔の岡第6号古墳出土遺物観察表

須恵器 ([]:復元値)

遺物番号	器種	出土場所	計測数値 (cm)	成形・調整	色調	胎土	焼成	備考
230	杯蓋	谷部	口径 [13.4]	(天井部) ヘラケズリ (内面・口縁部) ロクロ回転によるナデ	暗灰色	精緻	良好	ロクロ右回り
231	杯蓋	閉塞石上、谷部	口径 [12.5] 器高 [3.9]	(天井部) 未調整 (天井部5分の1) 一部ヘラケズリ (内面・口縁部) ロクロ回転によるナデ (内面天井部) ロクロ回転によるナデの後ヨコナデ	灰褐色	2mm大の砂粒多く含む	ややあまい	ロクロ左回り
232	杯蓋	閉塞石上、谷部	口径 11.8 器高 4.4	(天井部) ヘラケズリ、最上部未調整 (内面・口縁部) ロクロ回転によるナデ	暗灰色	精緻、1mm大の砂粒若干含む	良好	
233	杯蓋	谷部	口径 [12.9] 器高 3.7	(天井部) 未調整 (天井部3分の1) ヘラケズリ (内面・口縁部) ロクロ回転によるナデ	青灰色、灰色	精緻	良好	ロクロ左回り
234	杯蓋	玄室床面、閉塞石上谷部	口径 11.9 器高 3.8	(天井部) ヘラ切り未調整 (内面・口縁部) ロクロ回転によるナデ (内面天井部) ロクロ回転によるナデの後ヨコナデ	青灰色	精緻、1mm大の砂粒多く含む	良好	ロクロ左回り
235	杯蓋	谷部	口径 12.9 器高 3.4~3.65	(天井部) 未調整 (内面・口縁部) ロクロ回転によるナデ (内面天井部) ロクロ回転によるナデの後ヨコナデ	暗灰色	精緻、わずかに1~2mm大の長石含む	良好	
236	杯蓋	谷部	口径 [15.0]	(内面・口縁部) ロクロ回転によるナデ	青灰色	精緻	良好	
237	杯蓋	谷部	口径 [14.8]	(内面・口縁部) ロクロ回転によるナデ	青灰色、灰色	精緻	良好	
238	杯身	谷部	口径 [12.1] 受部径 [13.7] 器高 4.1	(内面底部) ロクロ回転によるナデの後ヨコナデ (内面・体部) ロクロ回転によるナデ	暗青灰色	ほぼ精緻	良好	
239	杯身	谷部	口径 [13.4] 受部径 [14.2]	(内面・体部) ロクロ回転によるナデ	灰色	精緻	良好	
240	杯身	谷部	口径 [11.2] 受部径 [12.4] 器高 4.0	(内面底部) ロクロ回転によるナデの後ヨコナデ (内面・体部) ロクロ回転によるナデ (体部3分の1) ヘラケズリ (底部) 未調整	暗青灰色 (自然釉により一部緑褐色)	精緻	良好	外面一部自然釉あり、ロクロ左回り
241	杯身	閉塞石上	口径 [11.3] 受部径 [12.0] 器高 3.9	(内面底部) ロクロ回転によるナデの後ヨコナデ (内面・体部) ロクロ回転によるナデ (底部) 未調整	(内面) 青灰色 (外面) 緑褐色	精緻、2mm大の長石含む	良好	一部自然釉あり、ロクロ右回り

遺物番号	器種	出土場所	計測数値 (cm)	成形・調整	色調	胎土	焼成	備考
242	杯身	閉塞石上、谷部	口径 [10.7] 受部径 [11.6]	(内面・体部) ロクロ回転によるナデ	灰色 (自然釉により一部濃緑色)	精緻	良好	外面一部自然釉あり
243	杯身	閉塞石上、谷部	口径 11.3 受部径 12.4 器高 3.7	(内面底部) ロクロ回転によるナデの後ヨコナデ (内面・体部) ロクロ回転によるナデ (底部) 未調整	暗青灰色	精緻、2mm 大の砂粒若干含む	良好	口縁部ゆがみあり
244	杯身	玄室床面、羨道、谷部	口径 10.0 受部径 11.0 器高 3.15	(内面底部) ユビヨコナデ (内面・体部) ロクロ回転によるナデ (体部 5分の1) 一部ヘラケズリ (底部) ヘラ切り未調整	暗灰色	精緻、2mm 大の砂粒多く含む	良好	ロクロ左回り
245	杯身	谷部	口径 [12.6] 受部径 [13.4]	(内面・体部) ロクロ回転によるナデ	青灰色	精緻	良好	
246	高杯	谷部		(杯部内面底部) ヨコナデ (杯部内面・体部) ロクロ回転によるナデ (杯部底部) ヘラケズリの後ナデ (杯部底部・脚部) ロクロ回転によるナデ (脚部内面天井部) ナデ	淡灰色	精緻	良好	
247	壺蓋	谷部	口径 [8.5] 器高 3.4	(天井部) ヘラケズリ (内面・口縁部) ロクロ回転によるナデ	濃青灰色	精緻、1～2mm 大の長石含む	良好	ロクロ右回り
248	壺蓋	玄室床面、羨道、谷部	口径 9.8 器高 4.1	(天井部) ヘラケズリ (内面・口縁部) ロクロ回転によるナデ	暗灰色	精緻	良好	口縁部ゆがみあり、ロクロ右回り
249	低頸壺	谷部	口径 [6.2] 胴径 [13.8]	(内面・体部) ロクロ回転によるナデ (底部) ヘラケズリ	灰色	精緻	良好	頸部に砂粒の付着あり、口縁部および体部に自然釉がかかる
250	平瓶	閉塞石南側	口径 6.7 胴径 [14.1] 器高 13.7	(内面・口頸部・体部) ロクロ回転によるナデ、肩部に粘土円板貼付後ユビナデ (底部) ヨコナデ	青灰色	精緻、1mm 大の砂粒多く含む	良好	
251	甕	周溝	口径 [17.2]	(体部内面) 叩き成形による青海波文 (口頸接合部) ナデ (口頸部) ロクロ回転によるナデ (体部外面) 叩き成形	淡青灰色 (口縁の一部黒色)	精緻	良好	須恵器片の窯着あり、口頸部・内面一部に自然釉あり
252	甕	周溝	口径 [20.6]	(体部内面) 叩き成形による青海波文 (口頸接合部) ナデ (口頸部) ロクロ回転によるナデ (口頸部外面 3分の2) 叩き成形の後ロクロ回転によるナデ (体部外面) 叩き成形、横方向の軽ナデ、一部カキメ	淡青灰色	精緻	良好	
253	甕	谷部	口径 [20.0]	(体部内面) 叩き成形による青海波文 (内面口頸接合部) ナデ (口頸部) ロクロ回転によるナデ (体部外面) 叩き成形、一部カキメ	淡青灰色 (口縁の一部黒灰色)	精緻	良好	須恵器片の窯着あり、内面一部に自然釉

土師器 ([]: 復元値)

遺物番号	器種	出土場所	計測数値 (cm)	成形・調整	色調	胎土	焼成	備考
254	椀	閉塞石上	口径 [11.7] 受部径 [11.6]	(内面底部・体部 3分の1) ナデ (体部 3分の2) ヘラケズリ (底部) ナデ	橙褐色	ほぼ精緻 (角閃石を含む)	良好	
255	長頸壺	閉塞石南側	口径 7.9 胴径 12.4 器高 15.8	(頸部内面下部) ユビナデ (頸部内面上部) ナデ (口縁部外面) ヨコナデ (頸部外面) 縦方向のミガキ (口頸接合部) ナデ (体部) 磨滅著しく不明 (底部) ユビナデ	赤褐色	精緻、2mm 大の砂粒若干含む	良好	

鉄製品 ([] : 復元値)

遺物 番号	種 別	出 土 場 所	計 測 数 値 (cm, g)			
			長 さ	最 大 幅	最 大 厚	重 量
256	鉄鍬	閉塞石内	鍬身5.4	茎 0.49	鍬身0.15 茎0.28	12.6
257	轡	閉塞石南側	鏡板5.8 銜9.2 引手15.8, 15.2	鏡板7.1 銜径2.8 引手径2.8, 2.9	鏡板0.8 引手0.7	256.9
258	鍬	玄室床面	刃 [5.6] 握り9.0	刃1.1 握り0.4	刃0.25 握り0.45	23.0
259	留金具	羨道埋土中	1.65	1.25 孔径0.55	0.4	3.0
260	留金具	羨道埋土中	頭0.95 身1.3	身0.55	頭0.62 身0.52	9.3
261	不明	羨道埋土中	4.3	0.9	0.3	5.7

Ⅳ ま と め

この度発掘調査を実施した塔の岡第1号古墳・第6号古墳とも、いずれも盗掘ないし開口していたが、墳丘及び石室などは他の古墳に比べて、比較的遺存状況のよい古墳であった。調査の結果は次のとおりである。第1号古墳は、墳丘規模は南北12.1 m、東西10.8 mの楕円形墳で、埋葬施設は北方向（N 11.5° W）に開口する全長約7.6 mの片袖式横穴式石室である。玄室内は仕切石で区画され須恵器床が確認された。また、第6号古墳は、墳丘規模は南北13.1 m、東西10.6 mの方墳で、埋葬施設は南方向（N 39.5° W）に開口する全長約8.2～8.8 mの無袖式横穴式石室である。いずれも6世紀後半～7世紀初頭に属する。

それぞれの遺構・遺物に関する調査結果は前述したとおりである。ここでは、両古墳の特徴等について若干の検討を加え、まとめとしたい。

1. 古墳の時期

ここでは、それぞれの古墳から出土した遺物、特に須恵器を中心に古墳の時期について検討を試みたい。

まず、第1号古墳から出土した須恵器のうち、杯蓋、杯身は先述のように成形技法、形態などの特徴から4種類に分けられる。これらの特徴を従来の須恵器の編年に対比させた場合、Ⅰ類は田辺陶邑編年¹⁾の「TK 47型式」、中村陶邑編年²⁾のⅡ型式4段階、向田芸備地方編年³⁾におけるⅡ型式2段階に該当する。また、Ⅱ類～Ⅳ類は、田辺陶邑編年の「TK 209型式」、中村陶邑編年のⅡ型式5段階、向田芸備編年におけるⅡ型式3段階に該当する。また、提瓶、平瓶は把手の有無や種類から、46は、田辺編年「TK 10型式」、中村編年「Ⅱ型式3段階」、向田編年「Ⅱ型式第1段階」に、45は田辺編年「TK 209型式」、中村編年「Ⅱ型式5段階」、向田編年「Ⅱ型式第2～3段階」に、47・48は田辺編年「TK 217型式」、中村編年「Ⅱ型式6段階」、向田編年「Ⅱ型式第3段階」に、それぞれ該当する。甕は成形技法や口縁端部の形状から田辺編年「TK 217型式」、中村編年「Ⅱ型式6段階」、向田編年「Ⅱ型式第3段階」に該当する。

以上の編年に実年代をあてはめた場合、杯類のⅠ類は6世紀第3四半期に、杯類のⅡ類～Ⅳ類は6世紀第4四半期に比定できる。このことから、本古墳の埋葬期間は、6世紀中葉から6世紀後葉を中心に行われたと考えられる。

第6号古墳から出土した杯蓋、杯身は成形技法、形態などの特徴から第1号古墳で示したⅡ類ないしはⅢ類に対応すると考えられる。分類は可能だが、時期的に大きな差は考えにくい。田辺編年の「TK 209～217型式」、中村編年の「Ⅱ型式5～6段階」、向田編年の「Ⅱ型式3段階」に該当する。平瓶は把手の種類から、甕は成形技法や口縁端部の形状から、いずれも田辺編年の「TK 209～217型式」、中村編年の「Ⅱ型式5～6段階」、向田編年の「Ⅱ型式3段階」に該当する。ところで第6号古墳からは馬具（轡）が出土しているが、この轡はいわゆる板状（長方形）立聞素環鏡板付轡に属する。この形式は、坂本美夫氏による鏡板の環径（A）と立聞の長さ（B）との比による編年に

よれば、B/A比が0.449と0.507であり、Ⅱ期第2小期（6世紀第4四半紀）に該当する⁴⁾。花谷浩氏の編年によれば、長方形立聞素環鏡板付轡のうち、立聞の形状と立聞孔の位置における分類のb類に属し、この型式は田辺陶邑編年におけるTK 209型式併行から出現し、TK 217型式併行から新しい時期に及ぶ可能性がある⁵⁾。このことから、実年代をあてはめれば、本古墳の埋葬期間は、6世紀末から7世紀初頭を中心に行われたと考えられる。

2. 出土遺物からみた埋葬回数 の推定

第1号古墳は、6世紀中葉から6世紀末頃の遺物が出土し、この時期に埋葬が行われている。須恵器の出土状況は、仕切石南側には、杯身皿類が出土しており、また杯蓋Ⅲ類・杯身Ⅲ類が仕切石の南北にまたがって出土していることから、6世紀末において追葬が行われたのち、なんらかの理由で、かたづけられたと考えられる。一方、仕切石北側においては、Ⅰ類～Ⅳ類が出土しているが、このうち、須恵器床に使用された横瓶・甕は、6世紀第4四半期に属し、杯身・杯蓋は、破片以外のものはいずれもⅠ類～Ⅳ類であり、この段階における埋葬と考えられる。

また、羨道から出土した須恵器では、杯蓋Ⅰ類を中心としてⅠ類・Ⅲ類がわずかにみられる。また杯身はⅠ類・Ⅱ類を中心に、Ⅲ類がわずかにみられる状況にある。

一方、装飾品である耳環が7点出土している。仕切石の南側で3点、仕切石の北側、須恵器床直上から4点が出土している。このことからいえば、仕切石の南北でそれぞれ2回の埋葬が行われたことを意味し、須恵器床直上からの出土状況からいえば、恐らくは時間差があり、追葬が行われたと考えられる。このことから、少なくとも4回の埋葬が行われたと推定できる。すなわち仕切石の設置前と考えられる段階に少なくとも2回、また仕切石設置と須恵器床が同一時期と見なした場合、この段階に2回の埋葬が想定されるのである。

第6号古墳は、石室内の出土遺物がわずかである。石室内における床面を2面確認したことから、最低でも2回の埋葬と考えられる。須恵器は、石室内と羨道、羨道と谷部という具合に破片がわかれて出土する、追葬段階において掻きだされた遺物が殆どである。特に谷部からの出土点数が多く、3回以上の埋葬が行われたと推定される。

3. 墳丘盛土中における石積遺構⁶⁾について

この度の発掘調査では、第1号古墳及び第6号古墳ともに墳丘盛土中から石積遺構が確認された。両古墳とも封土の流出にともない、表土の除去後においては既に一部露出していた。そのことから、特に第1号古墳については、墳丘の表面に露出している外護列石と想定したが、長頭壺(42)・提瓶(46)がそれぞれ石積みの上側と下側から出土したこと、及び墳丘の土層観察などから、この石積遺構は墳丘外面を巡るというよりも、むしろ墳丘盛土中に構築されたと考えられる。また、第6号古墳についても、石積遺構と石室側壁とが一連の作業工程の上で構築されていることが確認された調査における知見から、墳丘内に築かれたものと判断をした⁷⁾。

県内の五列（石積遺構）を有する横穴式石室古墳については、すでに幾つかまとめられている。1973年土師大迫古墳の報告において、山崎信二氏と安田龍太郎氏は、当時の資料的制約はあったものの、典型的な事例として、①石積みが墳丘中腹部をめぐる、2～4段に高く積まれ、石積み又は石垣とよぶにふさわしいもの、②石列が裾部をめぐるもので、基本的に墳丘裾部全体をめぐるもの、③石室前面部を中心とした石積みで、羨道端から1～2mで終わるもの、と大きく三つに分類された⁸⁾。基本的な機能は、封土の流失の防止と考えられているが、付加機能として、①が石室の保護、②が墳丘の区画、③が石室入口の外容を整える役割を、それぞれ有していたことも考えられている。その後1979年の口和町池津第1号古墳の報告において、向田裕始氏が列石を有する古墳について細分し分類されている⁹⁾。向田氏はA類（平面的にも立体的にも視覚にうったえる形のもの）とB類（盛土中に含まれる隠蔽されたもの）に大別する。なお、A類はさらに4つのタイプ（1類：墳丘裾にめぐらるもの、2類：石室前面部のみのもの、3類：墳丘中腹をめぐるもの、4類：墳頂周辺をめぐるもの）に細分されている。

ところで、先述したようにこの度発掘調査を実施した2基の古墳は向田氏がB類とする、「石積み」墳丘「盛土中にあるもの」である。1993年に県内の五列をもつ古墳を集成された恵谷泰典氏によれば¹⁰⁾、このB類に該当する事例も近年増加傾向にあり、東広島市原田岡山第3号古墳¹¹⁾・広島市安佐北区給人原第2・9～11号古墳¹²⁾・八千代町大迫古墳¹³⁾・同町鳥越古墳¹⁴⁾などの事例がある。そして恵谷氏は、これらは形態によっていくつかに分類が可能とし、石積みが側壁の裏込めになっているもの（a類とする）、石室前面から墳丘盛土内に延びるもの（b類とする）、墳裾をめぐるが盛土の中に隠れるもの（c類とする）などである。ちなみに、a類は原田岡山第3号古墳・給人原第9～11号古墳が、b類は給人原第2号古墳が、c類は大迫古墳・鳥越古墳が該当するという。一方、他県の事例であるが、近年岡山県内における墳丘内に石刻（石積遺構）をもつ古墳を集成された小林利晴氏は、石刻の構築状況とその位置に着目し、A類：墳形に関係なく、石室に平行して築かれる、B類：墳丘に平行して築かれる、C類：石室裏込め内に築かれる、と3つの分類案を提出している¹⁵⁾。これを恵谷氏の分類と比較した場合、言葉の違いがあるものの、小林氏のA類は恵谷氏のa類と同じ内容であり、小林氏のB類は恵谷氏のb類と同じ内容である。なお、小林氏のC類や恵谷氏のc類については、前者は類例が一例のみしかあげていないし、また後者の事例としてあげている給人原第2号古墳の事例については、未調査の箇所があるので内容については明確ではない。このことから、これらについては、次のふたつのタイプからはずれる事例として捉えておきたい。よって、現在のところ、墳丘内に石刻（石積遺構）を有するものについては、大きく①石室に平行して構築され、側壁の裏込めになっている、あるいは②墳丘に平行してめぐらるよう構築される、の2タイプに大きく分けておきたい。そこで、この度の調査された2基の古墳についてみてみれば、塔の岡第1号古墳、塔の岡第6号古墳とも、墳形と同様な形状を呈した石積遺構となっており、後者の②タイプに該当しよう。

ところで、この石積遺構の性格であるが、向田氏はB類としたものは、控え積みの機能すなわち石室の保護と指摘している。恵谷氏はa類、ここで言う①タイプは側壁の補強とみなしているが、一方でc類、ここで言う②タイプは盛土の補強ではないかと指摘している。さて、2基の古墳につ

いては、両古墳の石積遺構は②タイプに該当するので、これらは盛土の補強とすることができるであろう。しかし、果たしてそれだけの機能であったのであろうか。もちろん、これら墳丘内に構築された石積遺構は、いうまでもなく隠蔽されたものである。このことから、完成時は見ることはできないものであり、当然古墳築造時に必要な機能を果たしたものといえる。2基の古墳の石積遺構はいずれもその平面形態がそのまま墳丘の形状にも影響を及ぼしているため、当然盛土の補強という機能が大前提にあったものと考えられる。特に、第1号古墳の場合、墳丘の東西両側において強固に構築されている印象を受ける。それは築造された地形が東西に傾斜していることに影響されたものとみなすことができる。これは第6号古墳についても言え、南半部を中心に構築されていたことは、丘陵の傾斜が東側（第7号古墳側）よりも南側（谷側）のほうが急であったためであろう。すなわち、これは盛土の流失の保護が想定にあったと言える。両古墳とも石積遺構の構築については、土層観察やその確認状況からいえば、石室側壁からやや離れており控え積みとはなっていない。しかしながら、石室掘り方は地形に左右されており、奥壁側は明確に存在しているにもかかわらず、石室開口部にむかって傾斜をなし、徐々に浅くなっていく傾向にあり、この石積遺構は石室側壁を構築する際、掘り方よりも表出する箇所、いずれも開口側については盛り土をしながらその保護のために石積みとなされたと考えられ、石室の控え積み、すなわち石室の補強の機能を果たしていたと考えられる。特に、開口部側、第1号古墳の場合は北側、第6号古墳の場合は南側（のみではあるが）に重点がおかれていることはこれを首肯するものと考えられる。

4. 第1号古墳における埋葬区画と須恵器床について

第1号古墳からは、先述したとおり、横穴式石室内において仕切石（障石）による埋葬区画と須恵器片を床面に敷きつめた須恵器床が確認された。横穴式石室の場合、県内において両者とも県北、特に江の川流域を中心に見つかっており、分布的に特徴の見られる埋葬方法である。特に両者が見られる事例としては、管見によれば双三郡三良坂町植松第3号古墳¹⁶⁾、同町皇渡古墳¹⁷⁾、同町見尾山第1号古墳¹⁸⁾、高田郡高宮町後原第2号古墳¹⁹⁾、同町成安第2号古墳²⁰⁾、同町原山古墳²¹⁾があげられる。

この塔の岡古墳群の立地する白木町市川は、眼下に所在するJR芸備線志和口駅が示すように現在広島市中心部及び東広島市志和方面に抜ける分岐点に位置する、いわゆる交通の要衝に位置している。このことからいえば、県南部の東広島市御園宇竜王山古墳²²⁾小石室の例であるが同市高屋町西8地点遺跡SK9²³⁾の事例など、仕切石や須恵器床が確認されているが、この事例を考える上でもこの第1号古墳は注目されよう。ここでは、この確認された埋葬区画と須恵器床について触れてみたい。

まず、前者の埋葬区画であるが、玄室内のほぼ中央、奥壁から約2mの位置に、仕切石（障石）を奥壁に対して平行して設置している。広島県内においてこれまで確認された仕切石による埋葬区画については、すでに山澤直樹氏によってまとめられている²⁴⁾。まず、山澤氏によれば、奥壁に対して平行に区画する場合と側壁に対して区画する場合があり、前者が圧倒的に多い。前者の事例

には双三郡三良坂町に所在する皇渡古墳、植松第3号古墳、見尾山第1号古墳、高田郡高宮町に所在する後原第2号古墳、権現迫古墳などがあげられる²⁵⁾。

また、この奥壁に対して平行に区画されるものは、仕切石の配置から2種類に分けられる。奥壁から比較的近い位置、すなわちおよそ0.7mの位置に配するものと、奥壁から遠い位置に配するもの、すなわちおよそ1.7mの位置に配するものがある。前者は奥壁に平行して埋葬されたとされ、また後者は埋葬者を石室中軸方向に配したとされている。塔の岡第1号古墳の事例は、この後者の奥壁から遠い位置に配するものにあてはまる。この奥壁から遠い位置に仕切石を配するものとしては、高田郡高宮町に所在する後原第2号古墳、権現迫古墳²⁶⁾、成安第2号古墳、原山古墳などがあげられる。分布的に高宮町に集中していることは注目される。この古墳の造営にあたっては、かの地とのなんらかの関連について指摘する必要がある。このうち、後原第2号古墳、成安第2号古墳、原山古墳は後述する須恵器床も確認されている。特に後原第2号古墳は、仕切石の後室（奥壁側）においては敷石がみられ、その隙間に甕の破片を詰めている。また仕切石の前室（羨道側）には入口から入って右手側に甕の破片を敷きつめていた。この前室において須恵器床室が認められたことは、塔の岡第1号古墳と類似している。

さて、これら山澤氏が「権現迫タイプ」とした奥壁から遠い位置に設置した埋葬区画²⁷⁾、特に後原第2号古墳については、後室（奥壁側）において敷石をとまなう。この点からいえば、塔の岡第1号古墳についても南側に敷石が存在した可能性がある。また、これらの古墳については、概ね造営年代が6世紀後半で、ほぼ同時期であることも共通する。

ところで、脇坂光彦氏は仕切石の配置は、追葬にとまなうて行われたと指摘する²⁸⁾。また、多くの事例が示すようにその設置にとまなうて奥壁側に敷石がなされたというのである。本古墳の場合は、それについては解明できなかったが、仕切石の設置にあたっては、奥壁側の埋葬（この場合は追葬）を意識していた以上に、石室内において新たな埋葬空間を設定するという意味が大いにあったのではないかと考えられる。特に本古墳の状況から考えると、仕切石の設置と次に述べる仕切石北側で確認された須恵器床との密接な関連が考えられる。須恵器床が「追葬を行う際に新たな床面をつくった施設」²⁹⁾という考えに立てば、仕切石によって新たに埋葬空間を設定して、床面についてもあらたに設定するという意識が存在したともいえよう。なお、この仕切石の高さは床面から約50cmもあり、まさに障壁となっている。埋葬にあたって、この仕切石については、新たに設置した埋葬空間における奥壁的な意識をもたれたのではないかと考えられる。

さて、仕切石の北側西半部、仕切石から羨道部に一部がかかる範囲に、須恵器床が確認された。甕（50・51）と横瓶（49）の破片を床面に直接敷きつめている。その上半には、杯蓋、杯身が置かれていた。この杯類は合わさった状態ではなく、杯身は伏せた状態、杯蓋は正直と天地道かさの状態出土している。なお、この破片の下から提瓶（45）や杯蓋、杯身の破片が出土しているが、これらについては、追葬時にかたづけられた可能性が高い。

さて、敷きつめられている甕と横瓶は、羨道や墳丘外からも出土しており、墳丘外のある場所で破碎され持ち込まれたと考えられる。また、この上面からは耳環が4点出土しており、一対と考えるならば、この須恵器床上においても追葬が行われている。釘などは出土しておらず、埋葬にあた

っては、布などにくるんだと考えられる。

この横穴式石室における須恵器床という事例については、県内でも内陸部を中心に、特に県北、江の川流域を中心に点在していることが確認されている。

須恵器床の分類としては、近年今西隆行氏がまとめている³⁰⁾。それによれば、A-II 杯・蓋など完形の須恵器を床直に敷くもの、B-I 甕・横瓶などの破片を敷石の隙間に詰めるもの、B-II 甕・横瓶などの破片を床直に敷くもの、である。この分類によれば、第1号古墳の須恵器床はB-II にあてはまろう。今西氏によれば、B-II の類例については、広島県内においては、8例ある。すなわち、双三郡三良坂町植松第3号古墳、同町皇渡古墳、同町見尾山第4号古墳³¹⁾、庄原市中大平古墳³²⁾、高田郡吉田町青山第1号古墳³³⁾、同高宮町後原第2号古墳、同甲田町法恩地南古墳³⁴⁾、同町谷上第1号古墳³⁵⁾、山県郡千代田町立石第2号古墳³⁶⁾である。このうち、植松第3号古墳、中大平古墳、青山第1号古墳、法恩地南古墳については、甕・横瓶などの大型須恵器の破片と伏せた杯類を敷いており、特に植松第3号古墳は仕切石が伴い、本古墳の様相に近い。

すでに指摘されているが、須恵器床に使用される須恵器については、杯類と大型の須恵器ではその出土状況が異なることがあげられる。すなわち、甕・横瓶などは破碎されて敷かれるが、杯類は破碎されず、伏せた状態で置かれていることが多い。これらの須恵器の本来の使用については、蓋や横瓶などは墳頂や石室入口の側面に置かれることが多い。また、後者の杯類は石室内に副葬品として置かれることが多いが、追葬時にかたづけられることが多いことから、追葬の際は杯類は葬送儀礼に再利用されることがほとんどないと考えられる。このことから、須恵器床には本来の意味を失った須恵器が使用されていると言えよう。甕や横瓶など故意に破碎している行為についてもその表れと考えられる。ところで、すでに向田裕始氏は須恵器床について「死者を手厚く葬る思想と、葬送儀式に使用した供献土器や副葬した土器を破碎することによって、“生”から“死”への完全な決別を示す行為」という説を出している³⁷⁾。

なお、須恵器床の意味については、追葬にあたって新たな床面を作った施設であり、最初の埋葬に使用された床面は作り直して再生するという思想が存在したのではないかという考えが提出されている³⁸⁾。今西氏は「地」からの隔離、ひいては地からの悪霊を守る意図で行われたという見方をしているが、塔の岡第1号古墳の事例は、須恵器床は追葬段階で設置されたと考えられることから、むしろ床面を新たに作り直す、あるいは先葬者との隔離、先葬者の霊との隔離を目的とした方がよいのかもしれない。その考え方が正しければ、先述したとおり、仕切石による埋葬区画と同様な思想であったと見なすことができよう。その場合は、仕切石の設置とともに須恵器床が形成されて埋葬が行われたのであろう。

いずれにせよ、塔の岡第1号古墳の事象は、古墳群内で普遍的に見られた埋葬行為であるのか、また、周辺古墳群でも見られる事象なのか、今回確認された事象の評価にあたっては困難をきわめる。なぜなら、町内における横穴式石室の本格的な発掘調査は今回が初めてだからである。今後、周辺における事例の報告をまって、この塔の岡第1号古墳の埋葬区画と須恵器床について評価を試みたい。よってここでは、その現象面を概観するにとどめておく。

以上、塔の岡古墳群のうち、今回発掘調査を実施した塔の岡第1号古墳と第6号古墳について、特徴のある事象について記述してきた。特に第1号古墳における仕切石による埋葬区画が確認されたこと、また須恵器床がみられたことは、両者の類例が増加しただけでなく、県北部、特に江の川流域とのなんらかのつながりが考えられ、今後、当地域の古墳時代を考えていく上で、考慮する必要がある。特に、埋葬区画においては、その類例が江の川流域のうち、高田郡高宮町に多く分布することは、注目に値する。なお、今回触れなかった石室については、白木町内における発掘調査事例の増加をまって、周辺地域との比較検討を行うなど、今後の課題としたい。

注

1. 平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群』I 1996年
2. 中村浩『和泉陶邑窯の研究 ―須恵器生産の基礎的考察―』柏書房 1981年
3. 向田裕始「芸備地方における須恵器生産(1)―古墳時代を中心として―」『芸備古墳文化論考(芸備第15集)』芸備友の会 1985年
4. 坂本美夫『馬具』(考古学ライブラリー34) ニュー・サイエンス社 1985年
5. 花合浩「素環鏡板付轡の編年とその性格」山本清先生喜寿記念論集刊行会編『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』1986年
6. ここでいう石積遺構は従来石刻の範疇に含められたものである。塔の岡第6号古墳の石室前面の状況や石刻とはいえ幾段も礫が積み上げられている状況は、いささか石刻と呼称するには憧れたため、あえて使用している。また、墳丘表面に構築される石刻との区別も意図している。
7. 第6号古墳に類似する事例として、山県郡大朝町龍岩第1号古墳(6世紀末葉頃)がある。これについては、報告者である安田龍太郎氏は、墳丘断面の曲線にあうことなどから、「当初より石積みは露出し、墳丘の裾をあらわしていた」とされている。これについても、墳丘盛土内に隠蔽されていた可能性はある。なお、盛土も円墳状をなしていたとされる状況も第6号古墳に類似する。

安田龍太郎・古瀬清秀「龍着古墳」潮見浩編『龍岩・古保利・上春木埋蔵文化財発掘調査報告書』龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査団 1976年
8. 川越俊一編『土師 土師ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告 1972年度 大迫古墳』土師埋蔵文化財発掘調査団 1973年
9. 向田裕始編『池津第1号古墳発掘調査報告書』広島県比婆郡口和町教育委員会 1979年
10. 恵谷泰典「列石をもつ古墳―広島県内の調査例を中心に―」『研究輯録』Ⅲ 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1993年
11. 恵谷泰典「原田岡山古墳群」藤原彰子編『山陽自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(X) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター・1994年
12. 広島県立可部高等学校史学部「広島県安佐郡可部町給人原第2・3号古墳」『はにわ』11号 1972年
広島県立可部高等学校史学部「広島県安佐郡可部町給人原第8・10号古墳」『はにわ』12号 1973年
広島県立可部高等学校史学研究部『広島県可部町可部古墳群 給人原第9号・第11号古墳』1974年
13. 注8と同じ。

14. 潮見浩編『土師 土師ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告 1969年度』土師埋蔵文化財発掘調査団 1970年
15. 小林利晴『墳丘内に石刻をもつ古墳－岡山県内を中心に－』(1998年10月考古学研究会岡山例会発表資料)
16. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『植松遺跡群』1987年
17. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『皇渡古墳発掘調査報告書』1987年
18. 大上裕士ほか「見尾山古墳群」財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(1) 1994年
19. 潮見浩「広島県高田郡後原古墳群」『日本考古学年報』24(1971年版) 日本考古学協会 1973年
高宮町史編さん委員会編纂『高宮町史 高田郡高宮町 1976年
20. 潮見浩「広島県高田郡成安古墳群」『日本考古学年報』24(1971年版) 日本考古学協会 1973年
高宮町史編さん委員会編纂『高宮町史 高田郡高宮町 1976年
21. 高宮町教育委員会『原山古墳発掘調査概報』1983年
22. 石井隆博「御菌宇龍王山古墳」『芸備』第26集 芸備友の会 1997年
脇坂光彦「御菌宇龍王山古墳の発掘調査」『芸備』第26集 芸備友の会 1997年
23. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『東広島ニュータウン遺跡群』V 1993年
24. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『寺側古墳発掘調査報告書』1995年
25. なお、山澤氏は高田郡高宮町成安第2号古墳、原山古墳については埋葬の区画をなしていないことで除外されているが、一部でも障石が認められる場合についても含めるので、多少考え方が異なっている。また、この埋葬区画に含めている高田郡高宮町後原第1号古墳(1)は、仕切石が閉塞石と接するように確認されている。このような事例については、使用する石の形態や枚数などの差異が認められるが、東広島市高屋町原田岡山第1号古墳(2)、山県郡八千代町七郎谷第2号古墳(3)、福山市加茂町一ノ井手第2号古墳(4)の事例と同様にむしろ玄室と羨道の区別を意識したと捉えられる・ここでは除外する。
 - (1) 注19とおなじ。
 - (2) 注11とおなじ。
 - (3) 小都隆・川越哲志「七郎谷第2号古墳」『注14文献』
 - (4) 福山市教育員会『一ノ井手古墳群発掘調査報告』1982年
26. 高宮町教育委員会『権現迫古墳発掘調査報告』1994年
27. 注23とおなじ。
28. 脇坂光彦「広島県の横穴式石室の地域相(2)」財団法人広島県埋蔵文化財発掘調査センター『研究輯録』IV 1996年
29. 注28とおなじ。
30. 今西隆行「屍床の研究－須恵器床を中心として－」『文化財学論集』奈良大学文学部文化財学科 1994年
31. 注18とおなじ。
32. 金井亀喜「中大平古墳」『日本考古学協会』25(1972年版) 日本考古学協会 1974年
33. 小都隆「先史時代の高田郡」『高田部史』上巻 高田郡町村会 1972年
34. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『法恩地南古墳』1984年
35. 広島県教育委員会・甲田町教育委員会『谷上第1号古墳緊急調査概報』1983年
36. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』(I) 1997年
37. 注20とおなじ。
38. 注28とおなじ。

《付編》

塔の岡古墳群第1号・第6号古墳出土遺物に関する自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

塔の岡古墳群は、太田川支流の三篠川と関川、日浦川が合流する付近の丘陵尾根上に立地し、標高約176mを測る。これまでの調査により、6世紀後半～7世紀前半の横穴式石室を主体部とする古墳9基が確認されている。

このうち、第1号古墳では、墳丘より須恵器の長頸壺(42)と提瓶(46)が出土しており、供献土器とみられている。それらの器形から、液体が入っていたことが想像されるが、肉眼で見る限り、その痕跡は認められない。また、第6号古墳では、羨道の封鎖石(閉塞石)付近で土師器の長頸壺(255)や轆(257)などの副葬品が認められ、この土器内にも植物(作物など)や液体(水など)が供えられ、その痕跡が残留している可能性が想定された。

そこで、これらの土器の内容物に関する情報を得るために、珪藻分析と土壤理化学分析を実施することとした。さらに、栽培植物などの痕跡を確認するために、花粉分析と植物珪酸体分析を行う。

1. 試料

調査対象は、第1号古墳の長頸壺(42)と提瓶(46)、および第6号古墳の長頸壺(255)を充填する土壌である。試料は、各土器内の上・中・下部(最下部)より採取され、また比較試料として、周辺部の土壌が採取された。これらから、土器内の中・下部を中心に珪藻分析6点、土壤理化学分析8点、花粉分析2点、植物珪酸体分析2点の分析試料を選択した(表1)。

表1 分析試料

遺物名	試料名	D	土理	P	PO
第1号古墳 長頸壺(42)	上部				
	中部	●	●		
	最下部	●	●		
	比較試料				
第1号古墳 提瓶(46)	上部				
	中部	●	●		
	最下部	●	●		
	比較試料		●		
第6号古墳 長頸壺(255)	上部				
	中部	●	●	●	●
	最下部	●	●	●	●
	比較試料		●		
分析点数		6	8	2	2

●は分析試料、Dは珪藻分析、土理は土壤理化学分析、Pは花粉分析、POは植物珪酸体分析

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で約7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000で行い、メカニカルステージで任意の側線に沿って走査し、珪藻殻が半

分以上残存するものを対象として、200 個体以上同定・計数する。種の同定は、K.Kramme and Lange – Bertalot (1986・1988・1991a・1991b), K.Krammer (1992) などを用いる。

(2) 土壌理化学分析

今回は、有機物の痕跡である炭素や窒素、リン酸の含量を測定するとともに、塩類濃度の測定も行うこととした。そこで、有機化合物の指標として全リン酸・全炭素・全窒素の含量測定、塩類濃度の指標として pH (H₂O)・電気伝導度 (EC)・交換性塩基の測定を選択した。

全リン酸の含量測定は、硝酸・過塩素酸分解－バナトモリブデン酸比色法 (土壌養分測定法委員会, 1981), 全炭素と全窒素含量測定は CHNS/O アナライザー法 (土壌環境分析法編集委員会, 1997), pH (H₂O) はガラス電極法 (土壌標準分析・測定法委員会, 1986), 電気伝導度 (EC) は白金電極法 (土壌標準分析・測定法委員会, 1986), 交換性塩基はショーレンベルガー法 (土壌養分測定法委員会, 1981) でそれぞれ行った。

以下に、各項目の分析方法を示す。

・分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して 2mm 目の篩で篩別する。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。105℃で 4 時間乾燥し、分析試料の水分量を求める (加熱減量法)。

また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm の篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。さらに、風乾細土試料の一部をタングステンカーバイド粉碎機で粉碎し、微粉碎試料を作成する。

・pH (H₂O)

風乾細土 10.0g を秤量し、25ml の蒸留水を加え、ガラス棒で掻拌する。30 分間放置した後、再びガラス棒で懸濁状態とし、pH メーター (ガラス電極法) で pH (H₂O) を測定する。

・全リン酸含量

風乾細土 1.00g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸 (HNO₃) 5ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸 (HClO₄) 10ml を加えて、再び加熱分解を行う。分解が終了した後、蒸留水で 100ml に定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液 (バナトモリブデン酸・硝酸液) を加えて、分光光度計によりリン酸 (P₂O₅) 濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりの全リン酸含量 (P₂O₅mg / g) を求める。

・全炭素・全窒素含量

微粉碎試料 100g 前後をスズカプセルに精秤し、CHNS/O 元素分析装置 (PERKIN ELMER 2400 II) に挿入する。挿入した試料を酸素気流中で高温燃焼させ、燃焼生成したガスをフロントルクロマトグラフ法により展開し、熱伝導度検出器 (TCD) で測定する。測定値と加熱減量法で求めた試料中の水分量から、乾土あたりの炭素量 (T-C%) と窒素量 (T-N%) を求め、同時に C/N 比を算出する。

・電気伝導度 (EC)

風乾細土 10.0g を秤量し、50ml の蒸留水を加え、振とう (1 時間) する。振とう後、すみやかに EC メーター (白金電極法) で電気伝導度を測定する。

・交換性塩基

風乾細土試料5.00gを、浸透カラムに秤量する。これをCEC測定用の土壤浸出装置に装着し、1N酢酸アンモニウム溶液(pH7.0)100mlを加え、4~20時間で置換洗浄し、交換性塩基を浸出させる。交換浸出液全量を200mlメスフラスコに入れ、水で定容とする。定容液の一定量を採取し、適宜希釈し、干渉抑制剤を添加した後、原子吸光光度計によりカルシウム、マグネシウム、ナトリウム、カリウムを定量する。これら定量値と加熱減量法で求めた試料中の水分から、乾土あたりの交換性塩基含量(me/100g)を求める(me:mg当量)。

(3) 花粉分析

試料を湿重で約20g秤量し、水酸化カリウム処理、篩別(250 μ m)、重液分離(臭化亜鉛、比重2.3)、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理(無水酢酸:濃硫酸=9:1)の順に物理・化学的な処理を施して、花粉・孢子化石を分離・濃集する。処理後の残澄をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

(4) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70w, 250KHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入して、プレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)、および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を含む組織片について、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

3. 結果

(1) 珪藻化石の産状

同定結果は、海水生種、海水~汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す(表2)。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。各試料からの珪藻化石の産出は、非常に少ない。産出種は、*Hantzshia amphioxys*, *Navicula mutica*, *N. saxophila*, *Pinnularia borealis* など、陸上で多少の湿り気がある好気的環境に付着生育する陸生珪藻に限定される。

表2 土器内埋土の珪藻分析結果

種類	生態系			環境指標種	第1号古墳				第6号古墳	
	塩分	pH	流水		長頸壺(42)		堤瓶(46)		長頸壺(255)	
					中部	最下部	中部	下部	中部	下部
Hantzschia amphioxys(Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	—	—	1	2	—	1
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	—	1	—	4	1	—
Navicula saxophila Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	—	—	—	1	—	—
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	—	3	8	2	2
海水生種合計					0	0	0	0	0	0
海水-汽水生種合計					0	0	0	0	0	0
汽水生種合計					0	0	0	0	0	0
淡水-汽水生種合計					0	0	0	0	0	0
淡水生種合計					1	1	4	15	3	3
珪藻化石総数					1	1	4	15	3	3

凡例

H.R.: 塩分濃度に対する適応性 pH: 水素イオン濃度に対する適応性 C.R.: 流水に対する適応性
 ogh-ind: 貧塩不定性種 al-il: 好アルカリ性種 ind: 流水不定性種
 ind: pH不定性種

環境指標種

S: 好汚濁性種 U: 広適応性種 (以上は Agal, K. & Watanabe, T.1995)
 R: 陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, 伊藤・堀内, 1991)

(2) 土壌の理化学的性質

結果を表3に示す。以下に、各項目の測定結果について述べる。

・土性・土色

土器内の土壌は、いずれも礫を含む褐色系の砂質土である。

・pH (H₂O)

全試料で、4.7~4.9と低い傾向が認められ、弱酸性を呈する。

・全リン酸含量

全試料で、0.27~0.35mg/gと著しく低く、試料間での差は認められない。

・全炭素・全窒素含量

全炭素は0.26~0.65%, 全窒素は0.02~0.03%と著しく低い傾向にある。試料間でわずかながらの差が認められるものの、有意差とは判断しがたい。

また、C/N比は第1号古墳の長頸壺(42)以外で21.1~23.3とやや高い傾向が認められる。

・電気伝導度(EC)

pHと同様に、全試料で1.68~2.28mS/mの値を示し、低い傾向にある。

表3 土器内埋土の土性・土色

試料名		土性	土色
第1号古墳 長頸壺(42)	中部	LS	10YR4/6 褐
	最下部	LS	10YR5/6 黄褐
第1号古墳 堤瓶(46)	中部	LS	10YR4/4 褐
	下部	SL	10YR4/4 褐
	比較試料	SL	10YR4/4 褐
第6号古墳 長頸壺(255)	中部	SL	10YR4/3 にぶい黄褐
	下部	SL	10YR4/4 褐
	比較試料	L~CL	10YR4/6 褐

土性: 土壌調査ハンドブック(ペドロシスト懇談会編・1984)の野外土性による。

L: 壤土(粘土0~15%, シルト20~45%, 砂40~65%)

SL: 砂壤土(粘土0~15%・シケト0~35%・砂65~85%)

LS: 壤質砂土(粘土0~15%, ソルト0~15%, 砂85~95%)

CL: 埴壤土(粘土15~25%, シルト20~45%, 砂3~65%)

土色: マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修, 1967)による。

表4 土器内埋土の土壤理化学分析結果

試料名		pH (H ₂ O)	EC mS / m	全リン酸 mg / g	全炭素 %	全窒素 %	C / N
第1号古墳 長頸壺 (42)	中部	4.8	2.18	0.27	0.32	0.02	18.8
	最下部	4.8	2.17	0.29	0.26	0.02	17.4
第1号古墳 堤瓶 (46)	中部	4.8	1.68	0.31	0.36	0.02	21.1
	下部	4.7	1.83	0.30	0.53	0.02	21.9
	比較試料	4.7	2.07	0.34	0.59	0.03	21.8
第6号古墳 長頸壺 (255)	中部	4.8	2.00	0.35	0.65	0.03	22.4
	下部	—	—	0.31	0.56	0.02	23.3
	比較試料	4.9	2.28	0.28	0.53	0.03	21.2
試料名		交換性塩基				備考	
		CaO me / 100g	MgO me / 100g	Na ₂ O me / 100g	K ₂ O me / 100g		
第1号古墳 長頸壺 (42)	中部	0.0	0.1	0.0	0.1		
	最下部	0.0	0.1	0.0	0.2		
第1号古墳 堤瓶 (46)	中部	0.0	0.1	0.0	0.1		
	下部	0.0	0.1	0.0	0.1		
	比較試料	0.0	0.1	0.0	0.1		
第6号古墳 長頸壺 (255)	中部	0.1	0.6	0.0	0.2		
	下部	0.0	0.6	0.0	0.2	土器片有	
	比較試料	0.0	0.3	0.0	0.2		

・ 交換性塩基

各塩基成分ともに著しく低い値であり、ほとんど含まれていないに等しい。

(3) 花粉化石の産状

2試料ともに花粉化石は検出されず、保存状態が著しく悪いシダ類胞子が認められるに過ぎない。そのため、結果表は作成せず、検出個数を述べるに止める。

2試料からはいずれもシダ類胞子が検出され、壺内埋土中部で32個体、下部で31個体が見られた。これらのシダ類胞子は溶解したり、壊れていたりする。

(4) 植物珪酸体の産状

結果を表5に示す。なお、検出された植物珪酸体の保存状態が悪いために、土壤中で溶解・消失している可能性がある。そのため、植物珪酸体組成を求めると結果が歪曲される」とが考えられるので、今回は検出個数を一覧表に示すに止める。

第6号古墳の長頸壺 (255) (中・下部) より採取された土壌からは、作物に由来する組織片が全く認められず、保存状態の悪いタケ亜科などがみられるに過ぎない。

表5 土器内埋土の植物珪酸体分析結果

種類	第6号古墳 長頸壺 (255)	
	試料名 中部	下部
イネ科葉部短細胞珪酸体		
タケ亜科	211	212
不明ダンチク型	6	3
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
タケ亜科	102	109
不明	4	6
合計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	217	215
イネ科葉身機動細胞珪酸体	106	115
総計	323	330

4. 考察

第1号古墳で出土した須恵器の長頸壺(42)と提瓶(46)、および第6号古墳の土師器の長頸壺(255)では、水の存在を示唆する珪藻化石は全く認められず、陸上の好気的環境に生育する陸生珪藻がわずかに認められるに過ぎなかった。そのため、遺物埋積土とともに土器内に二次的に混入した可能性がある。

また、土器内の土壌はいずれも礫を含む砂質土であり、土壌の緩衝能および吸着能の低いことがうかがえる。また、有機物の指標である全リン酸、全炭素、全窒素も著しく低い値である。土器内外の土壌で差が認められず、有機物が富化されたとは考えにくい。

さらに、塩類濃度の指標であるpH(H₂O)は4.7~4.9の弱酸性を示し、電気伝導度も1.68~2.28 mS/mと極めて低い値であることから、交換性塩基がほとんど含まれないと考えられる。これらから、土器内および外部の土壌中に塩類の富化を指摘できなかった。

これらの結果を考慮すると、土器内の測定値は出土地点の土壌の基本的性質を反映したものであり、長頸壺(42・255)や提瓶(46)の内容物の痕跡が残留していたとは考えにくい。なお、塩類や有機物の富化が無いとすれば、アルコール類や淡水など蒸発しても痕跡が残らないものが入れられていた可能性も考えられる。

また、第6号古墳の長頸蓋(255)内の中・下部より採取された土壌からは、イネやキビ類、ソバなどの栽培植物に由来する微化石は認められず、保存状態の悪いシダ類孢子やタケ亜科の植物珪酸体が認められたただけであった。前述のように、土器内の土壌は二次的に混入した可能性があり、検出された種類も珪藻化石と同様に流入したものと思われる。そのため、今回の結果をみる限り、イネ科作物などが供献されたとは考えにくい。

今回のような液体を入れた可能性があるとする土器の内容物について、自然化学的に検証した調査例は少なく、調査・分析手法の選択も十分に確立されているわけではない。今後とも、手法の選択を変えることもふくめて、資料の蓄積を図っていくことが課題である。

<引用文献>

土壌標準分析・測定法委員会編(1986)土壌標準分析・測定法.354p., 博友社.

土壌環境分析法編集委員会編(1997)土壌環境分析法.427p., 博友社.

土壌養分測定法委員会編(1981)土壌養分分析法.440p., 養賢堂.

伊藤良永・堀内誠示(1991)陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.珪藻学会誌, 6, p.23-45.

近藤鍊三・佐瀬 隆(1986)植物珪酸体分析, その特製と応用.第四紀研究, 25, p.31-64.

Krammer, K.(1992)PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. p.1-353.BERLIN・STUTTGART.

Krammer, K.and Lange-Bertalot, H.(1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K.and Lange-Bertalot, H.(1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae. Bacillariaceae, Surirellaceae. Band2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange – Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2 / 3 von : Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange – Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) and Gomphonema. Band 2 / 4 von : Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

白木町内出土陶質土器

所有者 鳴戸快三氏

出土場所 広島市安佐北区白木町井原 5691 番地

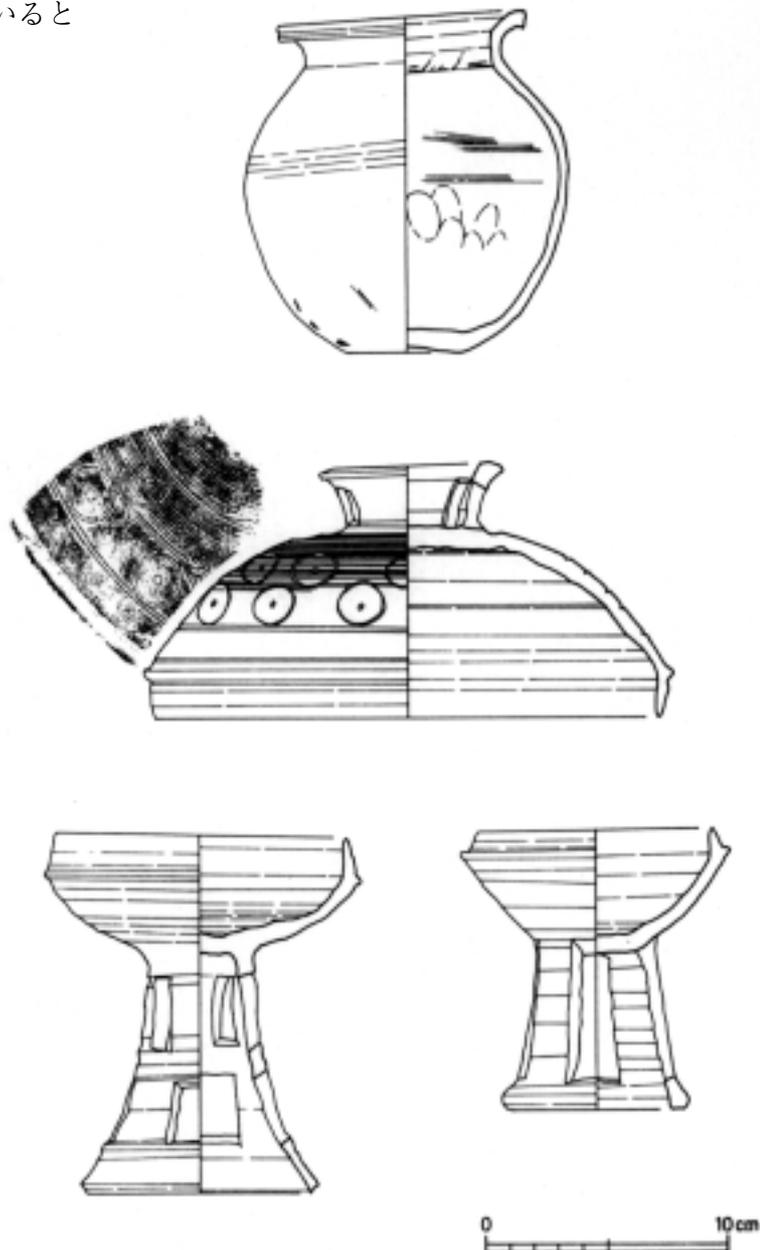
白木町井原において、三篠川が大きく西に曲流する大寺地区の、眼前に氾濫原を一望できる丘陵先端部に位置する。丘陵の旧状は、もう少し東に延びて、裾部が三篠川の流に洗われていたと考えられるが、現在は直近を走る J R 芸備線や旧県道の建設によって、急斜面の法上といった様相を呈している。

発見の経緯 所有者の鳴戸快三氏の話では、昭和12年の秋頃、先代の鳴戸鶴一氏（故人）が自宅を新築するため、旧宅地先の丘陵先端部を削平した際に発見されたらしいが、詳しい出土状況は伝え聞いていないとのことである。

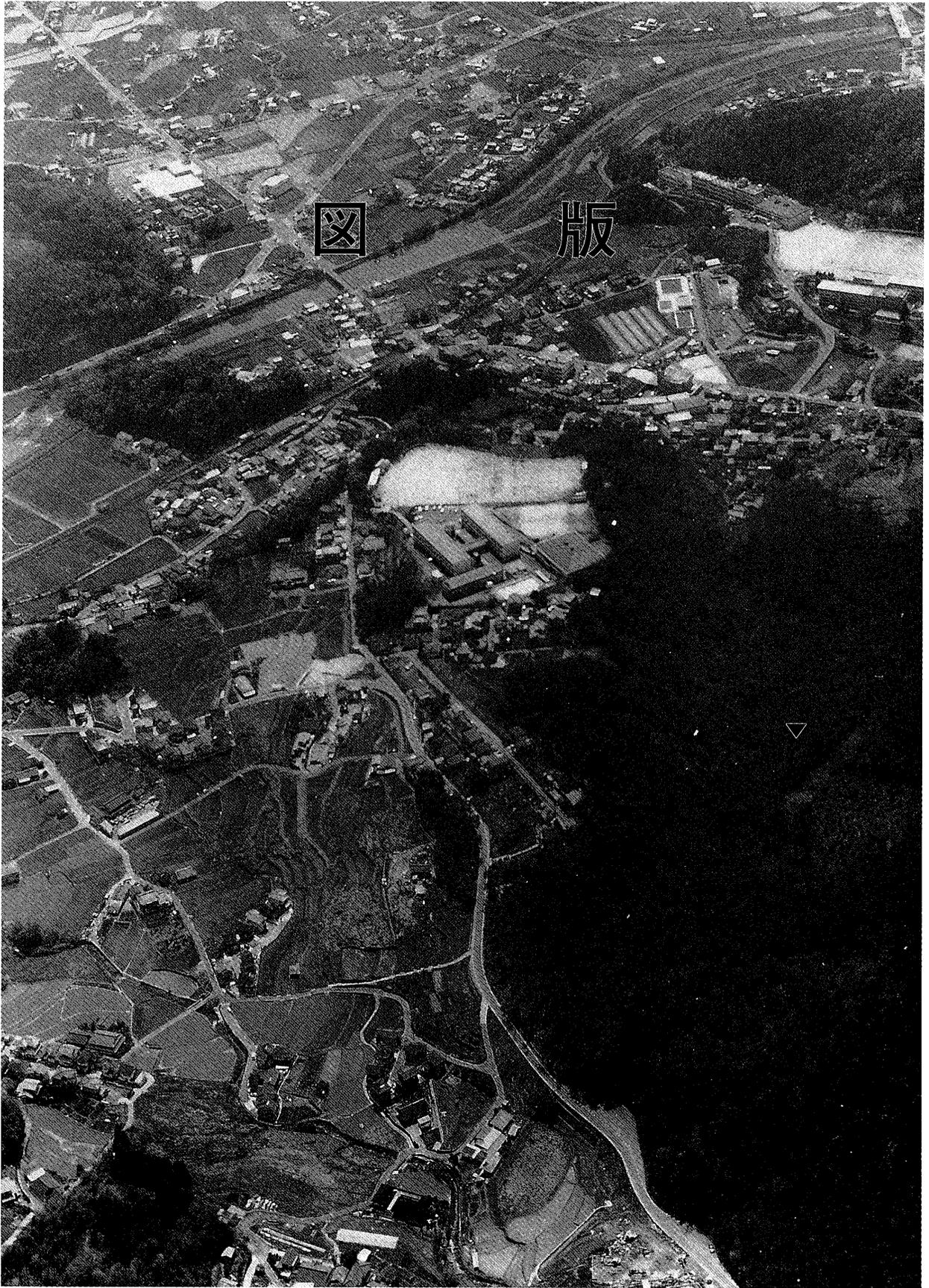
なお、今回報告の4点以外にも土器が残されていたらしいが現在は消失しているとのことである。



第 28 図 陶質土器出土位置図
(S = 1 : 50,000)



第 29 図 白木町内出土陶質土器実測図 (S = 1 : 3)



塔の岡古墳群（航空写真・北西から）



塔の岡第1号古墳・第6号古墳（航空写真・南東から）



a 第1号古墳全景（北から）



b 第1号古墳全景（西から）



a 第1号古墳石積遺構（北から）



b 第1号古墳石積遺構（西から）



a 第1号古墳石室天井石（北から）



b 第1号古墳石室全景（北から）



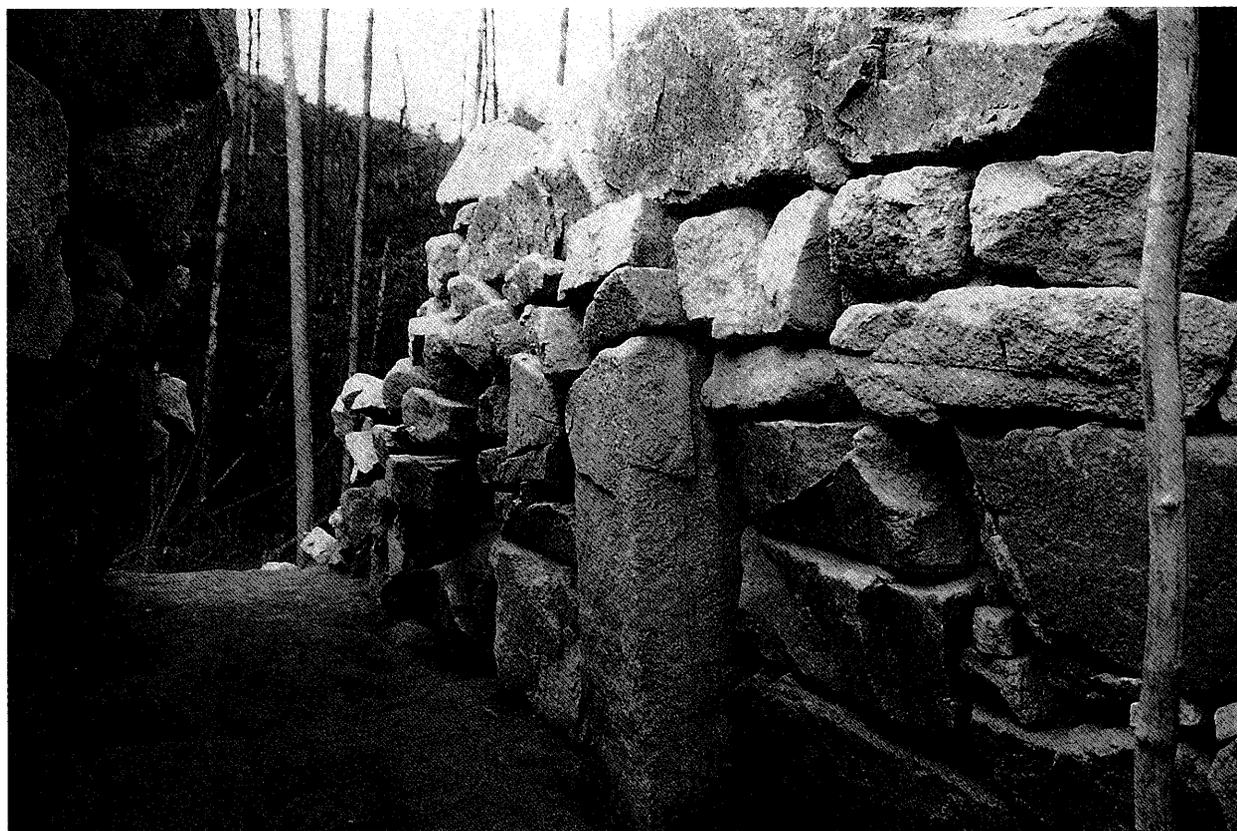
a 第1号古墳石室奥壁（北から）



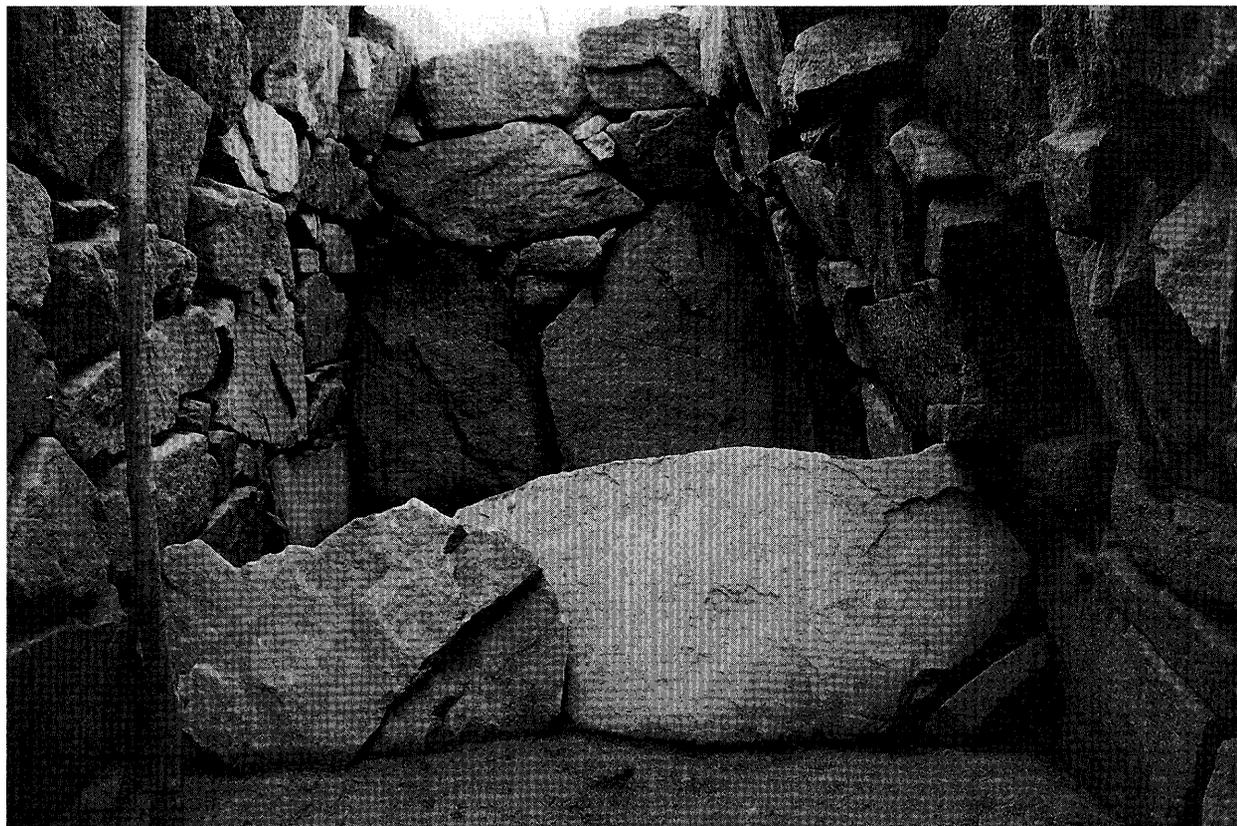
b 第1号古墳石室西側壁（北東から）



a 第1号古墳石室東側壁（北西から）



b 第1号古墳石室袖石（南西から）



a 第1号古墳石室内仕切石（北から）



b 第1号古墳石室羨道閉塞石（東から）

a 第1号古墳石室内遺物出土状況(南から)



b 第1号古墳石室仕切石南遺物出土状況(西から)



a 第1号古墳石室須恵器床（東から）



b 第1号古墳石室羨道遺物出土状況（西から）



a 第6号古墳調査前（南東から）



b 第6号古墳全景（南東から）



a 第6号古墳石積遺構（南東から）



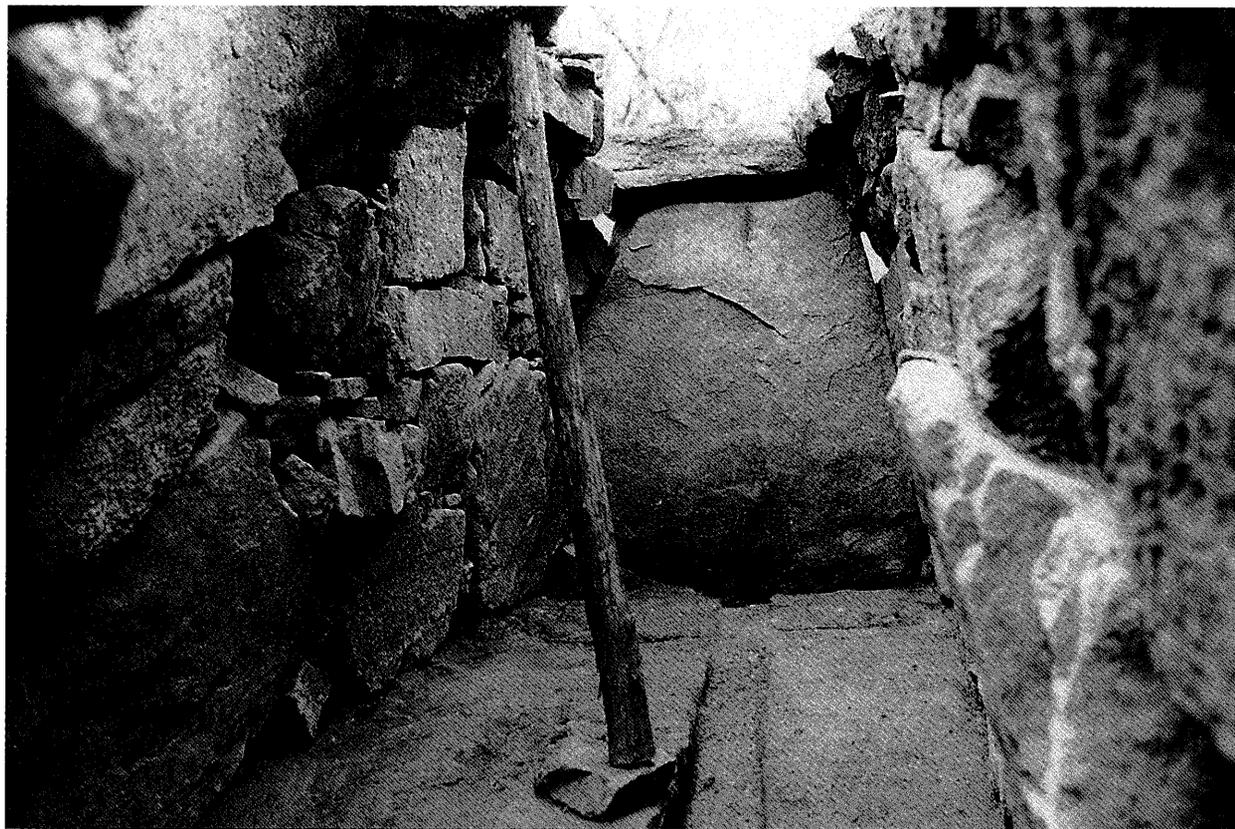
a 第6号古墳石積遺構（南から）



a 第6号古墳石室天井石（南東から）



b 第6号古墳石室奥壁（南東から）



a 第6号古墳石室西側壁（南東から）



b 第6号古墳石室東側壁（南から）

a 第6号古墳石室床面（北西から）



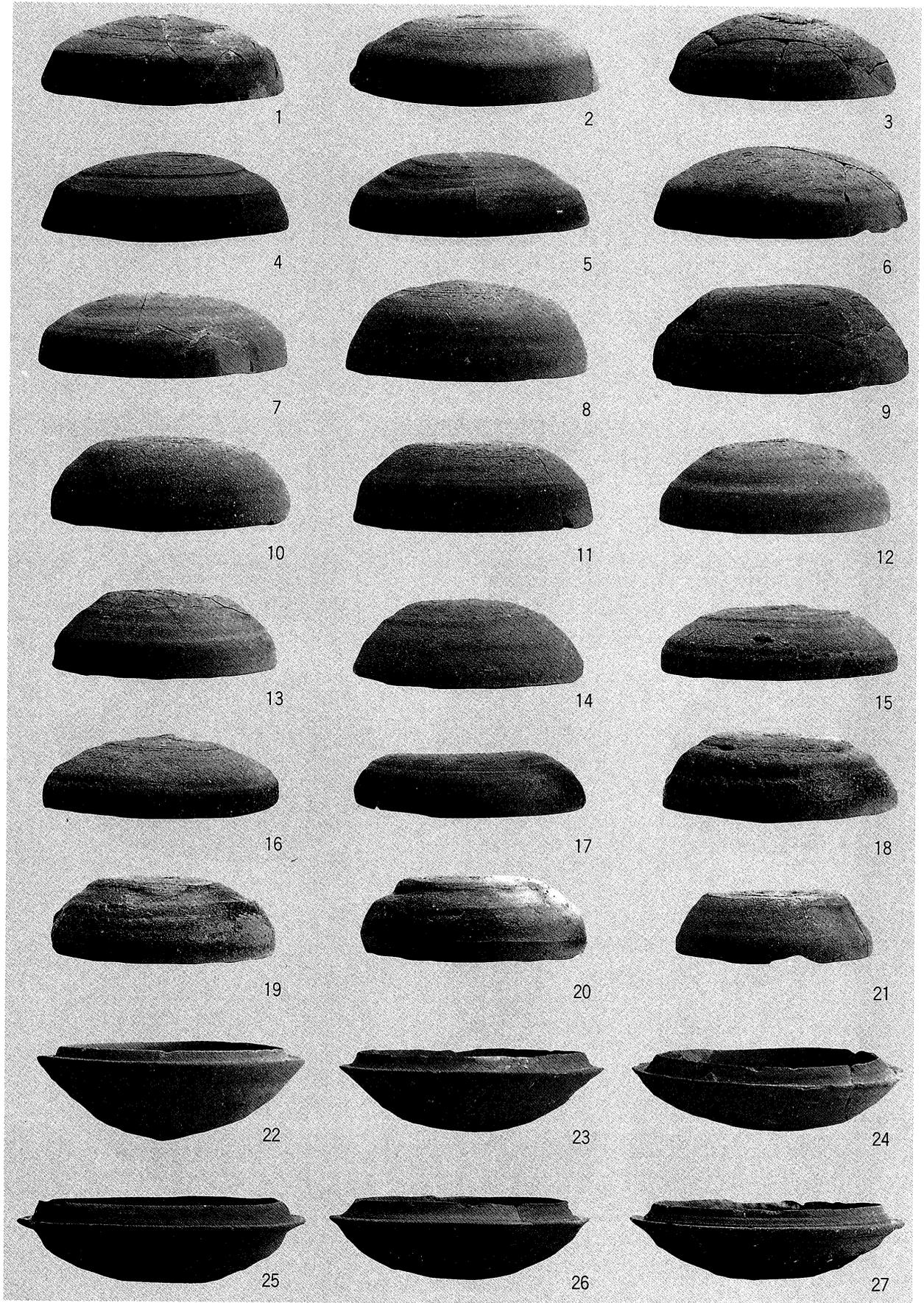
b 第6号古墳石室閉塞石（北東から）



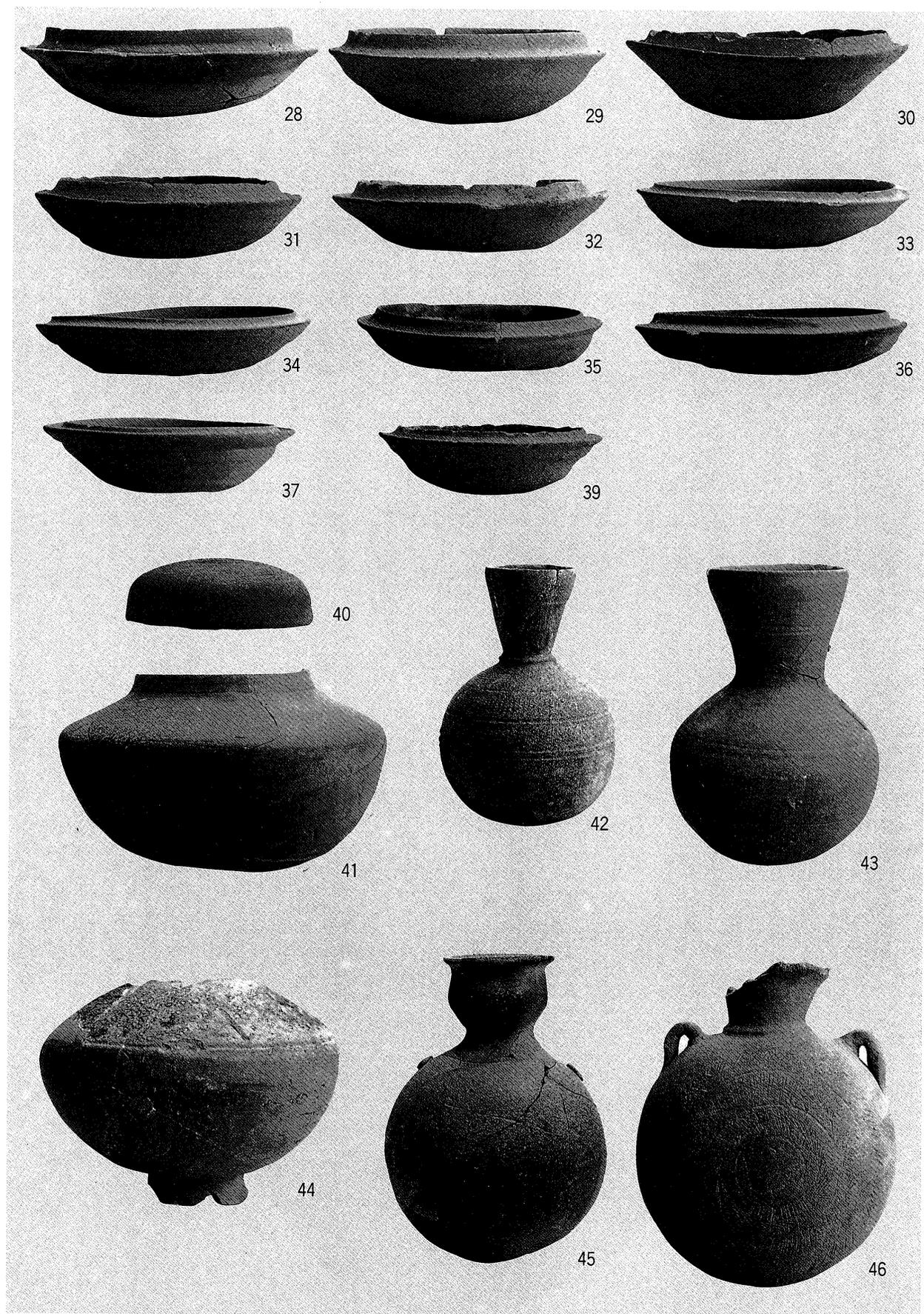
a 第6号古墳石室内遺物出土状況（南から）



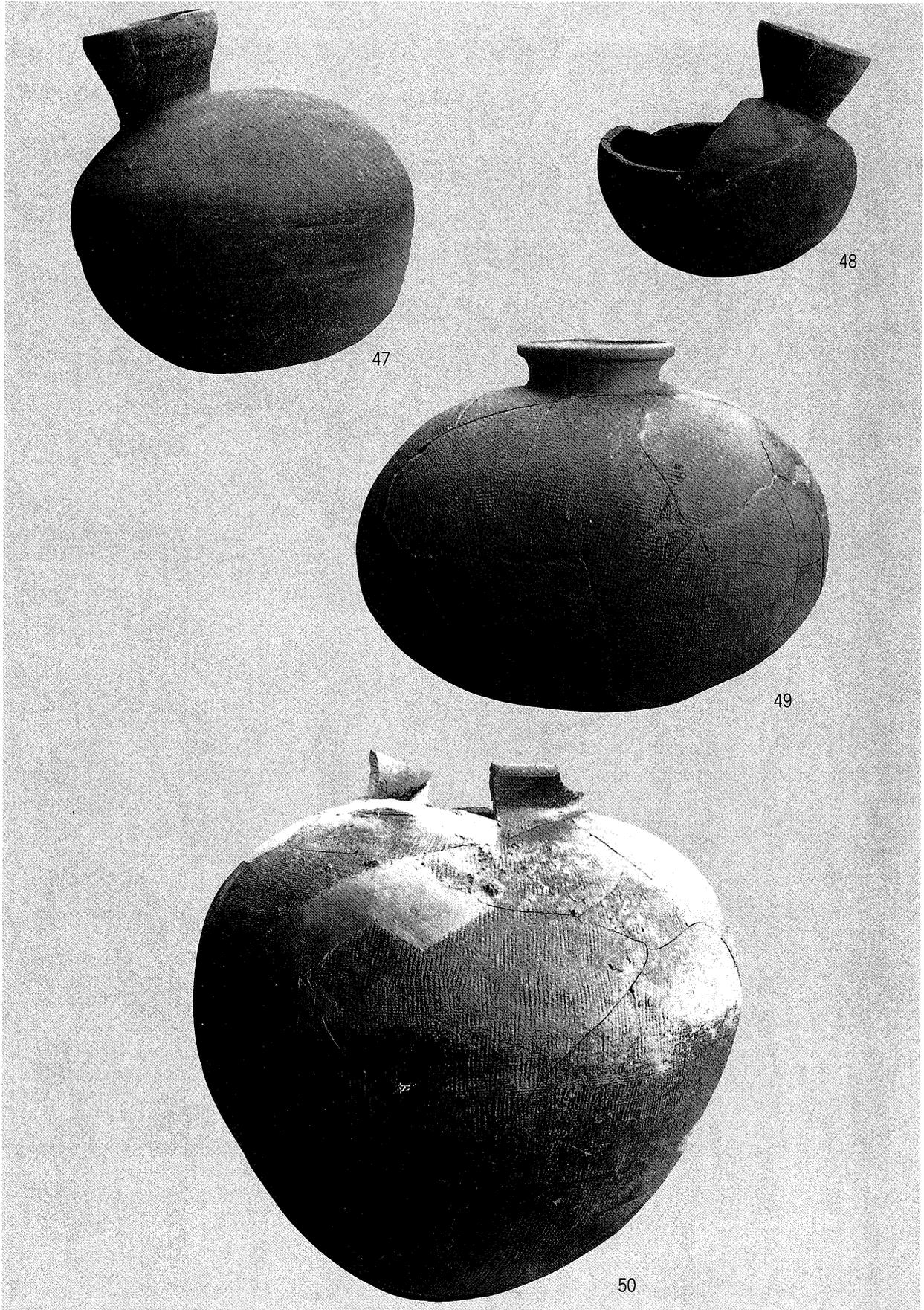
b 第6号古墳周溝遺物出土状況（南から）



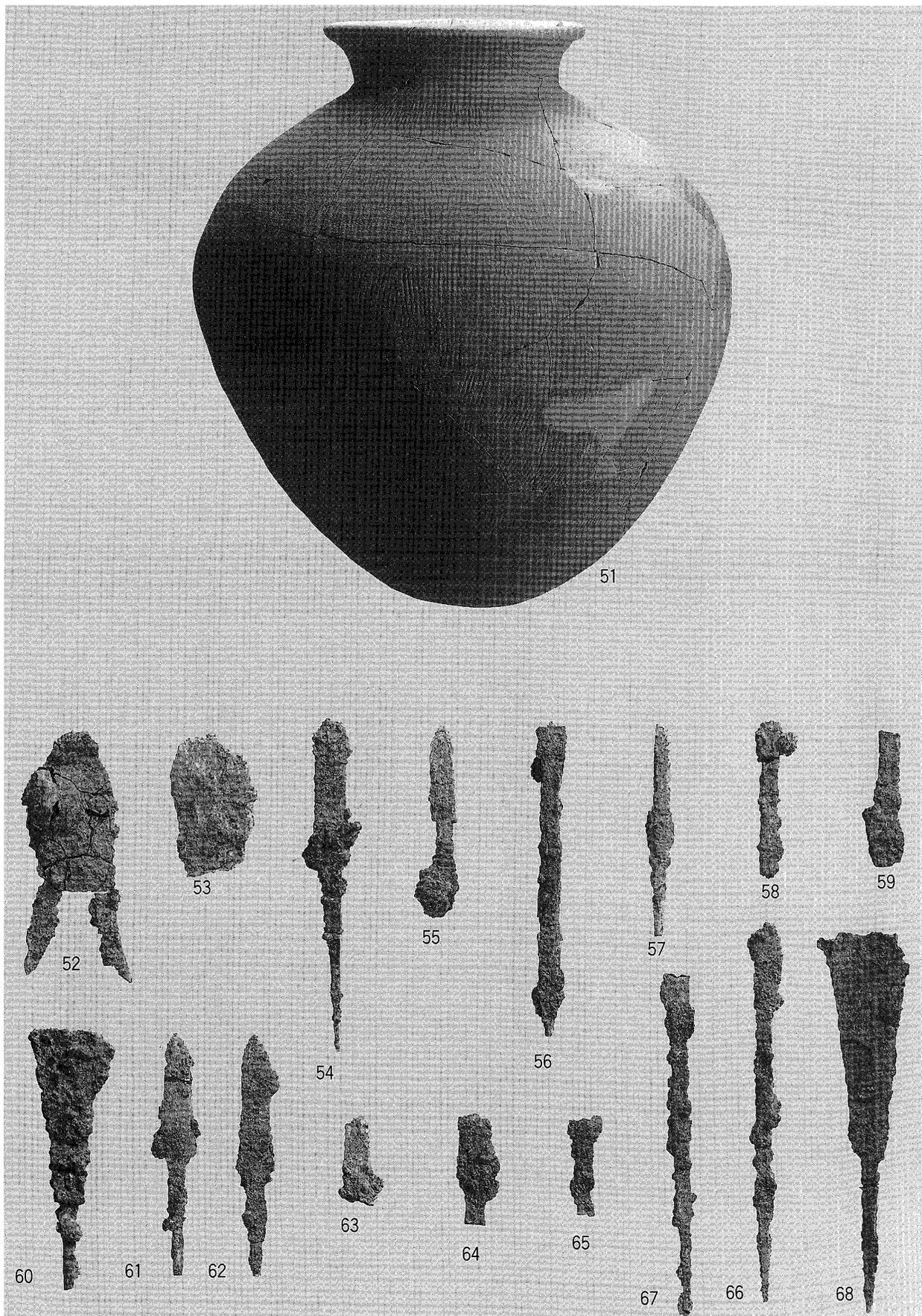
出土遺物(1)



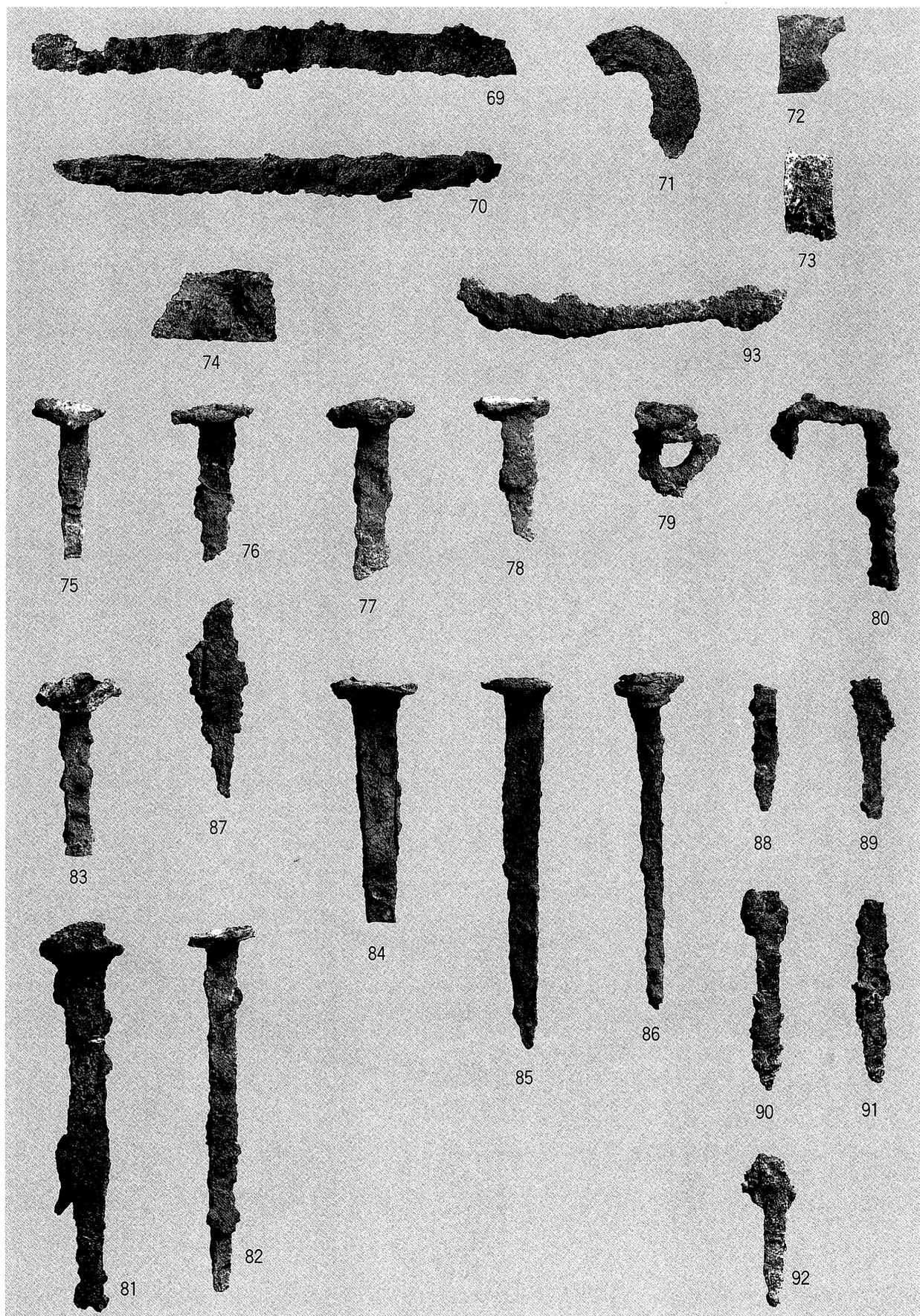
出土遺物(2)



出土遺物(3)



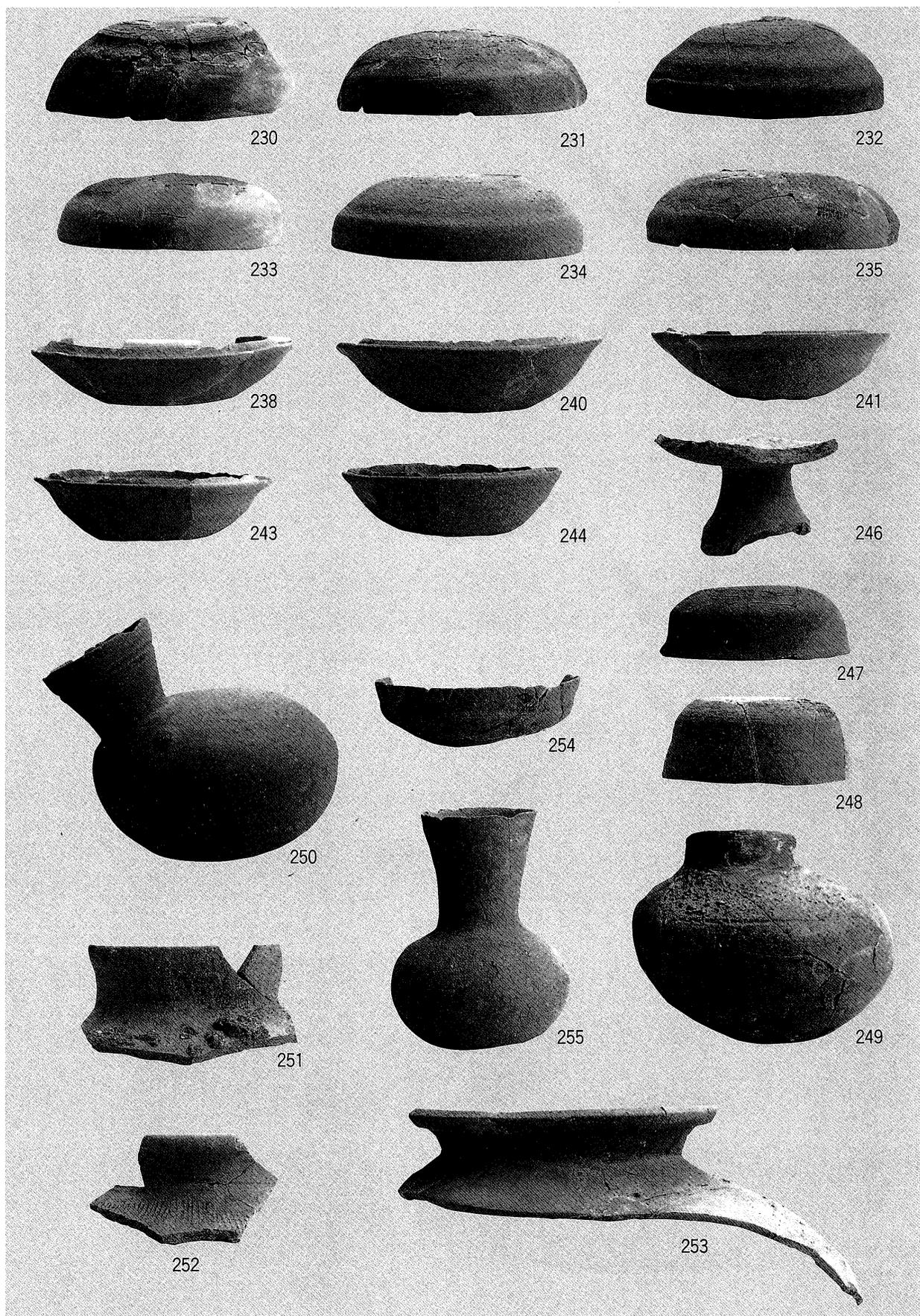
出土遺物(4)



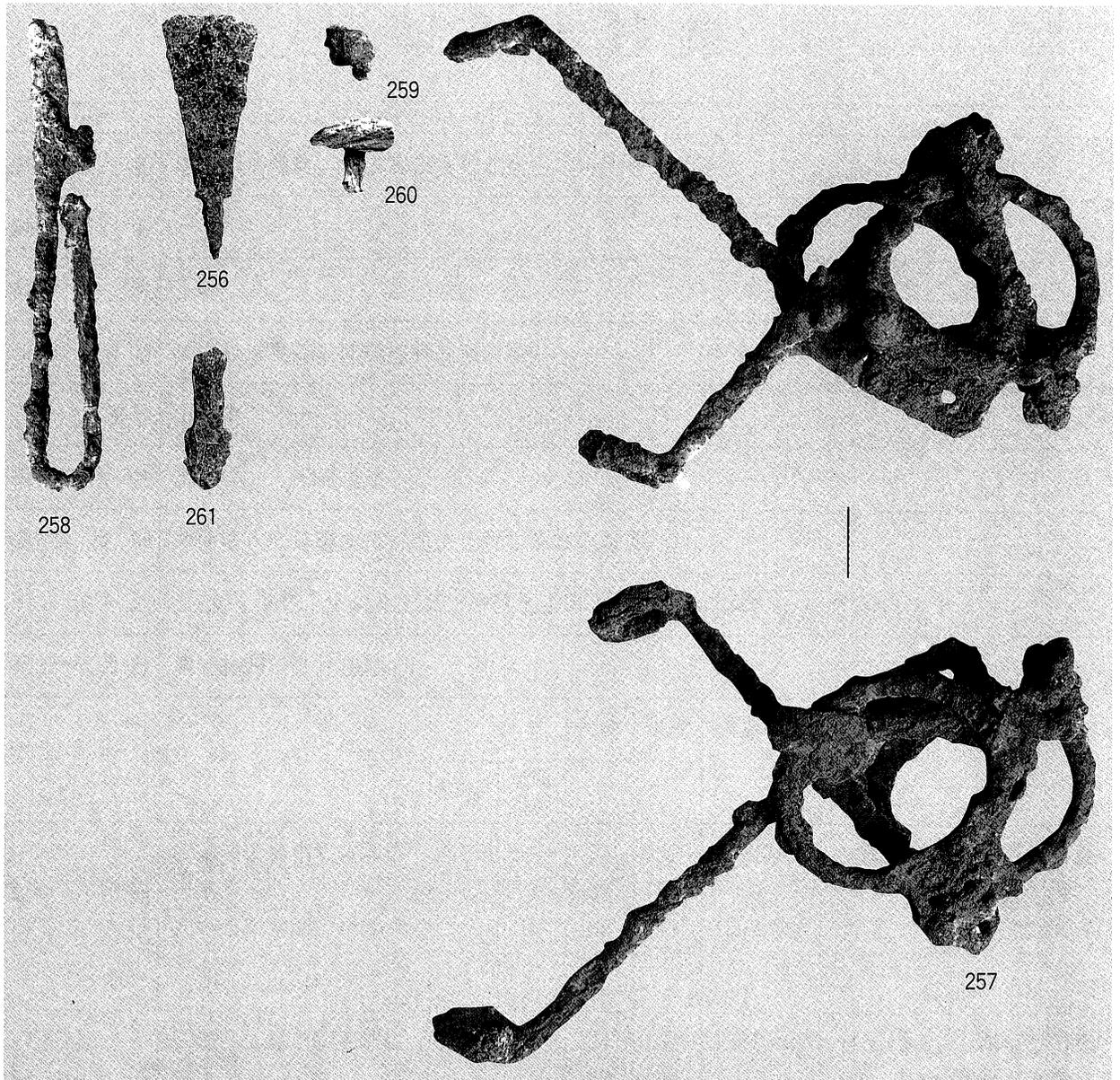
出土遺物(5)



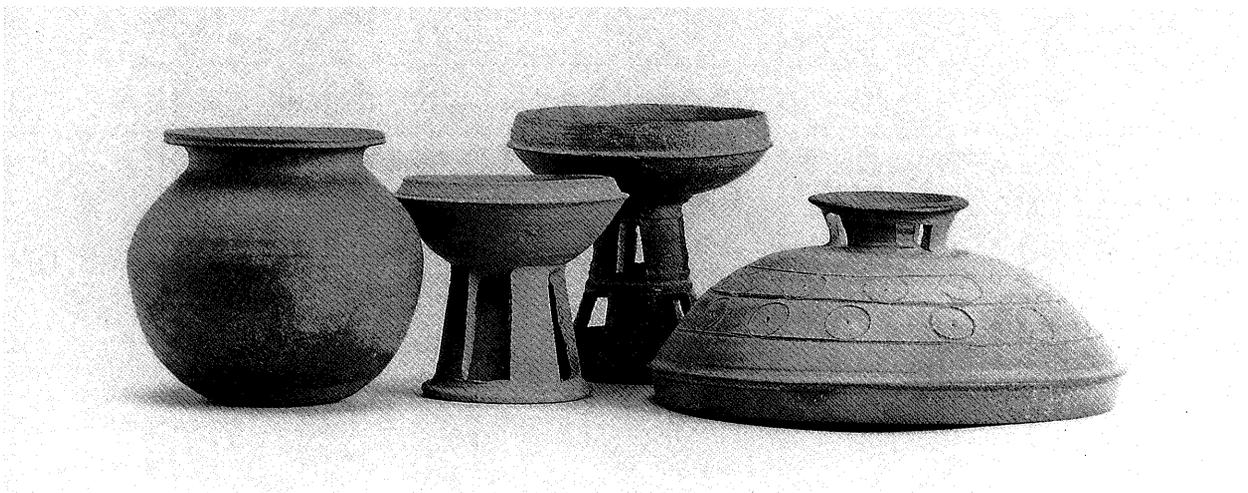
出土遺物(6)



出土遺物(7)



出土遺物(8)



白木町内出土陶質土器

報告書抄録

ふりがな	とうのおかこふんぐん -ひろしましあさきたくしらしきょうしょざい-								
書名	塔の岡古墳群 -広島市安佐北区白木町所在-								
副書名									
巻次									
シリーズ名	財団法人広島市文化財団発掘調査報告書								
シリーズ番号	第2集								
編著者名	高下洋一・田村規充								
編集機関	財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課								
所在地	〒730-0812 広島県広島市中区加古町4番17号 アステールプラザ内								
発行年月日	西暦1999年3月19日								
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°	′	″	°	′	″
とうのおか 塔の岡 第1号古墳	ひろしまけんひろしましあさみなみく 広島県広島市安佐南区 しらきちょう 白木町 おおあざいちかわあざふしやま 大字市川字節山1406-2	34106	—	34°	132°	20000427	450m ²	白木町市川農 道改良工事に 伴う発掘調査	
				33′	39′	}	20000721		
とうのおか 塔の岡 第6号古墳	ひろしまけんひろしましあさみなみく 広島県広島市安佐南区 しらきちょう 白木町 おおあざいちかわあざふしやま 大字市川字節山1406-2	34106	—	34°	132°	20000427	450m ²	白木町市川農 道改良工事に 伴う発掘調査	
				33′	39′	}	20000721		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
塔の岡 第1号古墳	古墳	古墳時代	円墳1基	須恵器 鉄製品 装飾品		墳丘盛土内に石積遺構が巡る 石室内には仕切石による埋葬区画が なされ、また一部に須恵器床が認め られる			
塔の岡 第6号古墳	古墳	古墳時代	方墳1基	須恵器 鉄製品		墳丘盛土内に石積遺構が巡る			

(財)広島市文化財団発掘調査報告書 第2集

塔の岡古墳群

— 広島市安佐北区白木町所在 —

1999年3月

編集発行 財団法人広島市文化財団

広島市中区加古町4番17号

TEL (082) 248-0427

印刷 株式会社 中本本店

広島市中区東白島町13-15